

よこ ろ かわ らけ づち
横路遺跡（土器土地区）

下府川河川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年10月

島根県浜田土木建築事務所
島根県浜田市教育委員会

横路遺跡(土器土地区) 正誤表

ページ	行	正誤個所
36	1	8,885点→8,887点
40	20	椀 類→椀Ⅱ類
49	11	昭和58年→昭和63年
49	13	昭和58年→昭和63年



巻頭図版1 国府地区遠景（北より）



巻頭図版2 横路遺跡（土器土地区）全景（南西より）



巻頭図版3 調査区遠景 (西より)



巻頭図版4 調査区全景



巻頭図版 5 浜田地震（1872年）による噴砂



巻頭図版 6 浜田地震（1872年）による噴砂



卷頭図版7 1947年極東米空軍撮影空中写真

1 横路遺跡 (土器土地区)	4 宮宅山遺跡
2 横路遺跡 (原井ヶ市地区)	5 上府遺跡
3 古市遺跡	6 伊甘神社脇遺跡
	7 川向遺跡

序

島根県浜田土木建築事務所においては、昭和63年の豪雨出水により大きな被害を受けた二級河川下府川沿いに、救援物資の補給地点としても利用でき、また、水防活動の拠点となる河川防災ステーションの建設を平成7年度～平成8年度の計画として進めています。

この建設に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意し関係機関と協議しながら進めていますが、どうしても避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担により必要な調査を実施し記録保存を行なっています。

本報告書は平成8年度に実施した横路遺跡の調査の結果をとりまとめたものであります。

本書が郷土の歴史に関する貴重な資料として、学術研究ならびに学校教育や生涯学習のためにも広く活用されることを期待するとともに、本事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、地域の防災施設整備の一環として進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた浜田市教育委員会並びに関係各位に対し、深堪なる謝意を表するものであります。

平成9年10月

島根県浜田土木建築事務所

所長 須藤克身

序

浜田市教育委員会では浜田土木建築事務所の委託を受けて平成8年度に横路遺跡（土器土地区）の発掘調査を実施しました。本書はこの発掘調査の報告書です。

浜田市には石見国分寺跡、同国分尼寺跡を始め多くの遺跡が存在しています。また、所在地は確定していませんが石見国府も存在しており、古代から中世にかけての石見地域の中心地であります。当教育委員会では、これらの文化財の解明を行うためこれまで石見国分寺跡、下府廃寺跡、古市遺跡と発掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ております。

横路遺跡（土器土地区）では平安時代後期から鎌倉時代にかけての中世の町跡が見つかりました。古市遺跡の調査結果と併せ、当時は下府川に沿って大量の輸入陶磁器が使われた町が存在したことが明らかになりました。これらは中世の石見国府と密接な関係が考えられ、古くからの交易拠点としての浜田を伺うことができます。

また、明治5年（1872）の浜田地震による噴砂が確認されました。この地震はマグニチュード7.1と非常に大規模で、浜田の町に大きな被害をもたらしました。今回の発見により将来の大地震を予測する上で非常に貴重な調査結果を得ることが出来ました。

これらの資料を末長く後世に伝えることが大きな課題であります。祖先の営みを知ることにより、文化の香り豊かな浜田を築くことができるものと信じております。

本書の資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、歴史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた前島根大学法文学部の井上寛司教授、島根大学総合理工学部の山内靖喜教授、浜田市文化財審議会会長の桑原韶一先生をはじめとする諸先生方、島根県教育委員会及び関係諸機関に厚く感謝申し上げます。また、あらゆる面から御協力下さいました浜田土木建築事務所に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成9年10月

浜田市教育委員会

教育長 竹 中 弘 忠

例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成8年度に実施した下府川河川局部改良事業に伴う横路遺跡（土器土地区）の発掘調査報告書である。発掘調査は平成8年度、遺物整理及び調査報告書作成は平成9年度に実施した。
2. 調査は次のような組織で行った。

調査主体	浜田市教育委員会教育長 古原忠雄（平成8年度） 竹中弘忠（平成9年度）
調査指導	井上寛司（島根大学法文学部教授 当時） 山内靖喜（島根大学総合理工学部教授） 中村唯史（島根大学総合理工学部 当時） 桑原韶一（島根県文化財保護指導員） 島根県教育委員会 文化財課
調査員	榊原博英（浜田市教育委員会 生涯学習課 文化振興係 主事） 原 裕司（浜田市教育委員会 生涯学習課 文化振興係 主事）
事務局	浜田市教育委員会生涯学習課 生涯学習課長 宮本延寿（平成8年度） 千代延公敏（平成9年度） 文化振興係長 中村俊二 主任主事 村田キミエ
3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。
内野健太、江原美幸、大田温、片山陽介、勝田孝幸、川崎宏、佐々木一長、佐々木慶子、佐々木悟、佐々木伸一、佐々木千尋、佐々木正美、佐々木真実、清水義三、月森典子、中田夕子、中田洋子、永富ヒロ子、半場利定、三浦文雄、村上美佐子、豊哲也、豊光子、吉田安男、余村広美
4. 遺跡に関連する論考として次の方より玉稿をいただいた。
島根大学総合理工学部教授 山内靖喜
日新技術コンサルタント 中村唯史
奈良教育大学教授 三辻利一
5. 遺跡内の花粉分析は川崎地質株式会社に委託し、分析結果の概要を掲載した。
6. 挿図の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。
7. 基準点設置及び空中写真撮影・測量はワールド航測コンサルタント株式会社へ委託して実施した。
8. 遺構番号は以下の略記号を用いた。
P（柱穴類）・SB（建物）・SD（溝）SK（土壌）
9. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。
10. 本書の執筆編集は榊原が行った。

本文目次

I. 調査の経緯	1
II. 遺跡の位置と歴史的環境	2
III. 調査の概要	5
1 試掘調査	5
2 遺構と出土遺物	13
A 遺跡の層位	
B 掘立柱建物・溝	
C 土壌・墓	
D 柱穴類	
3 遺物包含層出土遺物	36
A 土師器	
B その他の遺物	
C 貿易陶磁	
IV. 小結	45
V. 自然理科学分析	48
• 横路遺跡の地質学的検討	48
山内靖喜（島根大学総合理工学部）	
中村唯史（日新技術コンサルタント）	
• 横路遺跡（土器土地区）発掘調査における花粉分析	54
渡辺正巳（川崎地質株式会社）	
• 横路遺跡（土器土地区）出土土器の蛍光X線分析	59
三辻利一（奈良教育大学）	

巻頭図版目次

巻頭図版 1	国府地区遠景（北より）
巻頭図版 2	横路遺跡（土器土地区）全景（南西より）
巻頭図版 3	調査区遠景（西より）
巻頭図版 4	調査区全景
巻頭図版 5	浜田地震（1872年）による噴砂
巻頭図版 6	浜田地震（1872年）による噴砂
巻頭図版 7	1947年米極東米空軍撮影空中写真

插图目次

- 第1图 横路遺跡周辺图
- 第2图 試掘調査出土遺物実測图
- 第3图 調査区位置图
- 第4图 調査区設定图
- 第5图 調査区北壁土層图(1)
- 第6图 調査区北壁土層图(2)
- 第7图 遺構位置图
- 第8图 S B 1・S B 3 実測图
- 第9图 S B 4・S B 5 実測图
- 第10图 S B 7・S B 12・S D 1 実測图
- 第11图 S B 10・S B 11・S D 2 実測图
- 第12图 S B 13 実測图
- 第13图 S B 14 実測图
- 第14图 掘立柱建物跡 (S B) 出土遺物実測图
- 第15图 S D 1・S D 2 出土遺物実測图
- 第16图 S K 1 実測图
- 第17图 S K 1 出土遺物実測图
- 第18图 S K 2 実測图
- 第19图 S K 2 出土遺物実測图
- 第20图 S K 3 実測图
- 第21图 S K 4 実測图
- 第22图 S K 4 出土遺物実測图
- 第23图 柱穴類出土遺物実測图
- 第24图 P 399 実測图
- 第25图 包含層出土遺物実測图(1)
- 第26图 包含層出土遺物実測图(2)
- 第27图 包含層出土遺物実測图(3)
- 第28图 包含層出土遺物実測图(4)

表目次

- 表1 掘立柱建物一覽表
- 表2 遺物包含層出土遺物組成表
- 表3 遺物包含層出土貿易陶磁器組成表

図 版 目 次

- 図版1 調査前（南西より）
- 図版2 調査区全景（東より）
- 図版3 調査区全景（北西より）
- 図版4 調査北壁土層
- 図版5 試掘調査状況（南西より）
- 図版6 試掘調査T3全景
- 図版7 試掘調査T12全景
- 図版8 調査区北壁土層（西側）
- 図版9 調査区北壁土層（東側）
- 図版10 調査区北壁土層（遺物包含層下）
- 図版11 SD1検出状況（南より）
- 図版12 SD1遺物出土状況
- 図版13 SD2検出状況（北より）
- 図版14 SD2遺物出土状況
- 図版15 SK1土層堆積状況
- 図版16 SK1全景
- 図版17 SK2土層堆積状況
- 図版18 SK2全景
- 図版19 SK3検出状況
- 図版20 SK3土層堆積状況
- 図版21 SK4全景
- 図版22 SK4遺物出土状況
- 図版23 P114遺物出土状況
- 図版24 P83遺物出土状況
- 図版25 P141遺物出土状況
- 図版26 P399遺物出土状況
- 図版27 噴砂検出状況（調査区南側中央）
- 図版28 噴砂検出状況（調査区西側）
- 図版29 柱穴と噴砂（調査区西側）
- 図版30 噴砂（調査区西側）
- 図版31 側方に枝脈を延ばした東西性の砂脈（遺跡北東縁）
- 図版32 中礫を含む東西性の砂脈（山内・中村 図-3の断面）
- 図版33 側方に不規則に延びた南北性の砂脈（遺跡南西部）
- 図版34 側方に不規則に延びた南北性の砂脈（遺跡南西部）
- 図版35 出土遺物(1)
- 図版36 出土遺物(2)
- 図版37 出土遺物(3)
- 図版38 出土遺物(4)
- 図版39 出土遺物(5)
- 図版40 出土遺物(6)
- 図版41 出土遺物(7)

I. 調査の経緯

横路遺跡は島根県浜田市下府町に位置しており、伊甘土地区画整理事業により発掘調査が行われた古市遺跡より約1 km下流である。那賀郡金城町を源とする二級河川下府川が大きく南へ屈曲する地点の北側の微高地上に位置する。この一帯は平地が広がり、昭和53年には島根県教育委員会による石見国府推定地調査が行われている(註1)。その結果、近世以降の畦状遺構が検出され、国府に関する遺構や遺物は確認されなかった。

平成7年にこの地域に浜田土木建築事務所により下府川河川局部改良工事に伴う河川防災ステーション建設計画が提示された。事業対称地には周知の埋蔵文化財は確認されてはいなかったが「土器土(カワラケヅチ)」「御立夫(ミタチブ)」といった地名が残っている(註2)。「御立夫」はかつて「御館府」の変化したものとして推定石見国府域の西南隅におかれていた(註3)。これを受けて浜田市教育委員会は浜田土木建築事務所より調査委託を受け、同年10月から12月にかけて重機及び人力による試掘調査を実施した。その結果、対称地の北側で中世の柱穴と土師器、輸入陶磁器などの遺物を確認した。これに伴い、字名をとって横路遺跡とした。しかし、隣接地域での試掘調査により一部で遺構・遺物が確認されたため、調査対象遺跡を「横路遺跡(土器土地区)」とし、後に確認された遺跡を「横路遺跡(原井ヶ市地区)」とした。

試掘調査の結果を受けて、浜田土木建築事務所との協議を行い、平成8年度に発掘調査、平成9年度に調査報告書作成を行うこととなった。

平成8年6月10日に埋蔵文化財発掘調査委託契約を浜田土木建築事務所と締結し、7月1日より調査を実施した。事業対称地5,275.71㎡のうち、1,685㎡を全面調査の対称とし、表土部を重機により掘削し、遺物包含層及び遺構を人力により調査を実施した。

調査の結果、平安時代後期から鎌倉時代(11世紀後半から13世紀前半)の柱穴660を確認し、掘立柱建物14棟を復元した。また、当時の墓より鏡や鉄剣が見つかった。古市遺跡と併せて、中世前半には下府川沿いに多量の貿易陶磁を伴う町が存在したことが明らかになり、石見府中の発展と衰退を知る上で意義のある調査結果を得た。また数条の地震による噴砂が確認された。明治5年(1872)の浜田地震によるものと考えられ、浜田周辺の大地震歴を知る上で重要な発見となった。

調査後半は周辺の造成工事と並行することとなったが、12月21日に現地説明会を開催し、12月27日に調査を終了した。調査区は砂を敷いて埋戻しを行った。

平成9年度は4月1日に委託契約を締結し、10月31日まで遺物整理と調査報告書の作成を実施した。

註

(1)島根県教育委員会 1978 『石見国府推定地調査報告Ⅰ』

(2)前掲註1

斎藤茂吉 1935 『柿本人磨補註篇』 岩波書店

(3)藤岡謙二郎 1969 『国府』 吉川弘文館

Ⅱ. 位置と歴史的環境

横路遺跡は島根県浜田市下府町789番地他に所在し、石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。遺跡は下府川が大きく平野南部に屈曲する地点の現標高約2.5～3.2mの平地に立地する。遺跡は現在の下府川に隣接しており昭和58年の災害時には橋付近が決壊し、土砂が流入している。

この地域の遺跡は数としては少ないが、石見国分寺・同国分尼寺などが所在することから古代から中世にかけての石見国の中心と考えられ、「那賀郡伊甘郷」に属す。現在、旧石器・縄文時代の遺跡は知られていない。

弥生時代

伊甘神社脇遺跡(註1)・下府廃寺跡(註2)・古市遺跡(註3)・上府遺跡(註4)などで前期から後期にかけての遺物が確認されている。川向遺跡で環状石斧(註5)、上条遺跡(註6)では扁平紐式袈裟襷文銅鐸が2個体発見されている。銅鐸は正立した状態で埋められていたとされる。銅鐸分類ではⅢ式に属するものである(註7)。

古墳時代

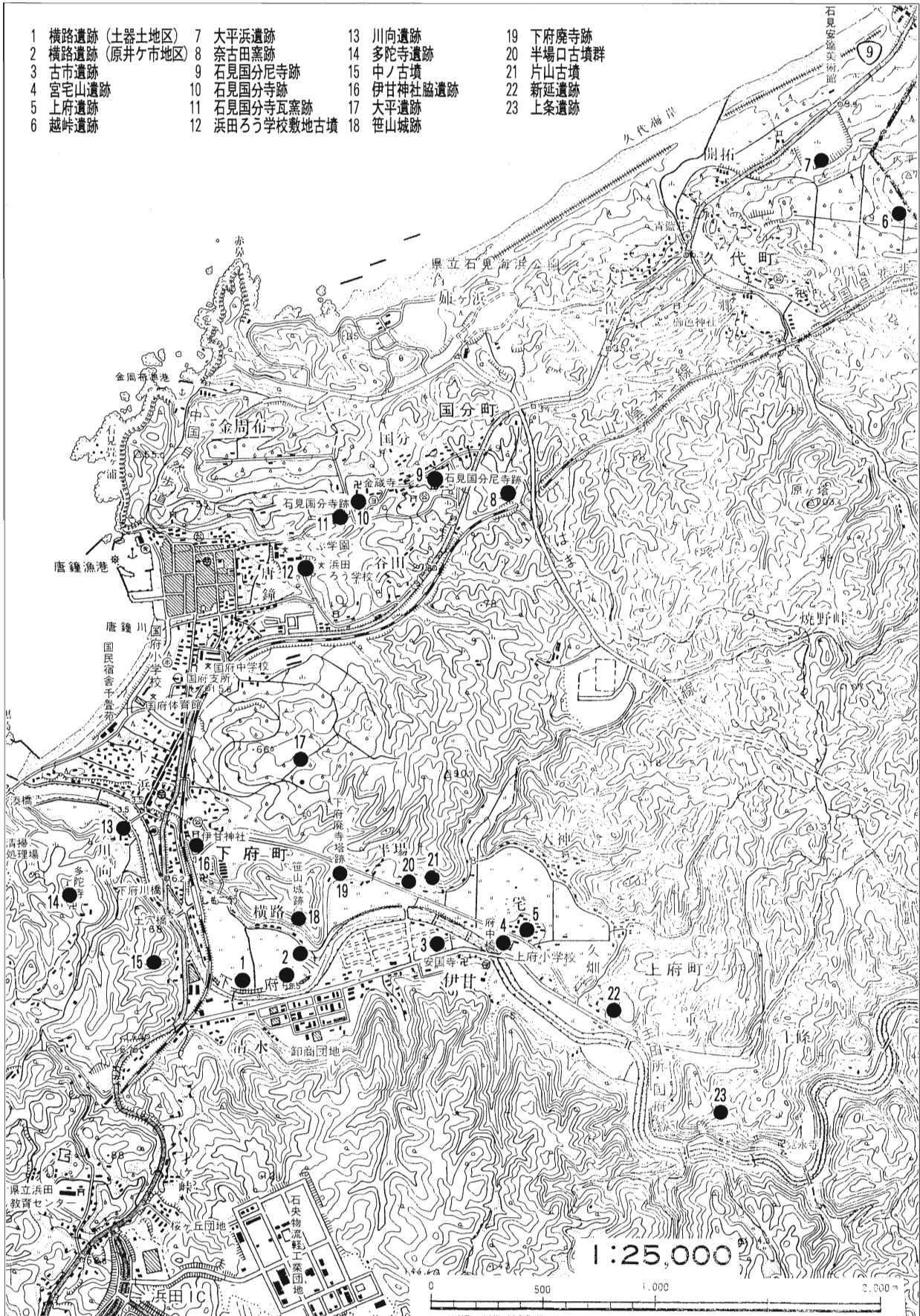
前期・中期古墳は確認されていない。中ノ古墳は墳丘は不明であるが、片袖の横穴式石室が一部残っている。半場口古墳群は箱式石棺の1号墳、横穴式石室の奥壁のみが残る2号墳で構成され、いずれも墳丘は不明である。片山古墳は外護列石を廻らす二段築成の方墳で、全長6.4m、幅約1.7mの無袖形の横穴式石室が開口している(註8)。集落跡は確認されていないが、伊甘神社脇遺跡で手捏ね土器を含む5世紀末～6世紀の祭祀土壌が見つまっている(註9)。

古代

石見国府は横路地区、伊甘神社脇遺跡、上府遺跡の3地点での推定地調査が行われたが、所在は確定されていない(註10)。奈古田窯跡は7～8世紀頃の須恵器窯で、中心部分は畑により破壊されていると考えられる(註11)。白鳳時代末には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置の下府廃寺が建立される(註12)。石見国分寺は現在の金蔵寺境内にあり、塔跡の一部などが調査され、白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している(註13)。国分寺塔跡から約100m南西側には、石見国分寺瓦窯跡が位置している(註14)。石見国分尼寺は現在の国分寺の境内に位置し、石見国分寺と同文の軒瓦や白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している(註15)。

中世

古代からの国府は新たに「府中」として発展したと考えられる。府中の範囲は現在の上府・下府を中心とした地域と推定されている(註16)。古市遺跡(註17)・伊甘神社脇遺跡(註18)・上府遺跡(註19)・下府廃寺跡(註20)などで遺構、遺物が確認されている。現在の河口付近の川向



第1図 横路遺跡周辺図

遺跡や砂丘地である大平遺跡、上府八幡宮下の宮宅山遺跡からも遺物が確認されている。笹山城跡も含め、広い範囲で中世遺跡が分布している。また、益田氏との関連が深く、伊甘山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、臼口大明神、上府八幡宮がある。また、明治23年の地籍図を見ると、現在の上府町三宅の平野には縦長の条理の跡が見られる(註21)。

註

- (1)島根県教育委員会 1979 『石見国府推定地調査報告Ⅱ』
- (2)浜田市教育委員会 1993 『下府廃寺跡』
- (3)浜田市教育委員会 1992 『古市遺跡発掘調査概報』
- (4)島根県教育委員会 1980 『石見国府推定地調査報告Ⅲ』
- (5)浜田市 1973 『浜田市誌 下巻』
- (6)直良信夫 1932 「石見上府村発見銅鐸の出土状態」
『考古学雑誌22-2』
- (7)島根県教育委員会・朝日新聞社 1997 『古代出雲文化展－神々の国 悠久の遺産－』
- (8)前掲註2
- (9)前掲註1
- (10)島根県教育委員会 1978 『石見国府推定地調査報告Ⅰ』
前掲註1・4
石井悠 1996 「石見国」『国府－畿内・七道の様相－』
日本考古学協会三重県実行委員会
- (11)川原和人 1980 「石見の須恵器窯跡」『さんいん古代史の周辺（下）』
- (12)前掲註2
- (13)浜田市教育委員会 1989 『石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報』
- (14)内田律雄 1986 「石見国分寺瓦窯跡」
『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ』
- (15)国府町文化財審議会 1963 『国府町の文化財』
- (16)益田市教育委員会 1996 「第58号文書 解説」
『史料集・益田兼堯とその時代』
- (17)浜田市教育委員会 1995 『伊甘土地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』
前掲註3
- (18)前掲註1
- (19)前掲註4
- (20)前掲註2
- (21)前掲註4

Ⅲ. 調査の概要

1 試掘調査（第3図・第4図）

事業計画地内に20m間隔で5 m × 5 mの調査区を12設定し、部分的に拡張等を行った。T 8・T 9・T 11・T 12で遺物・遺構が確認された。さらに遺物包含層及び遺構の範囲を確認するため、T 12・T 9の間とT 9・T 5調査区の間には2 m × 1 mの調査区を設定し、それぞれT 13・T 14とした。

T 1

5 m × 5 mの調査区である。標高0.4mまで調査した。ほぼ標高1.0m以下には砂層が堆積していた。標高0.7mにマンガンの付着した黒色砂があり、かつての湧水層と考えられる。遺構・遺物は確認できなかった。

T 2

5 m × 5 mの調査区である。標高1.019mで暗青灰色粘質土を確認した。標高-0.74mで淡灰褐色砂利層を確認したが、湧水が激しいため、そのまま埋め戻した。遺構・遺物は確認できなかった。

T 3

5 m × 5 mの調査区である。標高1.8m以下は主として暗青灰色粘質土が堆積する。同様の粘質土は第T 2・T 3・T 4・T 7で確認できる。河川の脇にできた自然の池と考えられる。深さは約1 mを測る。この粘質土は灰白色砂面に堆積しており、調査区東側に認められる。遺構・遺物は確認できなかったが、中世の遺構面である暗赤褐色粘質土は暗青灰色粘質土堆積後に堆積している。中世頃には池はほとんど埋没して深さ50cm程の凹地状になっていたと考えられる。

T 4

5 m × 5 mの調査区である。標高1.9mで暗青灰色粘質土を確認した。T 3・T 7などで確認されるものと同様である。遺構・遺物は確認できなかった。

T 5

5 m × 5 mの調査区である。標高1.8mの暗赤褐色粘質土まで掘り下げたが、遺構は確認できなかった。

T 6

5 m × 5 mの調査区である。標高2.2mの暗赤褐色粘質土まで掘り下げたが、遺構・遺物共に確認できなかった。調査区南側は現代の攪乱を受けている。なお、液状化現象による噴砂を確認したが時期は不明である(註1)。堆積状況からおよそ中世以降の地震によると考えられるが、明治5年の浜田地震による可能性もある。

T 7

5 m × 5 m の調査区である。標高-0.30 m まで調査した。標高 1 m 付近から暗青灰色粘質土が厚く堆積していた。標高 0.30 m 付近に植物質を含む厚さ約 20 cm の泥層を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

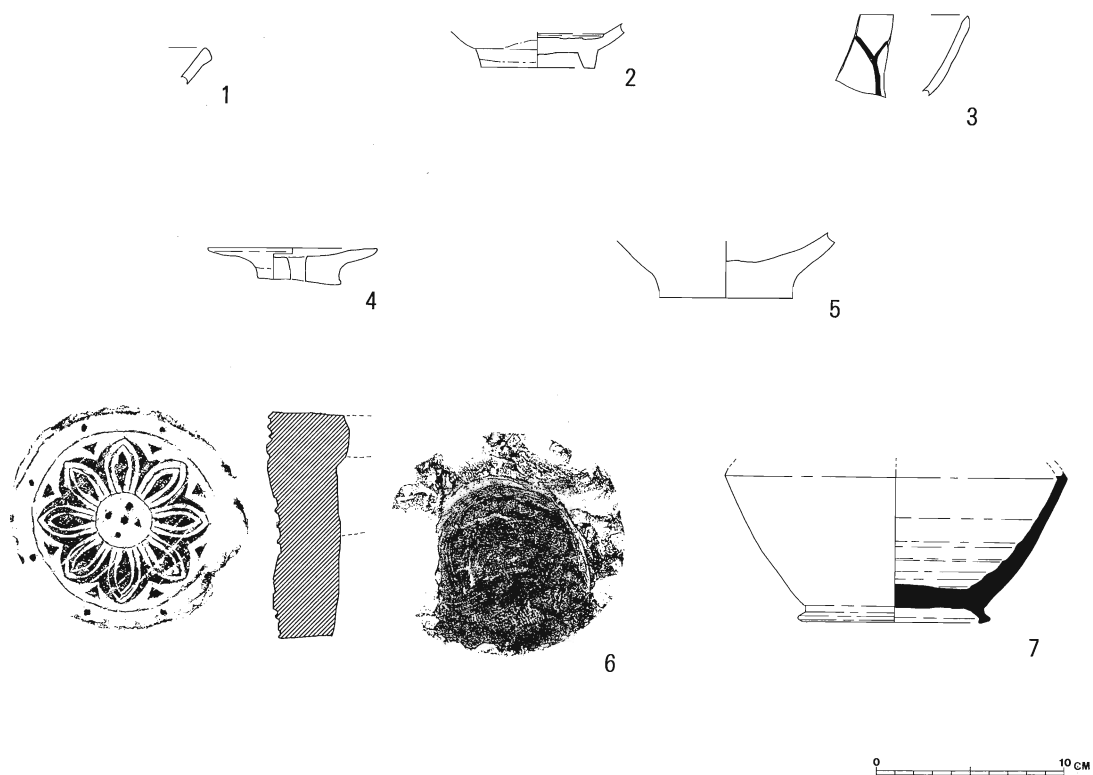
T 8

5 m × 5 m の調査区である。標高 1.8 m 付近に厚さ約 10 cm のマンガンを含む硬質面が検出された。この面を除去した直下の暗赤褐色粘質土上面で柱穴を確認した。柱穴の径は 20 cm 以下、深さ 10 cm 程の小さいものである。本来の遺構上面が湧水により硬化したものと考えられる。南側には硬化層の中にはさまれるように、遺物を含む淡褐灰色粘質土が確認できた。柱穴の埋土は黒色粘質土で、土師器の破片が出土した。

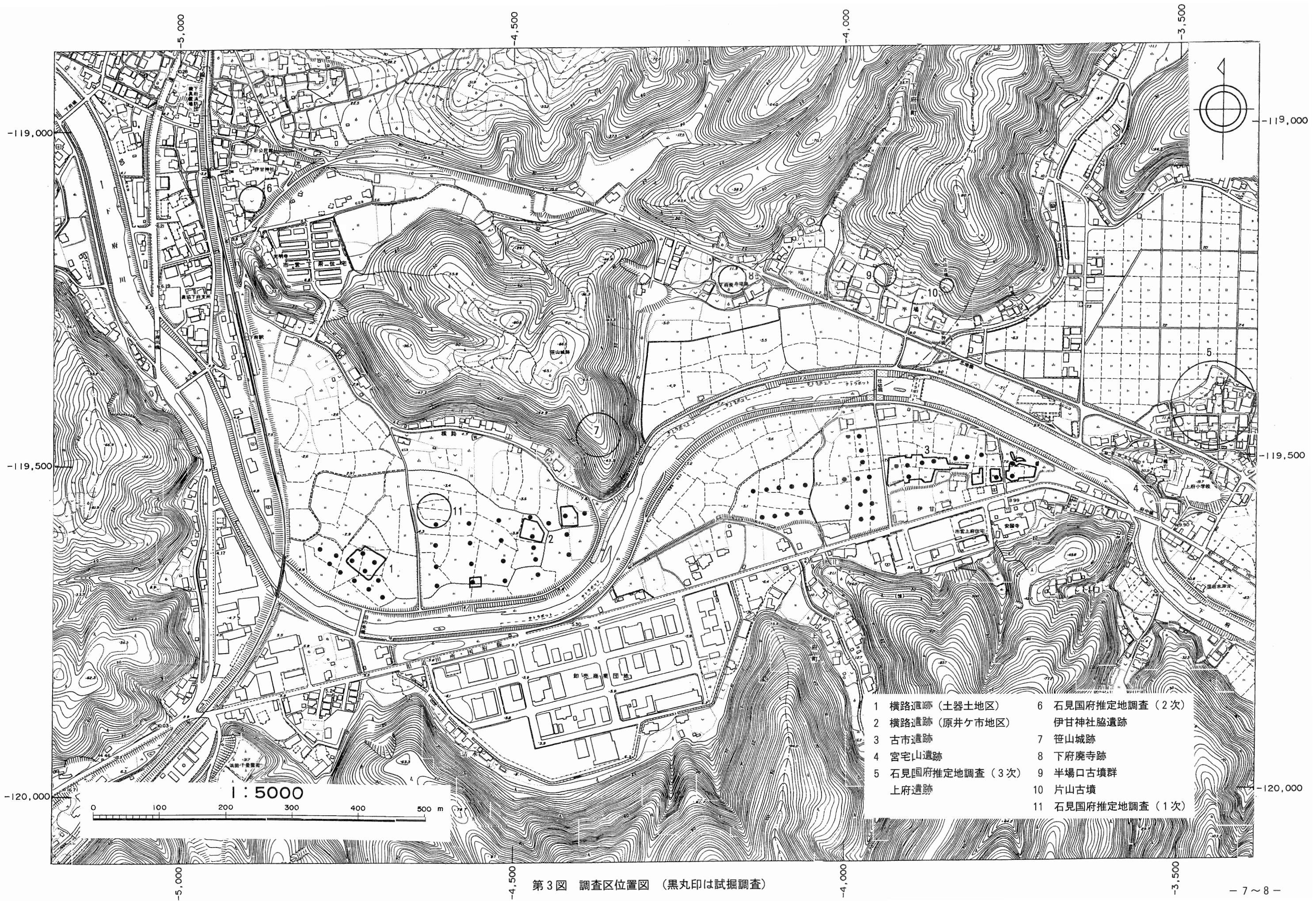
T 9

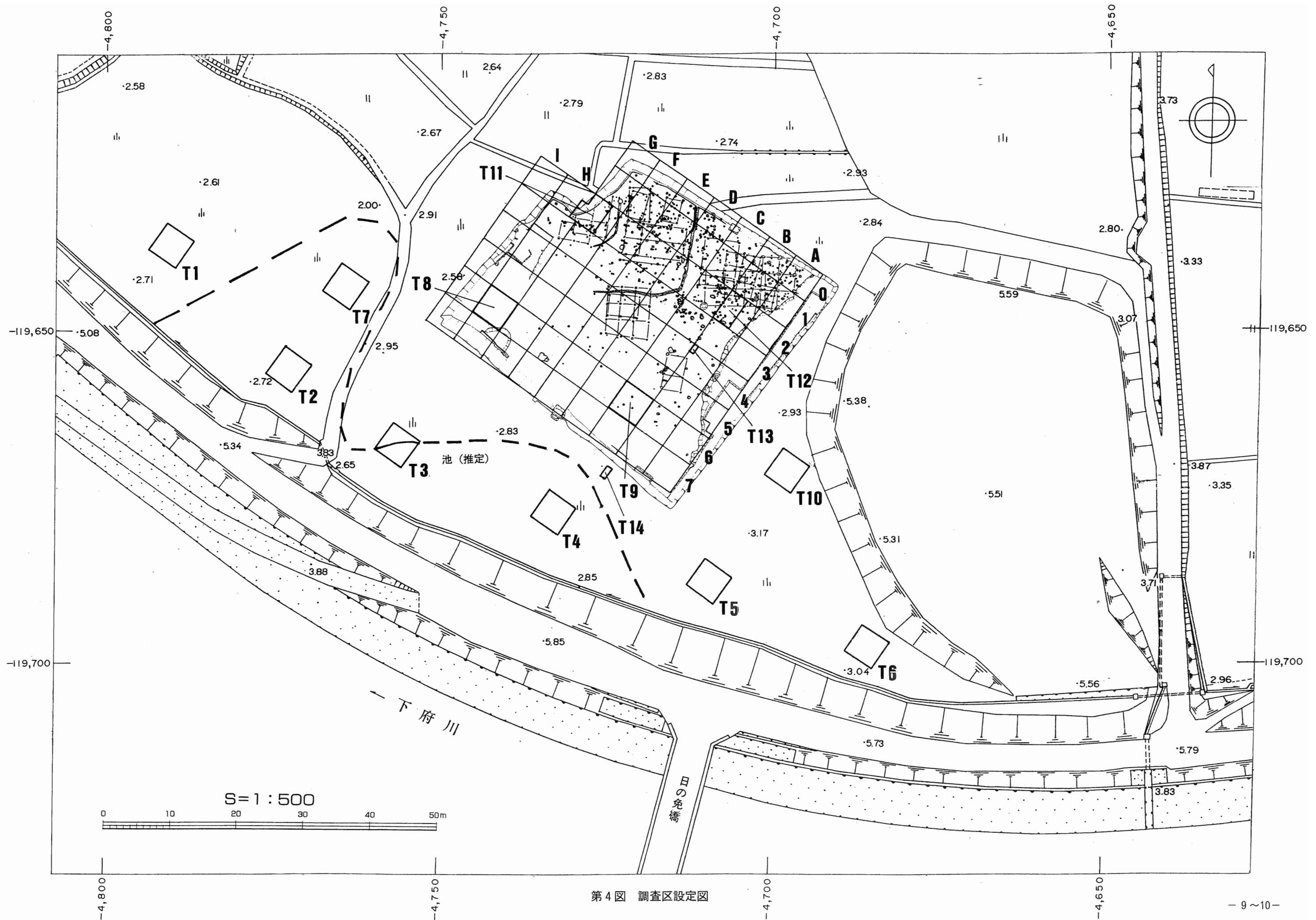
5 m × 5 m の調査区である。標高 2.2 m から淡褐灰色粘土ブロックが混じる暗赤褐色粘質土が厚さ 20 cm で堆積しており、土師器、須恵器、貿易陶磁が出土した。その下の約標高 2 m の暗赤褐色粘質土上面で柱穴を 2 基確認した。柱穴の埋土は黒色粘質土で、径は 20 cm 程、深さ 7 cm 程の小さいものである。

遺構面の下は標高 0.2 m 付近まで調査したが、灰色砂が堆積しており、遺物は見つからなかった。



第 2 図 試掘調査出土遺物





第4図 調査区設定図

出土遺物（第2図・2）

白磁碗Ⅷ類の底部である（註2）。胎土は白色で釉は灰白色で貫入が見られる。内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。

T10

5 m × 5 m の調査区である。標高1.4 m の暗灰色粘質土まで掘り下げたが、遺構・遺物共に確認できなかった。

T11

5 m × 3 m の調査区を設定し、西側へ1.5 m 拡張した。標高2.05 m 付近に厚さ約4 cm のマンガンを大量に含む硬質面が検出された。この面を除去した直下の暗赤褐色粘質土上面で柱穴を14基確認した。本来の遺構面上面が湧水により硬化したものと考えられる。柱穴の埋土は黒色粘質土である。柱穴は径1.5 cm から14 cm までのものがある。柱穴内より軒丸瓦の瓦当部（第2図・6）が出土した。柱穴の壁に瓦当面側を向け、立てかけたような状態で出土したが中世の土師器の細片も共伴しており、根石に転用したと考えられる。

遺構面の下に砂層、砂利層が堆積しており、標高0.6 m 付近で須恵器の長頸壺の下半部（第2図・7）が見つかった。

出土遺物（第2図・3・6・7）

(3)は龍泉窯系青磁碗Ⅰ5類である。胎土は灰色で釉は灰緑色で全面に薄くかかる。外面に鎬蓮弁文を有す。(6)は単弁8葉蓮華文軒丸瓦で、石見国分寺創建期（8世紀中頃）のものである（註3）。淡灰色を呈し、瓦当直径は12 cm を測る。周縁部は成形時に削りとられているため瓦当直径が小さい。瓦当面には板状の圧痕が残る。瓦当の裏面は布圧痕の上から一部ナデ消している。二次焼成を受けており、煤が付着していた。(7)は須恵器の長頸壺の下半部で外面は暗灰色を呈すが内面は紫褐色を呈す。外側にふんばる高台がつき、高台径は10.2 cm を測る。内面には回転ナデ痕が残る。

T12

5 m × 3 m の調査区である。水田床下にマンガンを含む硬質面があり、その直下標高約2.5 m から厚さ約35 cm の遺物を含む黒色粘質土が水平に堆積していた。土師器を中心とし、貿易陶磁、須恵器が少量出土する。この下の暗赤褐色粘質土上面で柱穴を8基確認した。遺構面は調査区内ではほぼ水平で、標高2.1 m である。埋土は黒色粘質土で、土師器、貿易陶磁の破片が出土した。柱穴は径20 cm 程で不整形のものが多い。柱穴内からは土師器、白磁などの破片が出土した。

遺構面の下は砂層が堆積しており、須恵器の破片が出土した。

出土遺物（第2図・1・4・5）

(1)は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。胎土は白色で釉は灰白色で全面にかかる。やや小さめの玉

縁口縁である。(4)は底部穿孔された土師器皿である。淡黄褐色を呈し、口径9 cm・底径3.4cm・器高2 cmを測る。底部は柱状になり、体部は水平方向に延びる。(5)は土師器杯の底部である。淡赤褐色を呈し、底径7 cmを測る。底部は厚さ2 cmで回転糸切り痕が残る。体部は逆ハ字状に立ち上がると考えられる。

T13

T12・T9の間に設定した2 m×1 mの調査区である。T12調査区で確認した遺物を含む黒色粘質土は厚さ20cmと薄くなっている。遺構は小さい柱穴状のものが見つかったのみである。遺構面の標高は2.3cmである。

T14

T9・T5の間に設定した2 m×1 mの調査区である。標高約2.3mの淡褐灰色粘質土中で白磁の破片を1点確認したのみである。

試掘調査の結果、T8・T9・T11・T12を中心に中世前半頃の遺物包含層及び柱穴を確認した。試掘調査全体ではコンテナ1箱分の遺物が見つかった。最も遺物が出土するのはT12である。他の調査区では顕著な遺物包含層は確認できず、二次堆積あるいは削られたものと考えられる。遺構面は暗赤褐色粘質土であるが、T5・T6・T10の暗赤褐色粘質土上面では遺構は確認できなかった。これらにより遺跡のほぼ南端が推定できた。時期は貿易陶磁から11世紀後半から13世紀前半である。遺構面の下の砂層から古代の須恵器が見つかり、当時はまだ平野の堆積が進行していたと考えられる。

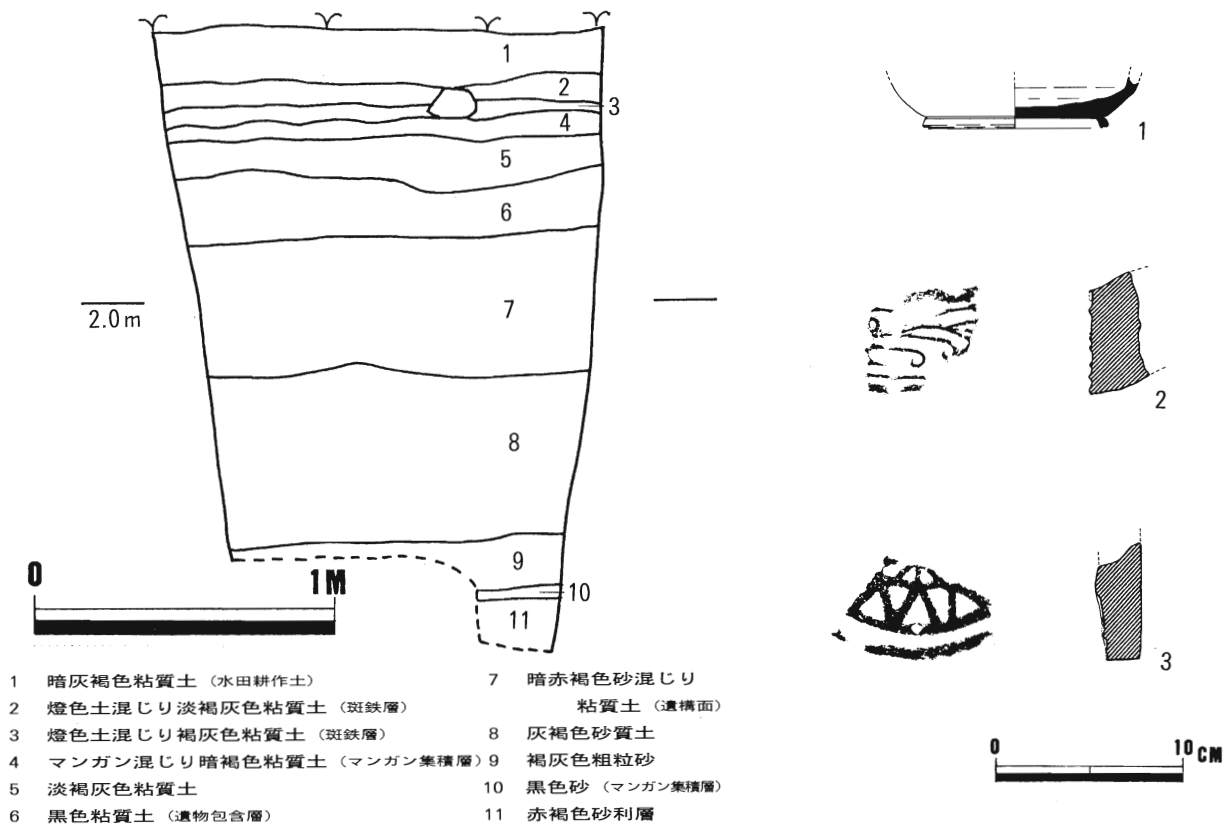
また、T2・T3・T4・T7では暗青灰色粘質土を確認したが、遺物・遺構共に確認できなかった。この粘質土は均質な自然堆積土である。植物を含む泥層や砂層は確認できず、河川脇にできた不正形な自然の池と考えられる(第4図)。中世前半の北側で遺構が存在する頃にはほとんど埋没したと考えられ、下府川は現在の位置にほぼ固定してきたと推定される。

2. 遺構と出土遺物

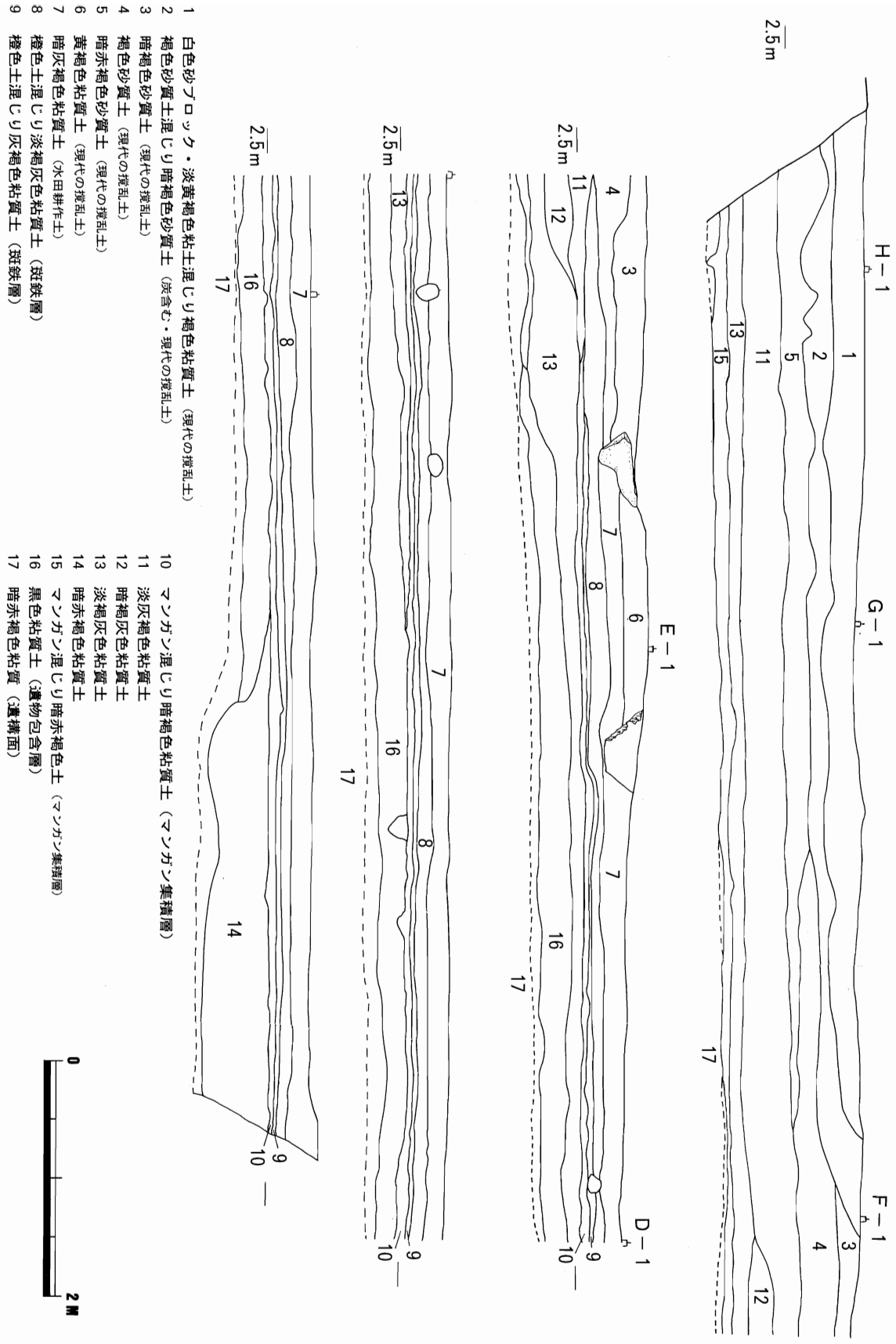
試掘調査の結果を受けて、T8・T9・T11・T12を中心に1,685㎡の調査区を設定した。表土を重機で掘削したあと、試掘調査と同様に5m四方で調査区を区切った(第4図)。各区の名称は東西方向にA～I、南北方向に0～7とし、「A-0区」というように呼称した。この区ごとに遺物包含層及び遺構を人力により調査を行った。各区ごとに取り上げた遺物は分類したあと破片数と底部個体数を数え、集計を行った。

A. 遺跡の層位 (第5・6図)

まず砂利層や砂層が堆積し、遺跡の基盤が形成される。これらの基盤層は河川による堆積層で川の本流に近い状況であったと考えられる。これら一連の層からは、(第2図・7)や(第5図・2、3)といった古代の遺物が確認された。(第5図・2)は均整唐草文軒平瓦で胎土は砂粒を少量含み、暗灰褐色を呈す。石見国分寺創建期のもので、8世紀中頃である(註4)。(3)は外区に鋸歯文の巡る軒丸瓦で、焼成はやや軟質で黄褐色を呈すが、瓦当部はいぶし状に黒色を呈している。下府廃寺軒丸瓦IV A a式で8世紀前半から中葉頃である(註5)。その上には褐色系の砂質土及び粘質土が堆積し、遺構面が形成される。この時期は河川の流路が離れたため、安定した地盤が形成されていったと考えられる。出土遺物は(第5図・1)である。須恵器の坏で黄みを帯びた淡灰色である。外開きの高台を付け、底部はヘラ切り後にナデを施している。8世紀前半と考えられる(註6)。



第5図 調査区北壁土層図(1)



- 1 白色砂・ロック・淡黄褐色粘土混じり褐色粘質土 (現代の攪乱土)
- 2 褐色砂質土混じり暗褐色砂質土 (炭含む・現代の攪乱土)
- 3 暗褐色砂質土 (現代の攪乱土)
- 4 褐色砂質土 (現代の攪乱土)
- 5 暗赤褐色砂質土 (現代の攪乱土)
- 6 黄褐色粘質土 (現代の攪乱土)
- 7 暗灰褐色粘質土 (水田耕作土)
- 8 橙色土混じり淡褐色粘質土 (斑鉄層)
- 9 橙色土混じり灰褐色粘質土 (斑鉄層)
- 10 マンガン混じり暗褐色粘質土 (マンガン集積層)
- 11 淡灰褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 淡褐色粘質土
- 14 暗赤褐色粘質土
- 15 マンガン混じり暗赤褐色土 (マンガン集積層)
- 16 黒色粘質土 (遺物包含層)
- 17 暗赤褐色粘質土 (遺構面)

第6図 調査区北壁土層図(2)



第7図 遺構位置図

その上に中世の遺物を含む黒色粘質土が堆積している。黒色粘質土と遺構検出面の層の境界は漸的に変化しており、黒色粘質土中の遺物の包含状況に規則性は見られない。遺物包含層と遺構埋土が分層できないことから、黒色粘質土は生活によって、随時攪乱されながら、厚く堆積していったものと考えられる。この層は調査区南側では漸的に黒味が薄くなり、褐色味が強くなってしまふ。これは遺構の分布と関連している。

この黒色粘質土を切って淡褐色粘質土系の土(第6 図12・13・14層)が黒色粘質土と遺構面を一部削り込んで堆積している。これらの土は攪乱及び造成土的なものとして推定され、近世頃の遺物を含む。およそ近世以降には水田化して現在に至ったと考えられる。遺構はすべて暗赤褐色粘質土(第5 図8層・第6 図17層)上面で検出している。

調査区には数条の砂の詰まった亀裂が確認され、地震による噴砂と考えられる(第7 図)。亀裂は南北方向が最も多いが、東西方向もみられる。土層の砂質が強くなる調査区南側で多く検出している。噴砂は第5 図の2層まで吹き上がり、現代の水田床で上部を削平されたと考えられる。地震の時期は近世に大地震の記述が確認されないことから明治5年(1872)の地震による考えられる。

B. 掘立柱建物・溝

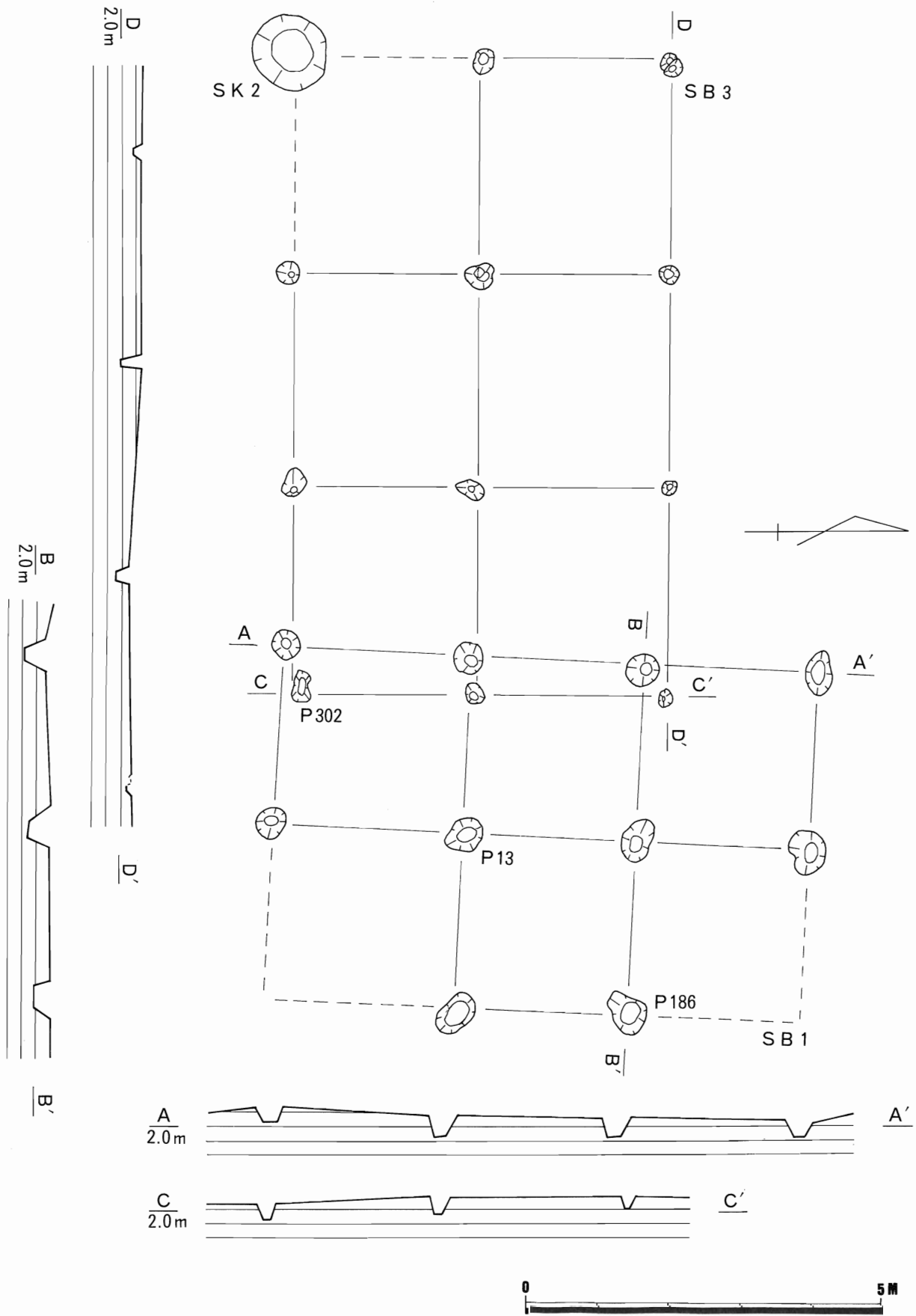
柱穴類と考えられる遺構は全部で660確認し、建物跡として14棟復元した。建物の軸方向は北方向基準で1°～4° 東に振るものが5棟、9°～12° 東に振るものが6棟と大半を占め、かなり規則性を持って建物が存在していたと推定される。また、L字状の溝が2本確認され、建物にはこれらと軸がほぼ揃っているものがある。このことからこの溝は建物の区画でほぼ同時期の併存と考えられる。

SB1 (第8 図)

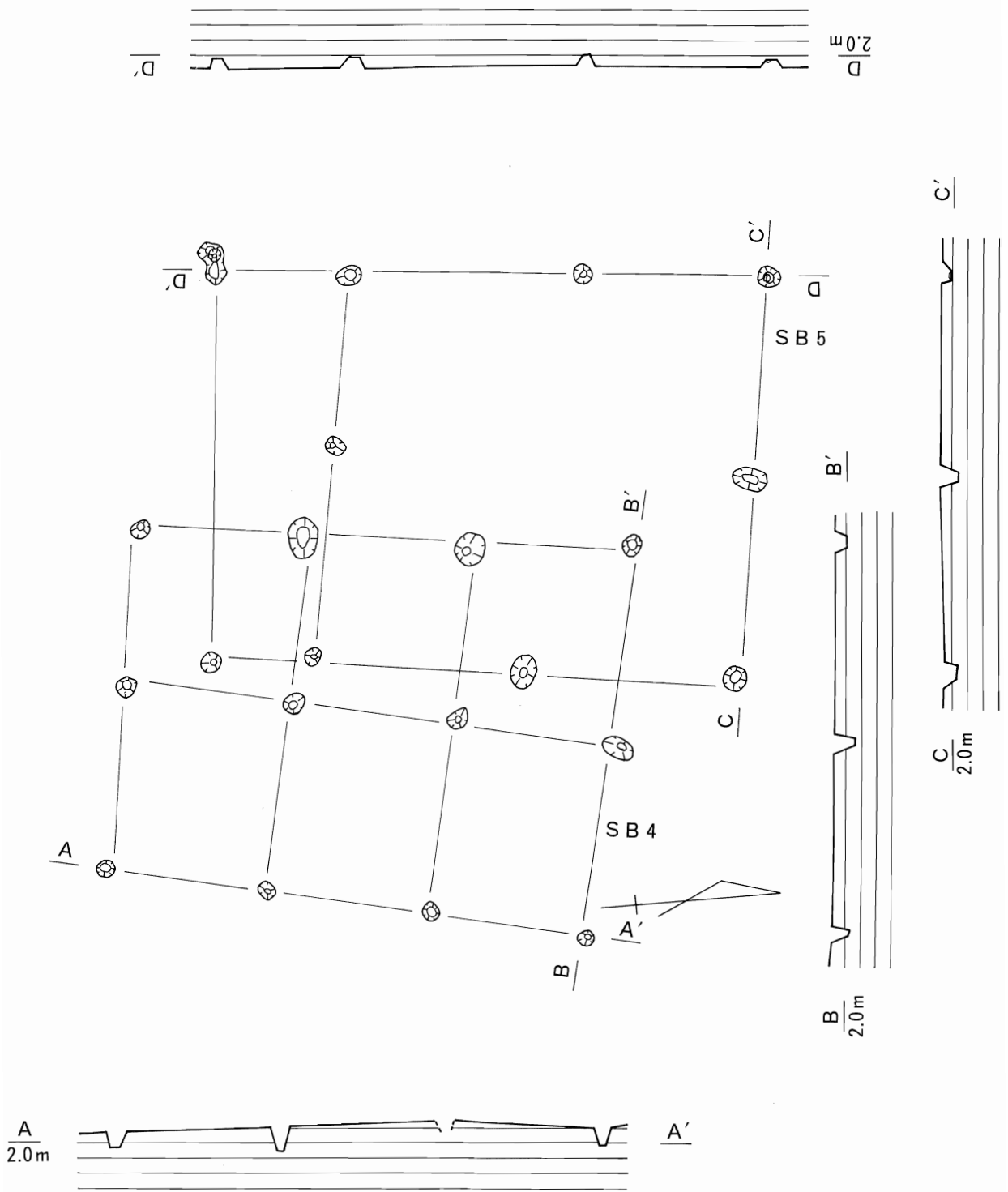
調査区の東隅に位置する。検出面の標高は約2.3mである。建物の規模は2間(5 m)×3間

遺構番号	桁行×梁行	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位	pit番号(報告書掲載分)
SB 1	(3)×(2)	7.58×5.00	37.9m ²	N-2° -E	13;186
SB 2	2×1	4.35×2.40	10.44m ²	N-9.5° -E	
SB 3	3×2	9.02×5.32	47.99m ²	E-1° -S	20;92;196;302
SB 4	3×2	6.20×5.10	31.62m ²	N-13.5° -E	
SB 5	3×2	7.14×5.40	38.56m ²	N-6° E	201;
SB 6	2×1	3.35×2.35	7.87m ²	N-11.5° -E	
SB 7	4×2	9.06×4.78	43.30m ²	E-8° -S	114;121
SB 8	2×1	5.00×3.15	15.75m ²	N-2° -E	
SB 9	2×1	3.85×2.50	9.63m ²	N-16° -E	
SB 10	(3)×2	5.16×5.04	26.00m ²	N-9° -E	
SB 11	2×1	4.48×2.48	11.11m ²	E-12° -S	
SB 12	2×1	4.50×3.10	13.95m ²	E-4.5° -S	
SB 13	3×3	7.66×6.30	48.26m ²	N-3° -E	
SB 14	2×1	5.16×3.00	15.48m ²	N-11° -E	

表1 掘立柱建物一覧表



第8图 SB1・SB3实测图



第9图 SB4·SB5实测图

(7.58m)の総柱建物(註7)で、軸方向は $N-2^{\circ}-E$ を測る。柱穴が径約40~50cm、深さ約30cmと規模が他に比べて大きく、比較的容易に復元できる。

なお、南西隅の柱穴は削平されていると考えられる。

出土遺物(第14図・1、2)

(1)はP13出土の坏である。底径6cmを測る。胎土は精良で淡黄褐色を呈す。底部がやや厚く、回転糸切り痕を残す。内面には浅く回転ナデ痕が残る。体部はやや丸みをもって立ち上がると推定される。(2)はP186出土の皿である。口径8.8cm・底径4.2cm・器高1.5cmを測る。底径が口径に対して小さく、体部は短く立上り、内面には回転ナデ痕が残る。

SB2(第7図)

2間(4.35m)×1間(2.4m)、軸方向は $N-9.5^{\circ}-E$ を測る小型の建物である。

SB3(第8図)

建物の規模は3間(9.02m)×2間(5.32m)、軸方向は $E-1^{\circ}-S$ を測る総柱建物である。検出面の標高は約2.3mである。柱穴は約20cm~30cm、深さ約10~30cmで深さにはかなりばらつきがある。南西隅はSK2で切られていると推定される。

出土遺物(第14図・5~9)

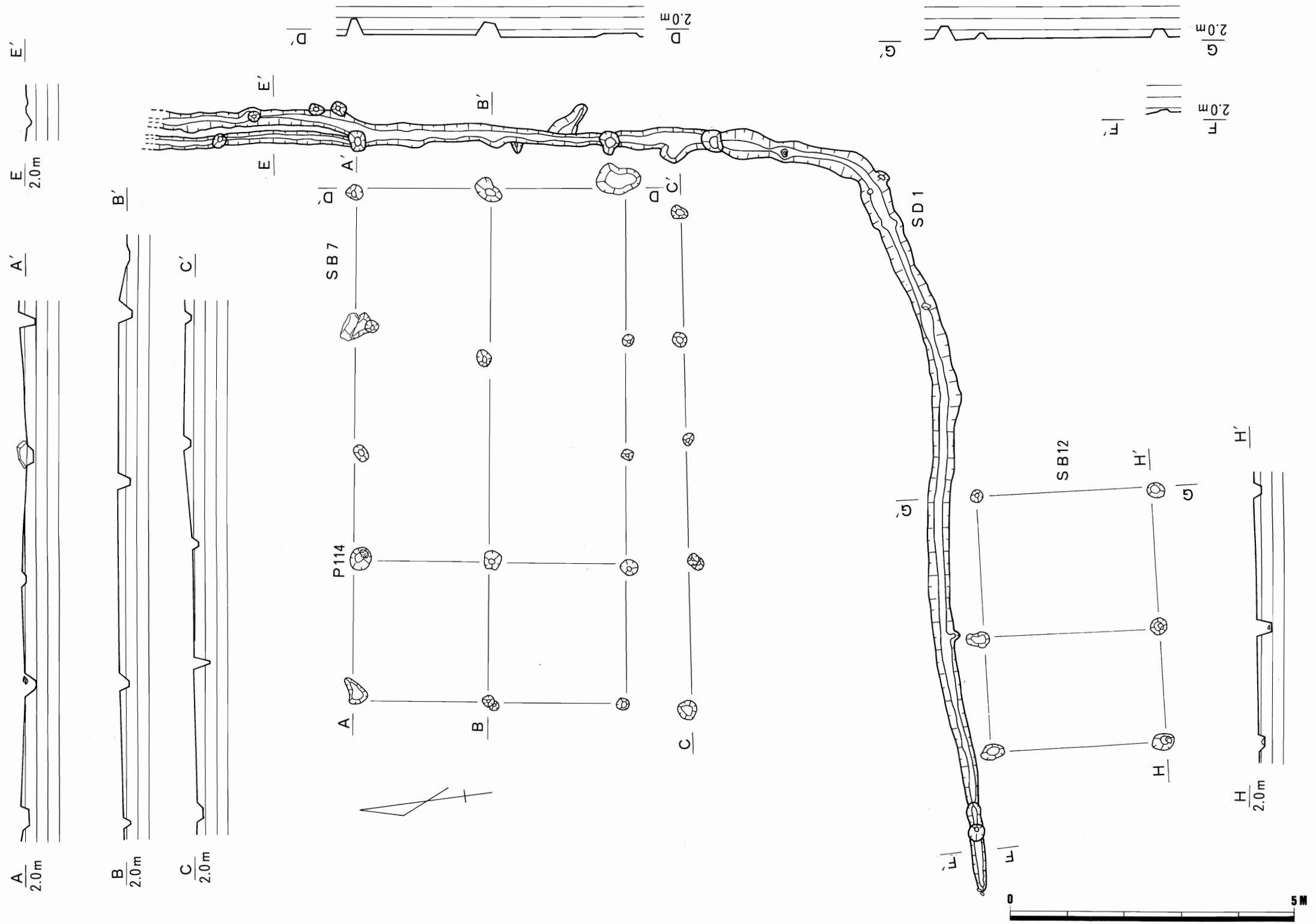
(5)はP196出土の土師器皿である。淡黄褐色を呈し、口径8.8cm・底径5.8cm・器高1.6cmを測る。底部は回転糸切りで、体部はやや丸みをもつ。(6)はP92出土の皿である。若干赤みを帯びた淡黄褐色を呈す。口径8.8cm・底径6cm・器高0.9cmを測る。底部は回転糸切り痕を残し、内面には回転ナデ痕が残る。器高が低く、体部の立上りが少ない。また底径と口径の差が少なく、浅く扁平なものである。(7)もP92出土の皿である。淡黄褐色を呈し、焼きのよいものである。口径8.8cm・底径4.4cm・器高1.9cmを測る。底部は回転糸切り痕を残し、内面は回転ナデ痕によりへこむ。体部はやや厚く、口縁端部はやや肥圧する。(8)はP302出土の土師器の坏底部である。底径6.4cmを測る。色調は淡赤褐色である。底部は厚さ2cmと分厚く、回転糸切り痕を残す。内面には回転ナデ痕が残る。(9)はP20出土の坏底部である。底径6.2cmを測る。底部は回転糸切り痕を有す。底部は厚さ2cmと分厚く、体部との境には稜が入る。体部はやや直線的に立ち上がるようである。

SB4(第9図)

建物の規模は3間(6.2m)×2間(5.1m)、軸方向は $N-13.5^{\circ}-E$ を測る総柱建物である。検出面の標高は約2.2mである。柱穴は約20cm~40cm、深さ約20~30cmである。西列にやや径の大きい柱穴が南北方向に並ぶ。

SB5(第9図)

3間(7.14m)×2間(5.4m)を測り、南側はやや不並びで柱穴間隔がせまく、南側に縁の付く側柱建物の可能性がある。軸方向は $N-6^{\circ}-E$ を測る。検出面の標高は約2.2mである。柱



第10图 SB7·SB12·SD1 实测图

穴は約20cm～40cm、深さ約20～30cmだが、全体的に柱穴は小型である。

出土遺物（第14図・10）

P201出土の皿である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。口径8.2cm・底径4.6cm・器高2cmを測る。底部は回転糸切りで、体部は厚く直線的である。底部の中心部はナデにより非常に薄くなっている。

S B 6（第7図）

建物の規模は2間(3.35m)×1間(2.35m)、軸方向はN-11.5°-Eを測る。

S B 7（第10図）

建物の規模は4間(9.06m)×2間(4.78m)、軸方向はE-8°-Sを測る中抜け側柱建物である。軸方向と位置関係からみてSD1、SB11と同時期併存の可能性がある。検出面の標高は約2～2.2mである。柱穴は約20cm～40cm、深さ約10～30cmを測る。南側の柱列は北西隅の柱穴がやや不整形だが、全体に小型である。SB7の南縁に沿って東西方向に並ぶやや小型の柱穴が並び、柵か垣根と考えられる。穴は約20cm～30cm、深さ約10～30cmを測る。

出土遺物（第14図・12）

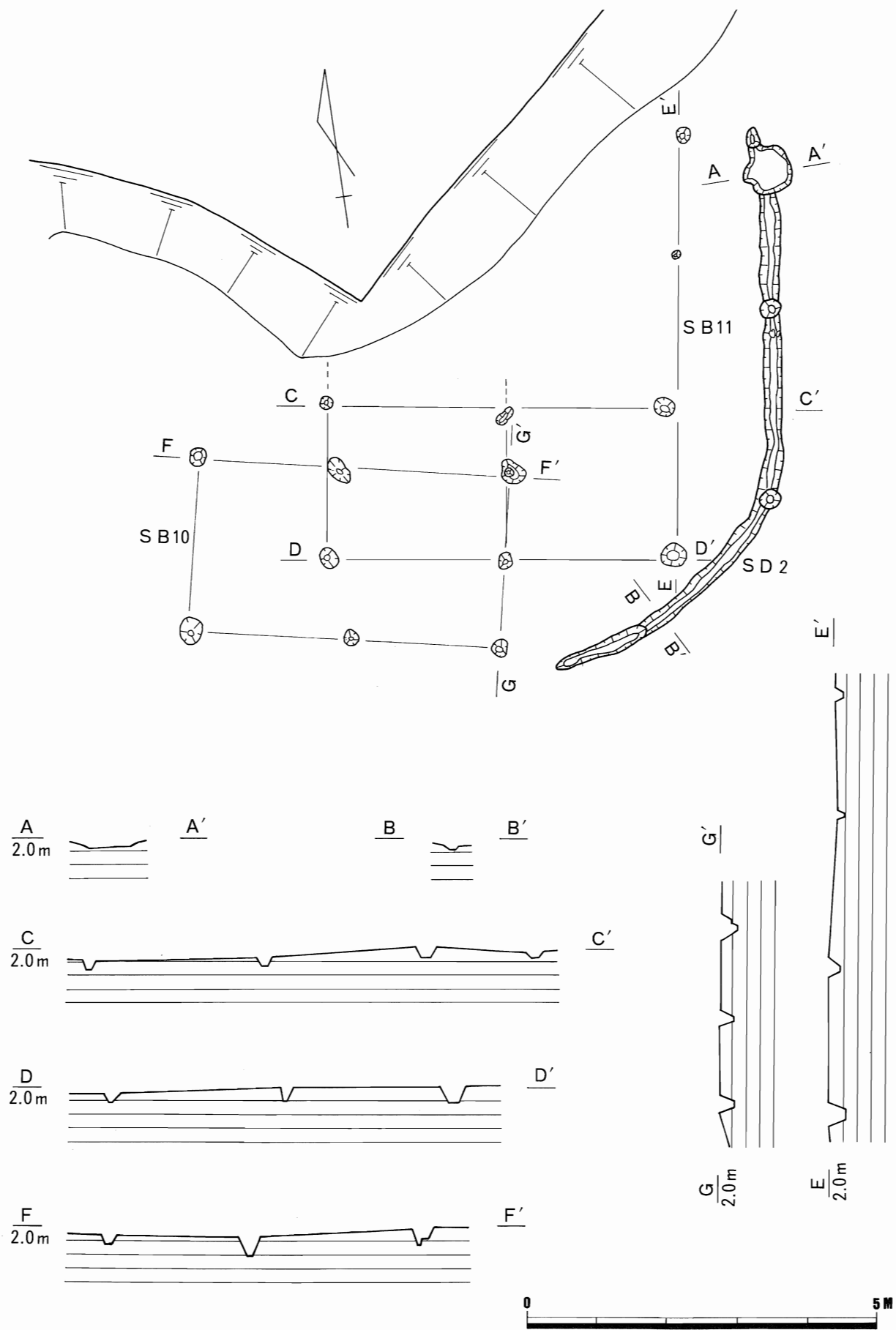
P114出土の土師器坏である。柱穴上位ではほぼ完形の状態で見つかったため、意図的に柱穴に入れられたと推定される。淡黄褐色を呈し、内面には黒斑状のしみがみられる。口径16.6cm・底径8cm・器高4.8cmを測る。底部は回転糸切りで、体部は薄く直線的である。口径に対して底径がやや大きい。

SD1（第10図）

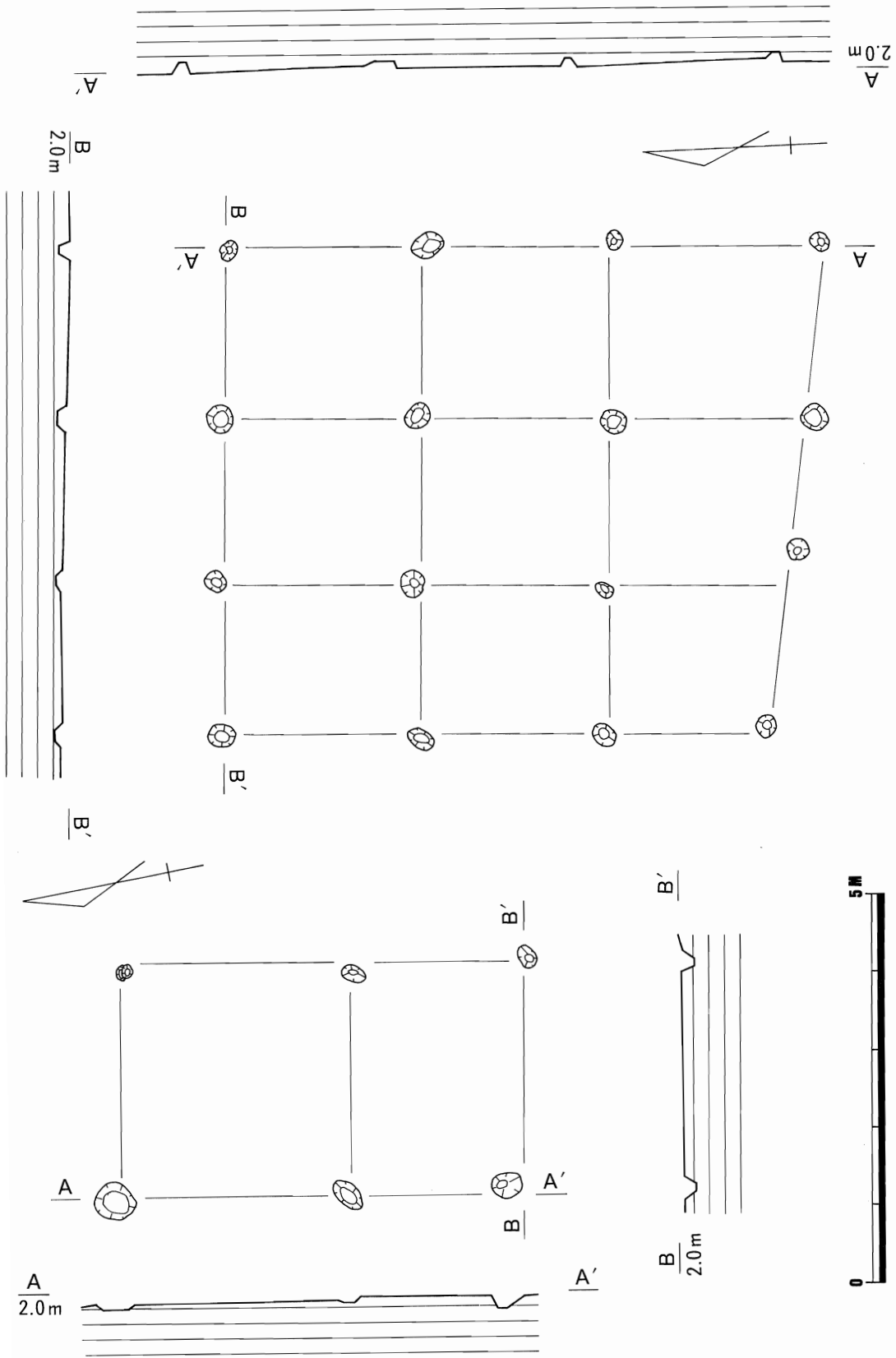
L字状に曲がる溝である。幅約20～40cm・深さ10～20cmである。検出状況では北側が二又に分かれている。床面は東西方向の部分が最も深く、埋土は他の柱穴と同様に黒色粘質土が堆積している。水は流れていなかったと推定され、形状から建物数棟の簡単な区画として機能していたと考えられる。

出土遺物（第15図・1～4）

遺物は土師器の細片が多く見つかった。中には劃花文を有す龍泉窯青磁碗の細片が1点含まれていた。(1)は白磁碗Ⅳ類の底部である(註8)。胎土は灰白色で気泡が多く粗い。釉は乳白色で貫入が多く、高台付近までかかる。浅い削り出し高台を有し、内面下位に段がある。(2)は同安窯系青磁碗Ⅲ2類の底部である。胎土は淡灰色を呈し、やや粗い。釉は緑灰色で貫入が見られ、内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。高台内面は露胎で、ケズリにより若干中心部が尖っている。(3)は白磁碗Ⅷ類である。胎土は淡灰色で気泡が多い。釉は淡緑灰色で貫入が見られる。内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。(4)は東播系須恵器の播鉢の口縁部破片である。復元口径35.3cmを測る。淡青灰色を呈し、焼成は良好である。口縁上部外面は自然釉により黒ずんでいる。口縁端部がやや肥圧化しており、生産地編年では神出Ⅰ期第2段階で11世紀末葉



第11图 SB10・SB11・SD2 实测图



第12图 S B13实测图

第13图 S B14实测图

から12世紀前半のものである(註9)。

S B 8 (第7図)

建物の規模は2間(5m)×1間(3.15m)、軸方向はN-2°-Eを測る。

S B 9 (第7図)

規模は2間(3.85m)×1間(2.5m)を測り、軸方向はN-16°-Eを測る。

出土遺物 (第14図・13)

P309よりの出土である。胎土は灰色で精良、やや黄味を帯びた灰色を呈し、無釉である。端部の丸い高台をもち、高台部は赤味を帯びる。

S B 10 (第11図)

建物の規模は3間以上(5.16m)×2間(5.04m)を測り、軸方向はN-9°-Eを測る。北側は調査区外になったため全体の規模は不明である。軸方向と位置関係からSD2と同時併存の可能性がある。検出面の標高は約2~2.2mである。柱穴は約10cm~30cm、深さ約10~20cmで全体的にやや小型である。

S D 2 (第11図)

幅約30cmを測る弓状の溝である。検出面の標高は約1.9mで、深さ約10cmを測る。溝底のレベルにはあまり高低差はないが、南東端は一段低くなっている。併存する可能性のあるSB10と比べてやや浅い。埋土はやや灰色味を帯びた黒色粘質土である。北側にはSD2を切って浅い皿状の土壌が確認された。埋土は淡灰色粘質土で遺物は土師器のごく小さい破片が見つかったのみである。

出土遺物 (第15図・5)

ほとんどが土師器の細片である。(5)は皿である。淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。口径8.8cm・底径4.15cm・器高1.9cmを測る。底部は回転糸切りで、体部は厚く直線的で口縁端部がやや肥圧する。

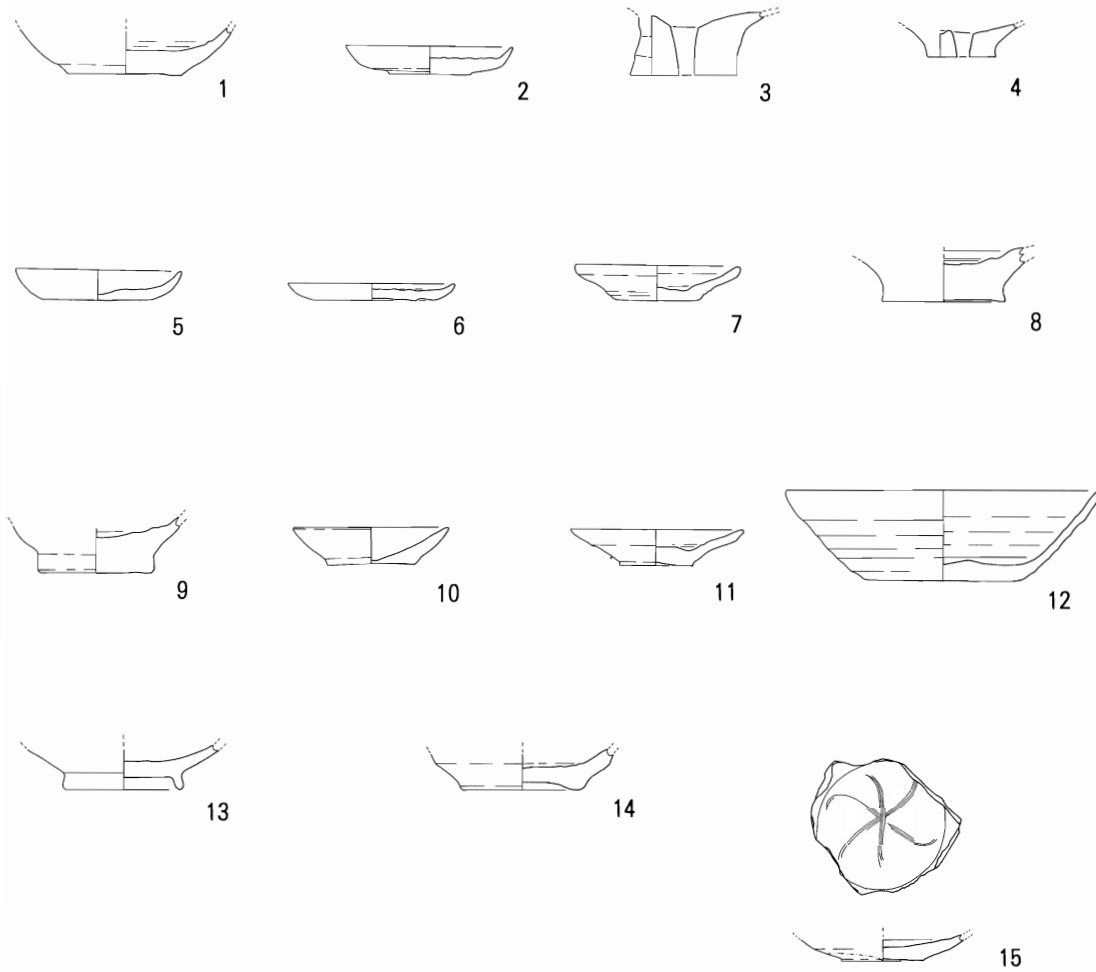
S B 11 (第11図)

建物の規模は2間(4.48m)×1間(2.48m)、軸方向はE-12°-Sを測る。検出面の標高は約2.2mである。柱穴は約20cm~30cm、深さ約20~30cmで全体的にやや小型である。

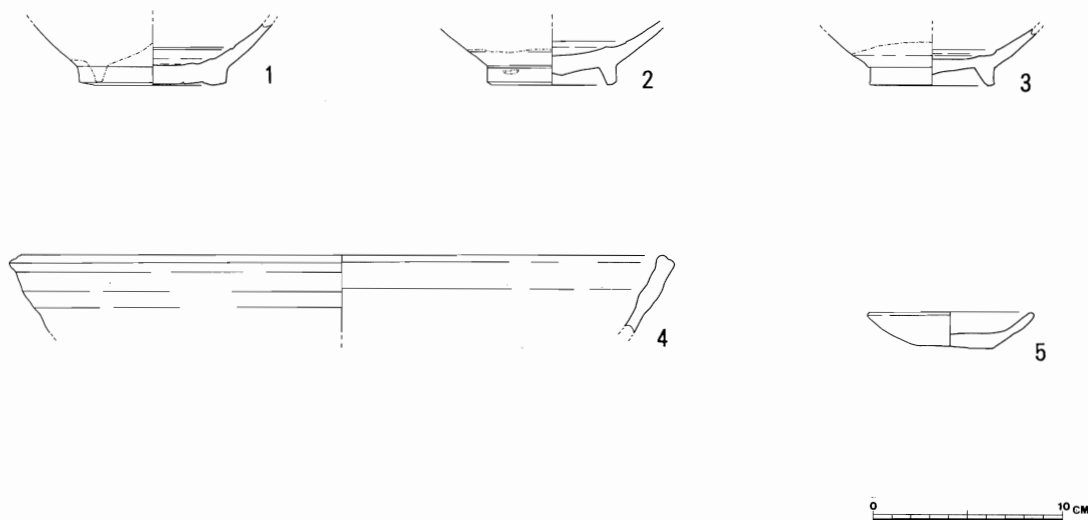
出土遺物 (第14図・14、15)

(14)はP386出土の土師器の坏底部である。復元底径6.6cmを測る。赤褐色を呈し、焼成は良好である。底部は回転糸切りだが、底部がへこんでおり高台状にみえる。全体的に歪みがみられる。底部はやや厚く、内面には回転ナデ痕が残る。(15)もP386出土の白磁皿VI2b類である。胎土は黄味を帯びた灰色で、釉調は淡化粧土を有する緑灰色で光沢がある。底径4.3cmを測る。内面には3本の櫛状工具で文様が入る。

S B 12 (第10図)



第14図 掘立柱建物跡（S B）出土遺物実測図



第15図 SD 1・SD 2 出土遺物実測図

建物の規模は2間(4.5m)×1間(3.1m)、軸方向はE-4.5°-Sを測る。検出面の標高は約1.9mである。柱穴は約20cm~30cm、深さ約10~30cmである。

S B 13 (第12図)

建物の規模は3間(7.66m)×3間(6.3m)、軸方向はN-3°-Eを測る総柱建物である。検出面の標高は約2mである。柱穴は約10cm~20cm、深さ約10cmである。南側の柱列は他の建物の柱穴列と比べ、大きく南東へ振っており、柵列の可能性もある。

S B 14 (第13図)

建物の規模は2間(5.16m)×1間(3m)、軸方向はN-11°-Eを測る。検出面の標高は約1.9mである。柱穴は約10cm~50cm、深さ約10~20cmである。西側の柱列はやや大きく浅い。

C. 土壌・墓

S K 1 (第16図)

東西約1.1m、南北約1mの楕円形を呈し、深さは約40cmである。検出面の標高は2.2~2.3mである。埋土は3層に分かれ、上から黒褐色粘質土、黒色粘質土混じり黒褐色粘質土、暗褐色粘質土と堆積している。第2層にはごく小さい炭粒が混じるが、焼土は見つからなかった。遺物は各層から出土しているが、特に完形に近い土師器皿が第1層と第3層で見つかった。淡黄褐色を呈す土師器皿は焼成が良い傾向がある。

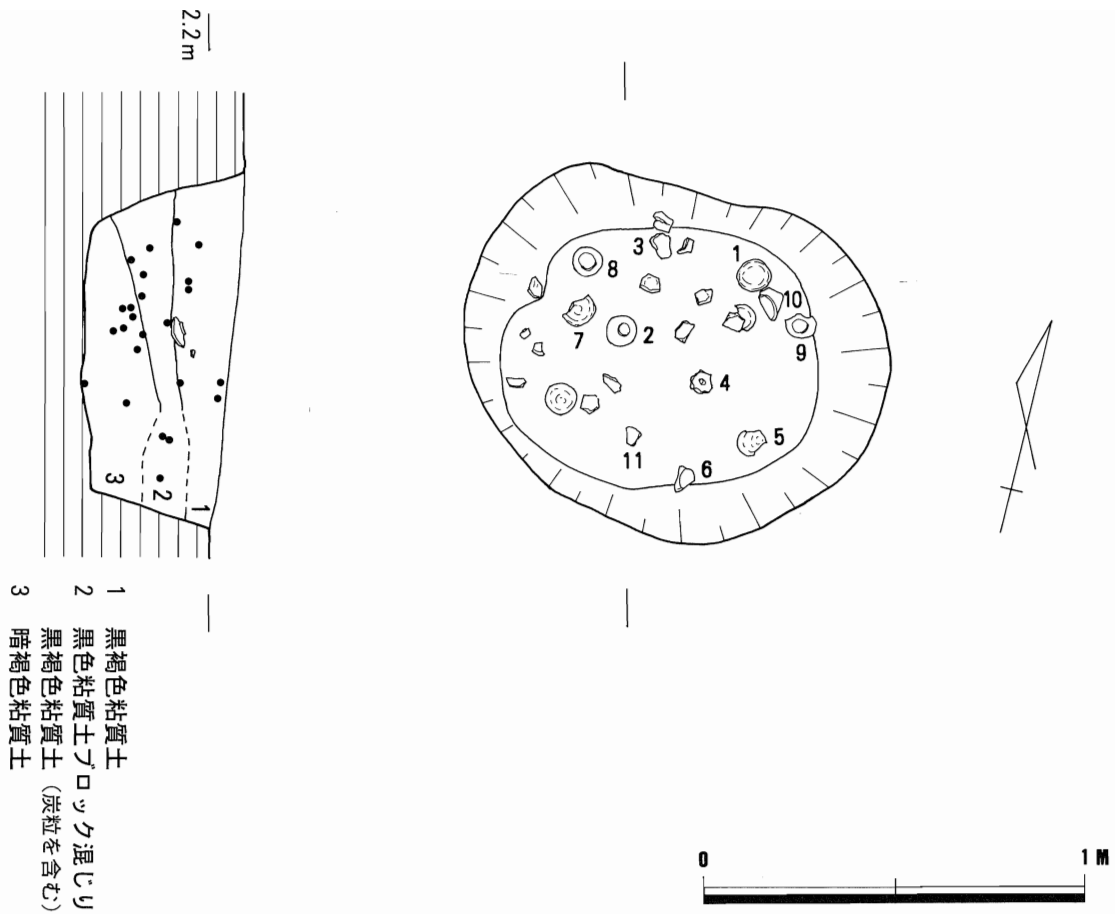
出土遺物 (第17図)

(2・3・4・5・11)は第1層から、(6)は第2層、(1・7・8・9・10)は第3層より見つかった。

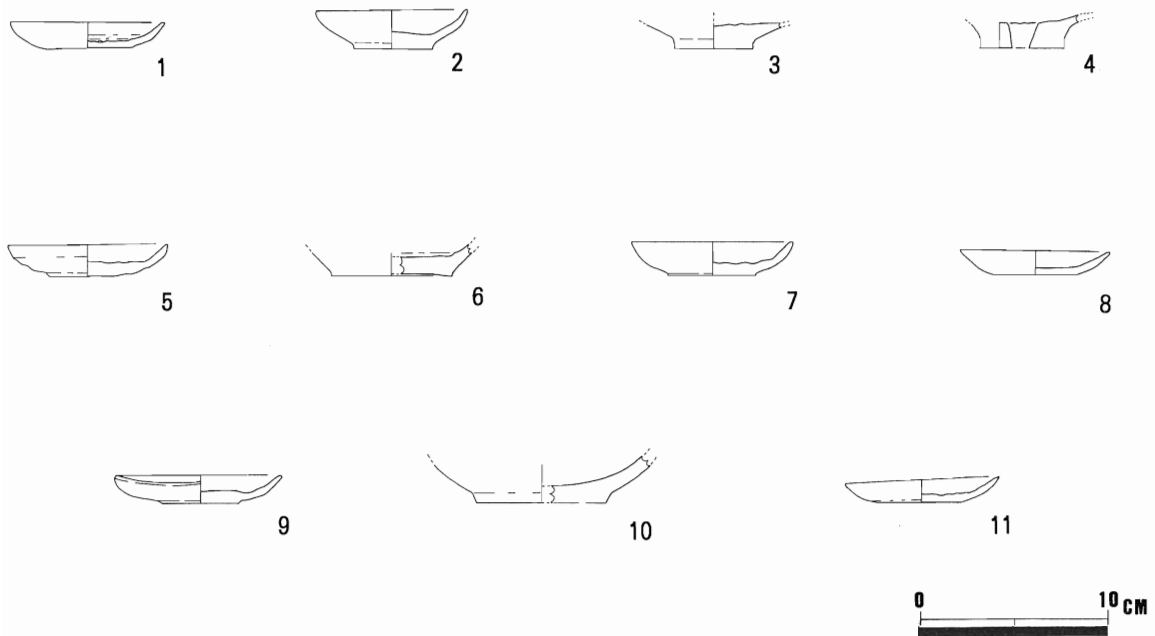
(1)は淡黄褐色の土師器皿である。口径8.2cm・底径4.4cm・器高1.4cmを測る。器壁はやや薄い。(2)は若干赤味を帯びた淡褐色を呈す。口径8cm・底径4.1cm・器高2.1cmを測る。底部はやや厚く、体部は内湾しながら上方へ立ち上がる。(3)は短灰褐色を呈し、底径は4.1cmである。底部は厚く、体部は横方向へ立ち上がると考えられる。(4)は淡褐色を呈す底部穿孔の皿である。底径4.41cmを測る。焼成前に上から穿孔している。(5)は淡黄褐色の土師器皿である。口径8.4cm・底径4.2cm・器高1.6cmを測る。体部はやや丸みをもって立ち上がる。(6)は淡褐灰色を呈す坏底部の破片である、復元底径6.3cmを測る。(7)は淡黄褐色の土師器皿である。口径8.4cm・底径4.6cm・器高1.8cmを測る。体部はやや丸みをもって上方へ立ち上がる。(8)は淡褐色の土師器皿である。口径8cm・底径4.5cm・器高1.3cmを測る。器壁が薄く体部は逆ハ字状に立上り、口縁端部は細くなる。(9)は淡黄褐色を呈し、ややひずんでいる。口径8.6cm・底径4cm・器高1.5cmを測る。底部はやや厚く、体部はやや丸みをもって立ち上がる。(10)は淡灰褐色を呈す坏底部の破片である。復元底径6.9cmを測る。体部は丸みをもって立ち上がると推定される。

S K 2 (第18図)

長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈し、深さは約35~40cmである。検出面の標高は約2.1



第16図 SK 1 実測図



第17図 SK 1 出土遺物実測図

mである。埋土は2層に分かれ、上から暗褐色粘質土混じり黒色粘質土、黒色粘質土混じり暗赤褐色粘質土と堆積している。上層にはごく小さい炭粒が混じる。遺物の出土状況は破片が多く、完形の土師器皿を伴うSK1とは対照的である。

出土遺物（第19図）

(1・3・4)は第1層、(2)が第2層の出土である。(1)は淡黄褐色の土師器皿で、口径7.7cm・底径4.4cm・器高1.7cmを測る。底部と器壁は厚く、体部は短く上方へ立ち上がる。(2)は土師器坏の底部で淡黄褐色を呈す。底径は5.4cmである。底部はやや分厚く、体部は緩やかに立ち上がる。内面には回転ナデ痕が残る。(3)は底部に穿孔される皿の底部である。淡黄褐色を呈し、底径4.8cmを測る。(4)も坏の底部と考えられる。淡黄褐色を呈し、底径6.6cmを測る。体部は横方向へ強く伸びると考えられる。

SK3（第20図）

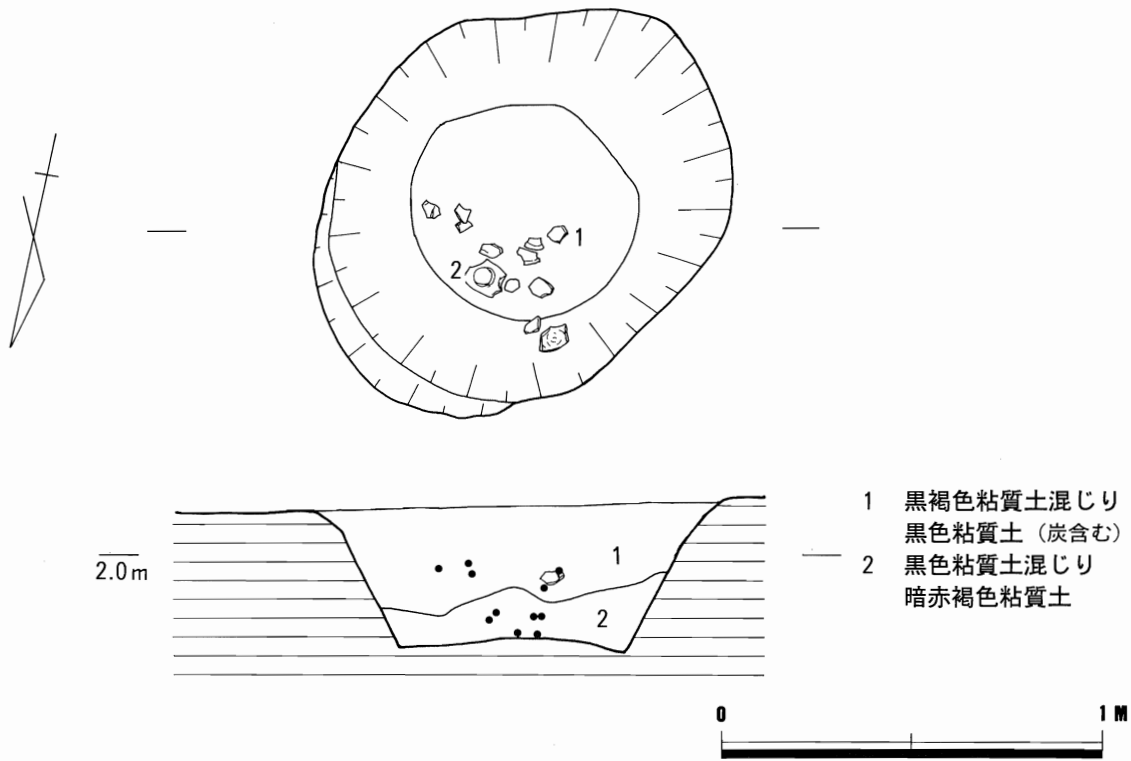
長径約0.75m、短径約0.7mの円形を呈し、深さは約20cmである。検出面の標高は約1.95mである。検出状況で既に土壌縁に焼土、炭と土師器の細片が観察された。床面には厚さ1～2cmの炭層、土壌南側の壁から床にかけて厚さ1cmの焼土があり、第2層は遺構検出面の層に非常に似ている。遺物は第1層が最も多いが、いずれもごく小さな破片しか見つからなかった。なんらかの目的で火を使い、当時の地山に近い土で埋めたと考えられる。

SK4（第21図）

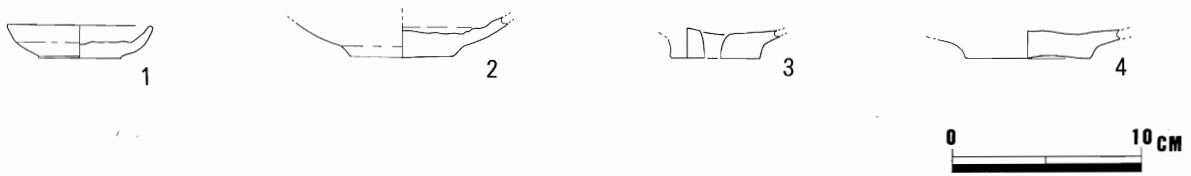
長軸約1.4m、短軸約0.6mの隅丸長方形を呈し、主軸は東西方向である。検出面の標高は約2mで、深さは約18cmである。埋土は暗褐色粘質土混じり黒色粘質土で炭粒が混じる。中より完形の土師器皿5枚、鉄刀、和鏡が出土した。また、長辺12cm・短辺5cm程の石も見つかった。和鏡の下の土から若干骨の細片が見つかり、副葬品を伴う墓と考えられる。遺物はいずれも床面より浮いた状態で見つかり、棺上あるいは遺体の上に置かれたと推定される。

出土遺物（第22図）

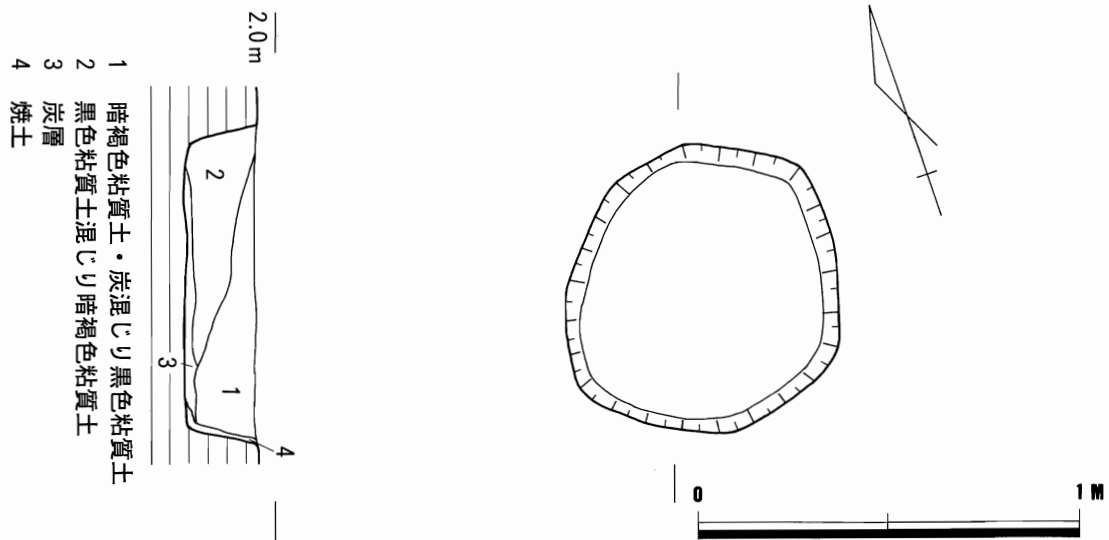
(1)は淡灰色を呈し、表面は風化が激しい。口径7.4cm・底径4.4cm・器高1.8cmを測る。底部は厚く、体部は短く上方へ立ち上がる。内面下位はナデにより段がつく。(2)は淡黄褐色を呈す。口径8cm・底径4.4cm・器高2cmを測る。外面は下位に強いナデが施され、段がつく。内面にもナデによる段がつき、口縁端部がやや鋭く上方に立ち上がる。(3)も淡黄褐色を呈し、口径8.2cm・底径4.8cm・器高1.8cmを測る。外面は下位に強いナデが施され、段がつく。内面にもナデにより段がつく。(4)は淡黄褐色を呈し、口径8.4cm・底径4.8cm・器高1.8cmを測る。口縁端部は強いナデが施され面取りされる。内面は強いナデにより段がつく。やや底部が薄い。(5)は淡黄褐色を呈す。口径8.4cm・底径4.6cm・器高1.8cmを測る。内外面共には強いナデが施される。口縁端部はやや鋭く上方に立ち上がる。(6)は鉄製の刀形刃物である。全長29.1cm・刃部の長さ21.6cm・茎部の長さ7.5cm・刃幅2.8cm・厚さ約0.5cmを測る。(7)は和鏡である(註10)。鏡面を上にし



第18図 SK 2 実測図



第19図 SK 2 出土遺物実測図



第20図 SK 3 実測図

た状態で検出された。かなり腐食が進んでおり、特に鏡背面の文様は判然としなかった。直径10.4cmを測り、鏡面の厚さは約1mmである。縁は外傾式で幅1mm・高さ4mm、界圏は単圏で幅1mmである。紐座は円錐紐である。文様は菊と葉が一葉かろうじて判別できる。

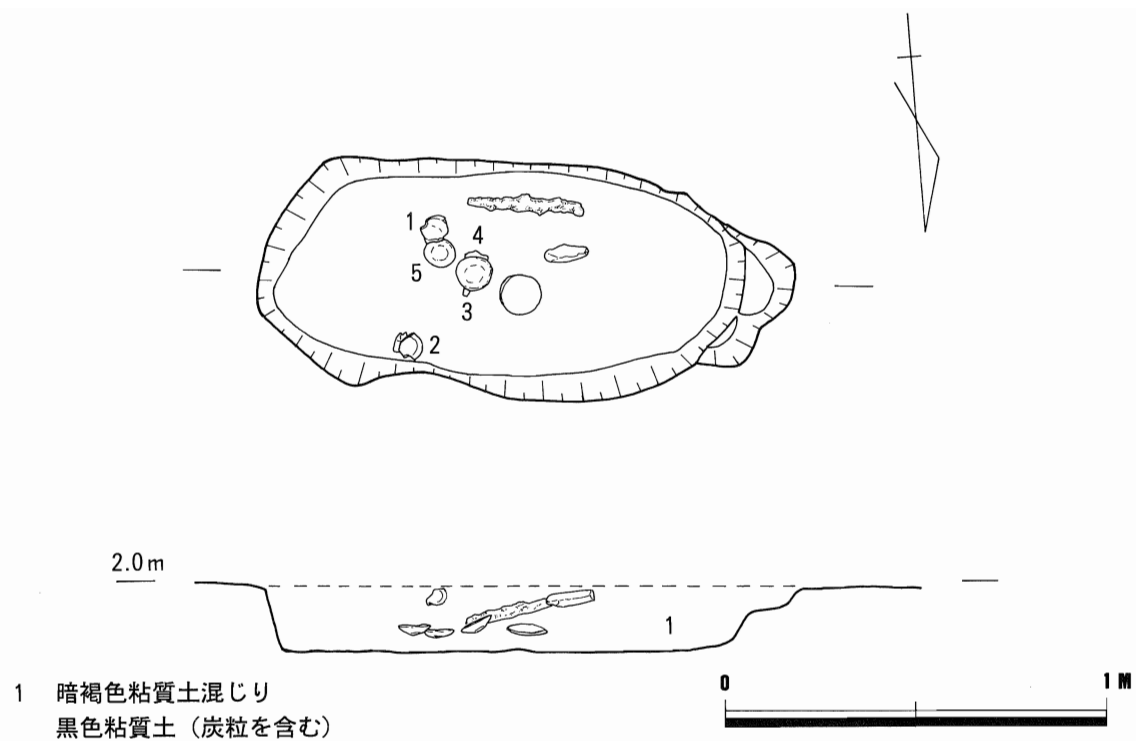
D. 柱穴類

柱穴と推定される穴は660見つかった。柱穴内には完形あるいはほぼ完形の土師器が出土するものがある。穴の床面や側面に接した状態で見つかることは少なく、柱穴を埋める際の祭祀と考えられる。特に土師器皿を埋める状態が多い。柱穴内から陶磁器が見つかるのはごく稀であった。

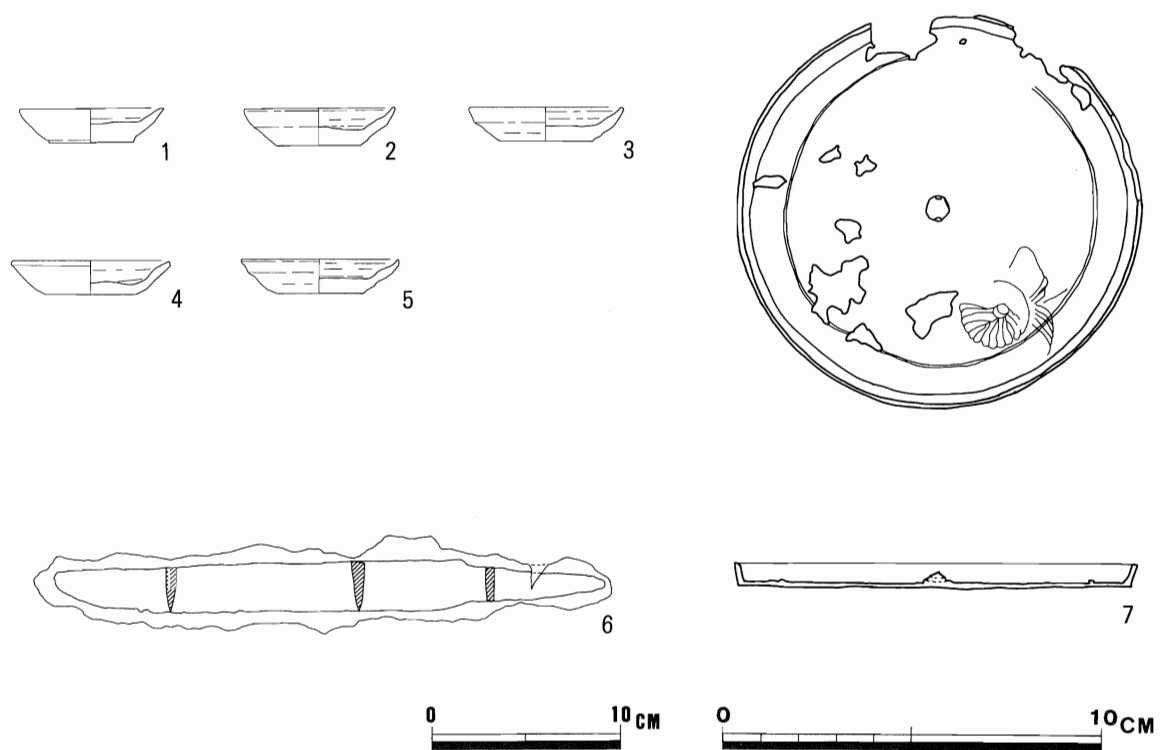
出土遺物（第23図）

(1)はP38出土の土師器皿である。淡赤黄褐色を呈し、焼きが良くやや硬質である。口径8.6cm・底径4.4cm・器高1.5cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。内外面ともに回転ナデで仕上げられ、体部は逆ハ字状に開く。口縁端部はやや肥圧する。(2)はP79出土である。淡赤黄褐色を呈し、口径8.8cm・底径5cm・器高2.1cmを測る。底部が厚く、器壁も厚い。(3)はP403出土の底部に穿孔した皿である。淡赤黄褐色を呈し、口径8.4cm・底径3.8cm・器高2cmを測る。底部は柱状で厚く、焼成前に上から穿孔される。皿部は浅い。(4)はP83出土の土師器皿である。淡黄褐色を呈し、口径8.1cm・底径4.3cm・器高1.8cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。器壁は全体的に厚く、口縁端部は外反する。(5)もP83出土の土師器皿である。淡黄褐色を呈し、口径9cm・底径5cm・器高2.2cmを測る。底部には板状圧痕が残る。体部はやや内湾し、口縁端部は外反する。(6)はP142出土の輪状高台を有する皿で類例ののないものである。淡黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。底径5cm、高台の高さは1cmである。(7)はP189出土の土師器皿である。灰白色を呈し、外面には黒斑がある。口径10.8cm・底径4.8cm・器高2.4cmを測る。器壁は薄く、底部には回転糸切り痕、内外面は回転ナデ痕が顕著に残る。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁端部は外反する。(8)はP141出土の土師器坏である。淡黄褐色を呈し、内面には黒斑がある。口径12.6cm・底径5.4cm・器高4cmを測る。底部には回転糸切り痕、内外面は回転ナデ痕が顕著に残る。(9)はP372出土の坏である。灰白色を呈し、口径12.2cm・底径6.2cm・器高3.9cmを測る。器壁は薄く、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ痕が顕著に残り段状になる。内面は丁寧に仕上げられている。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部はやや外反する。(10)はP82出土の土師器坏である。淡黄褐色を呈し、口径14.8cm・底径6.2cm・器高4.1cmを測る。底部はやや厚く、体部は内湾して立ち上がる。(11)はP198出土の土師器皿である。色調は淡赤黄褐色を呈し、口径8.4cm・底径4.2cm・器高1.8cmを測る。全体の器壁は厚く、底部には回転糸切り痕が残る。体部はやや外反気味に立ち上がる。(12)はP198出土の土師器坏の口縁部破片である。色調は淡黄褐色を呈し、復元口径15cmを測る。

体部は内外面とも回転ナデ痕が残る。(13)はP363出土の土師器坏である。淡褐灰白色を呈し、



第21図 SK 4 実測図



第22図 SK 4 出土遺物実測図

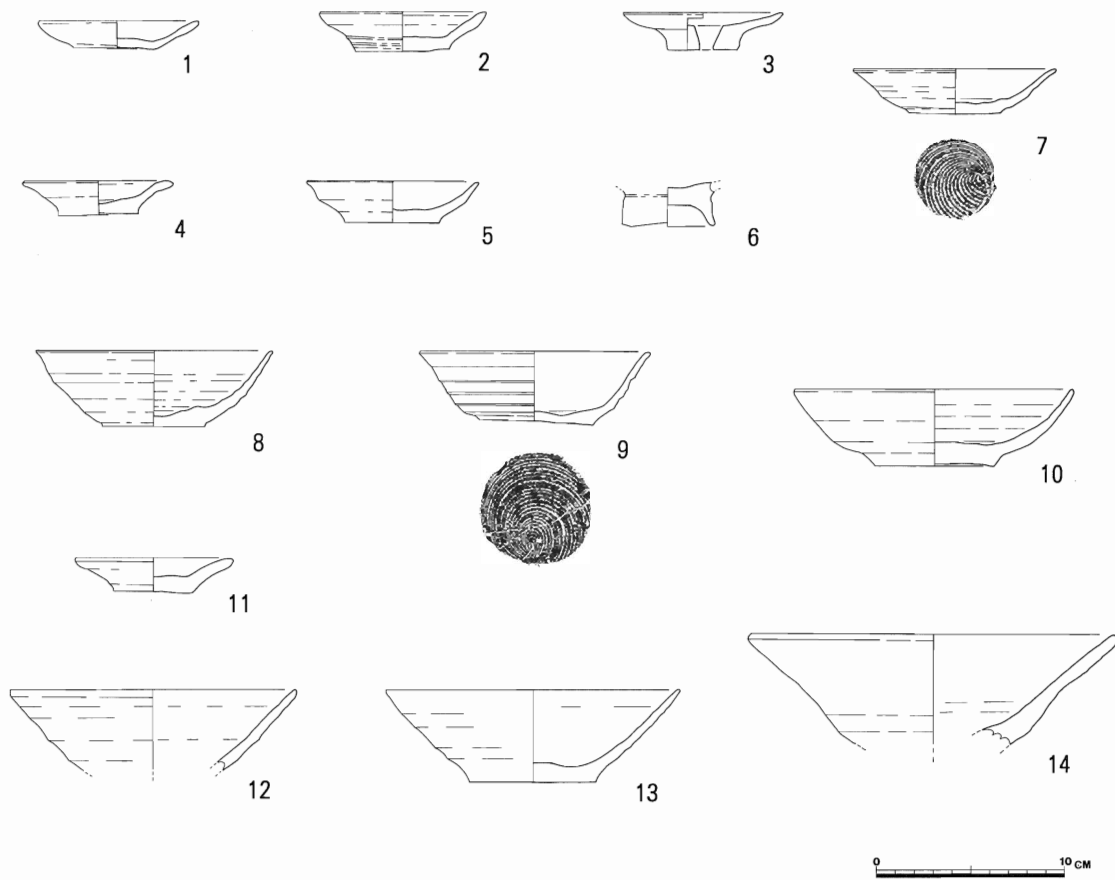
口径15.6cm・底径6.7cm・器高4.9cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、体部は逆ハ字状に開く。内外面ともに回転ナデで仕上げられている。(14)はP 8 出土の土師器坏の口縁部破片である。色調は淡褐色を呈し、内面には黒斑がある。復元口径は19.6cmである。器壁はやや厚く、直線的で逆ハ字状に開く。外面上位は丁寧なナデで仕上げられる。

P 399 (第24図)

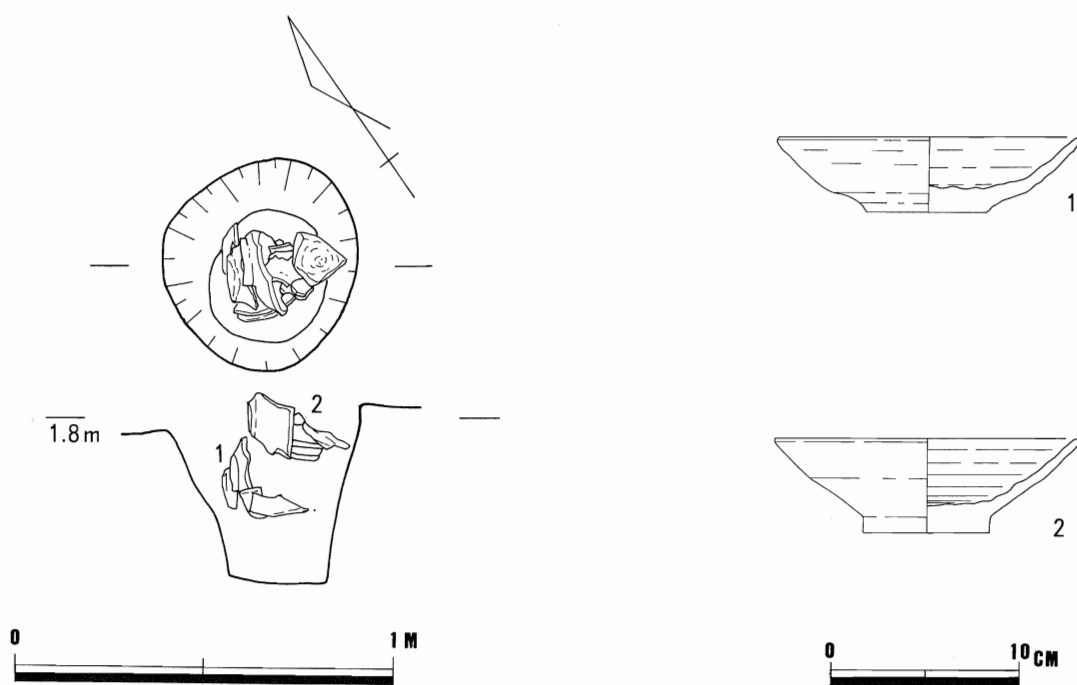
調査区南側中央に位置する。検出面の標高は1.75～1.85mである。直径約50cm、深さ約49cmを測り、埋土は黒色粘質土である。土師器が上位から中位にかけてまとまって出土したが、いずれも柱穴の壁や床には接していない。遺物は大きく二群にまとまっており、土師器の坏底部は3個体分見つけたが、完形に近く復元されるのは2個体であった。

出土遺物 (第24図)

(1)は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。口径16cm・底径6.5cm・器高4cmを測る。底部はやや厚く、体部は丸みをもって立ち上がる。内外面ともに回転ナデで仕上げられている。(2)も淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。口径16.1cm・底径6.6cm・器高5.9cmを測る。底部は厚く、やや柱状になる。体部は逆ハ字状に開き、内面には回転ナデ痕が残る。



第23图 柱穴類出土遺物実測図



第24图 P399実測図

3. 遺物包含層出土遺物

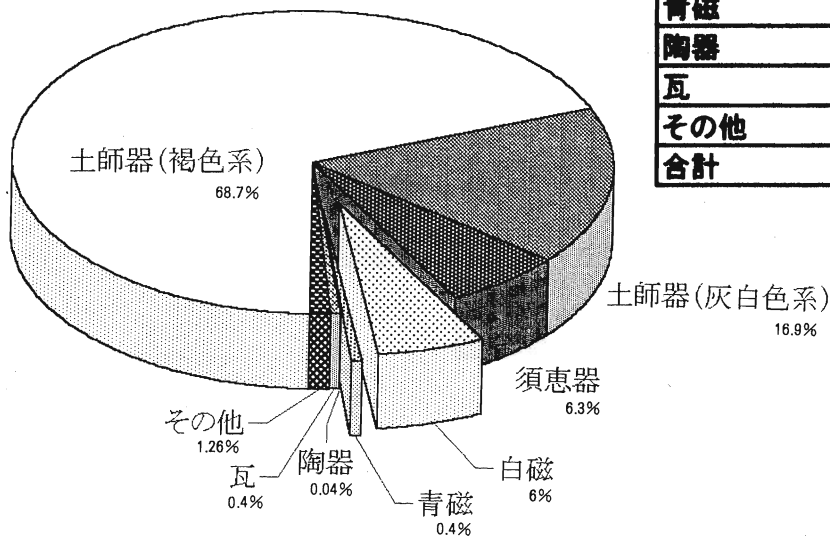
遺物包含層（主に黒色粘質土）の組成を表2に示した。破片数では8,885点出土した。最も多いのは土師器で85.6%を占める。この内、特殊な用途と考えられる灰白色系の土師器は土師器全体のうち19%を占める。主体は黄褐色の土師器である。須恵器は6.3%を占め、遺構より古い古代のものがかなり出土する。瓦は古代のもので、0.4%を占める。他に緑釉陶器の細片が見つかったが、古代の遺物はいずれも河川堆積などによる混入と考えられる。貿易陶磁は白磁6%、青磁0.4%、陶器類0.04%である。白磁が大多数を占め、青磁と陶器類が少ないのが特徴である。

A. 土師器（第25図）

(1)は皿である。淡黄褐色を呈し、口縁端部はやや外反する。(2)は穿孔された柱状高台皿である。糸切りによる底部切離し以前に上部より穿孔したと推定される。淡黄褐色を呈す。(3)は台付皿である。淡褐色を呈し、皿部は浅く造ってある。(4)、(5)は皿、坏で、灰白色を呈す。器壁が薄く、内外面ともにロクロ痕を残す。(6)~(13)は坏である。(6)は淡褐灰色で須恵質に近い。丁寧なナデが施され、口縁端部は外反する。(7)は淡赤褐色で底部が分厚く、体部は若干丸みをもちながら上方へ立ち上がる。内面には顕著にロクロ痕が残るが、口縁端部付近は丁寧に仕上げられている。(8)は淡黄褐色を呈し、内外面ともにロクロ痕が残る。(9)は淡赤褐色で若干厚い底部である。体部は丸みを持ち、丁寧な回転ナデが施される。(10)は淡黄褐色、(11)は淡赤褐色を呈し、体部は逆ハの字に開く。(12)は全体が風化しており、調整は不明確である。(13)は淡黄褐色で若干底径と口径の差が少なくなる。体部はやや内湾し、内面には回転ナデ痕を顕著に残す。(14)は灰白色の脚部であるが、体部の立上りがきつく、全体の器形は不明である。(15)は大型器種の底部で、体部にひずみが見られる。淡灰褐色を呈する。(16)は淡黄褐色を呈する柱状高台皿と考えられる。(17)は灰白色の小壺である。

B. その他の遺物（第26図）

(1~8)は須恵器である。(1)は蓋である。口径は11.8cmを測る。輪状つまみを有し、天井部は回転ヘラ切りの後にナデを施す。胎土は白色粒を含み、色調は灰色を呈す。焼成は良好である。(2)は坏である。胎土は白色粒子を微量に含み、暗灰色を呈す。口径12.6cm・底径5.6cm・器高5.3cmを測る。体部は直線的に大きく開く。底部には低い高台がつく。内外面とも回転ナデが施される。(3)は坏の口縁部である。復元口径16.8cmを測る。淡灰色を呈し、焼きが良く硬質である。体部はやや丸みを持ち、口縁部を若干外反させる。内外面ともに回転ナデが施される。(4)、(5)は(3)のような須恵器坏の底部になると推定される。厚い底部で回転糸切り痕を残す。内面には顕著に回転ナデ痕が残る。(6)は壺類の底部と考えられる。淡黄灰色を呈し、砂粒を比

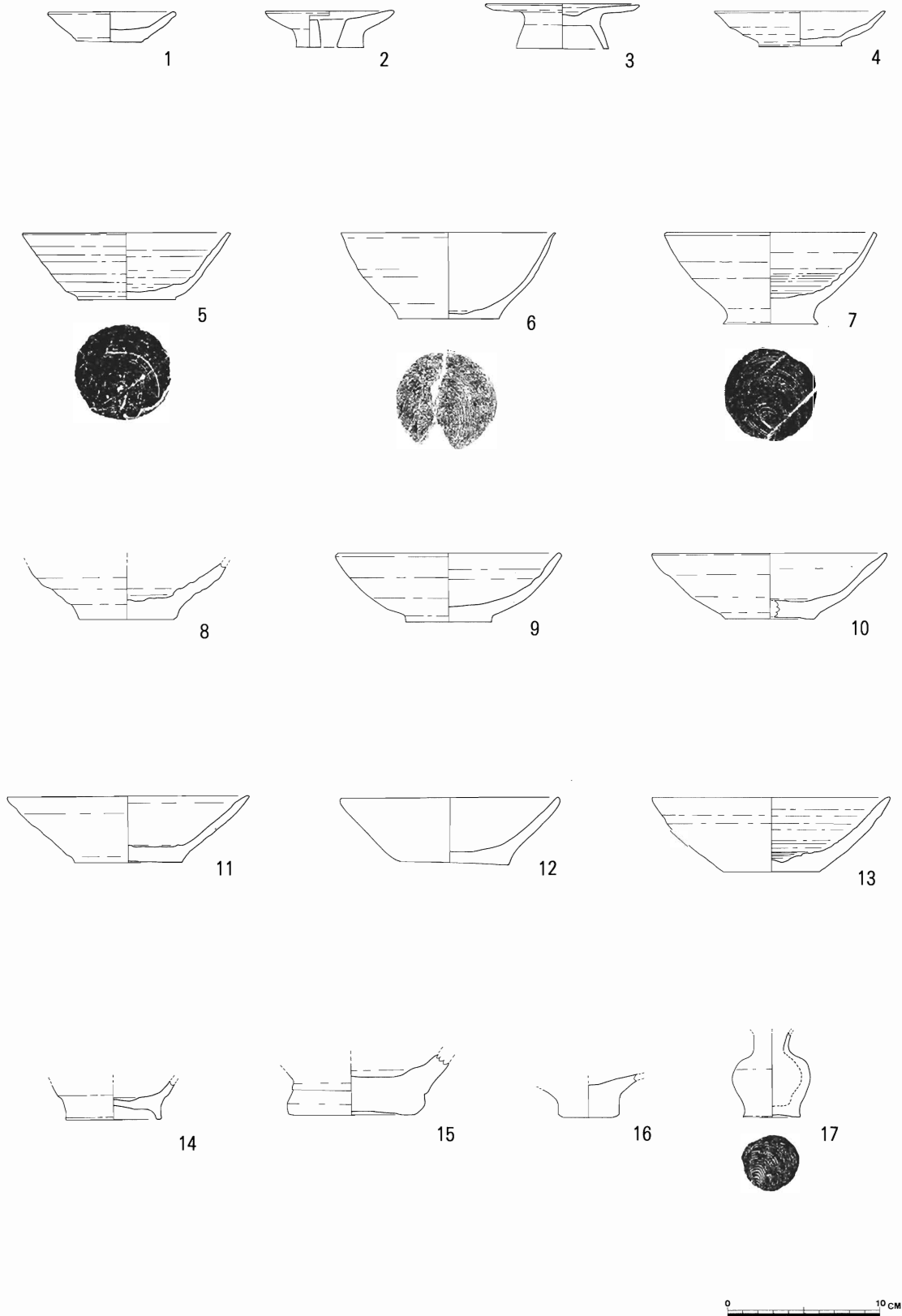


	破片数	%
土師器(褐色系)	6,106	68.7
土師器(灰白色系)	1,499	16.9
須恵器	556	6.3
白磁	538	6
青磁	41	0.4
陶器	4	0.04
瓦	40	0.4
その他	103	1.26
合計	8,887点	

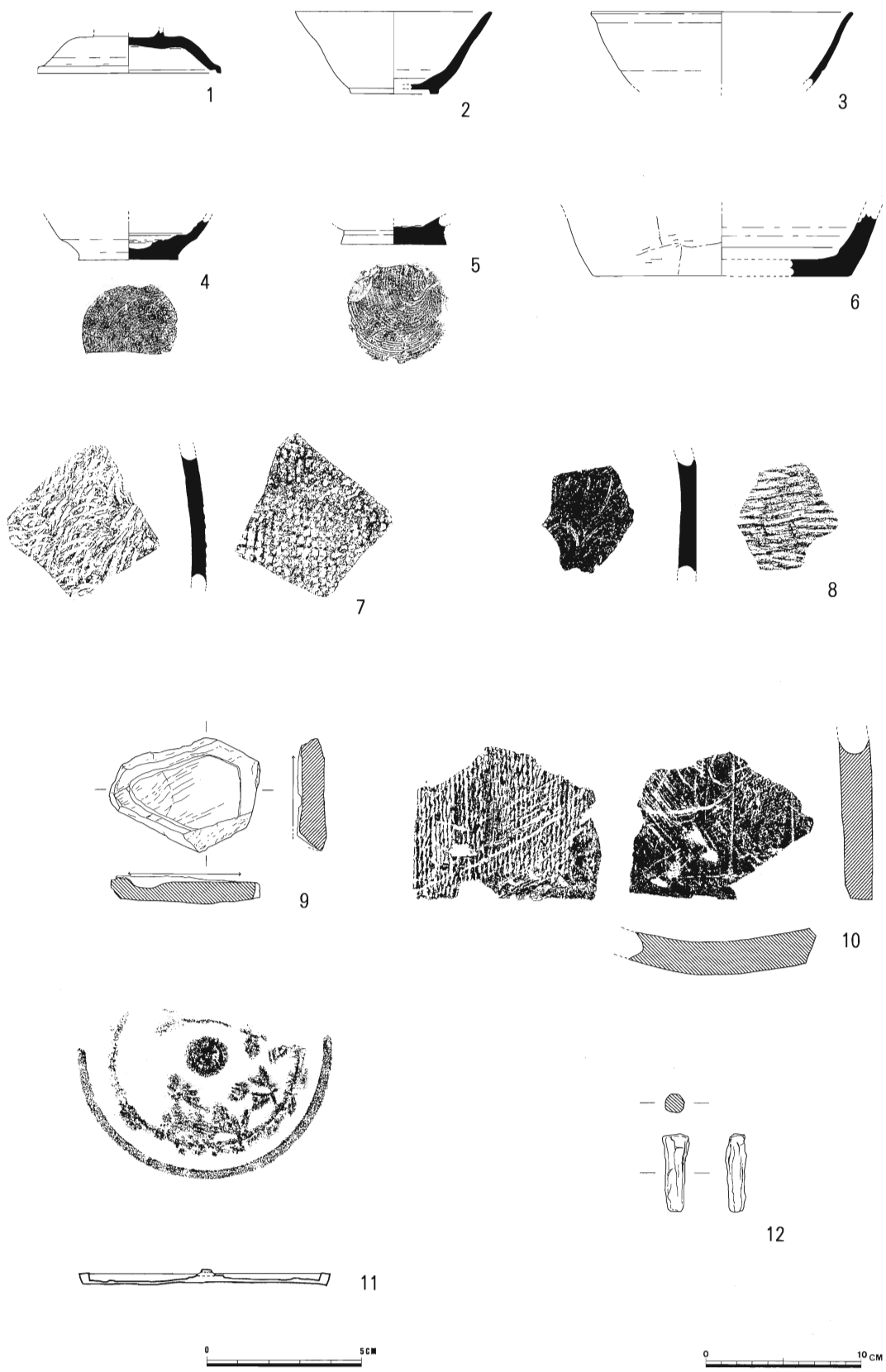
表2 遺物包含層出土遺物組成表

白磁		青磁		
碗	Ⅱ類口縁	21	龍泉窯系	19
	Ⅱ類底部	14	同安窯系	14
	Ⅳ類口縁	86	鎮蓮弁文	5
	Ⅳ類底部	11	高麗青磁	3
	Ⅴ類底部	8		41
	Ⅵ類	8		
	Ⅶ類	2	陶器類	4
	直口縁	30		
	外反口縁	67		
	XⅡ類	13		
皿	Ⅷ類底部	7		
	不明破片	164		
	Ⅱ類	3		
	Ⅳ類	12		
	Ⅴ類	18		
	Ⅶ類系	12		
	Ⅲ類系	1		
	不明破片	44		
	鉢	2		
	壺・水注	2		
その他	合子	9		
	青白磁	4		
		538		

表3 遺物包含層出土貿易陶磁組成表



第25図 包含層出土遺物実測図(1)



第26图 包含層出土遺物実測図(2)

較的多く含む。平底で復元径は16.8cmである。外面はへら削りののち、不定方向のナデで仕上げられる。内面は回転ナデを施す。(7)・(8)は須恵器質で甕類の破片である。(7)は上部に自然釉がかかり、灰白色を呈す。外面は5mm四方の格子叩き、内面は同心円叩きの痕跡を残す。(8)は外面に自然釉がかかる。暗灰色を呈す。外面は平行叩き、内面は同心円叩きの痕跡をナデ消している。(9)は石硯である。石材は三群変性岩で、遺跡北側の山肌に露出しているものと考えられる。不整形な六角形を呈す。海部には使用痕が顕著に残り、陸部周辺の縁は1mm程と低い。(10)は平瓦である。胎土は砂粒を比較的多く含み、暗灰色を呈する。凸面には縄叩き痕、凹面には布目痕と模骨痕を残す。(11)は和鏡である(註11)。X線撮影の結果、腐食がかなり進行しており、文様は部分的にしか分からなかった。直径は8cm、鏡面の厚さは1mmである。縁は外傾式で幅3mmを測り、紐座は菊座である。界圏は幅2mmの単圏にふさなりの梢をまわし、二羽の小鳥を菊を配していると考えられる。(12)は釘か楔類と考えられる鉄製品である。長さ5cmを測り、上部はやや太くなっている。

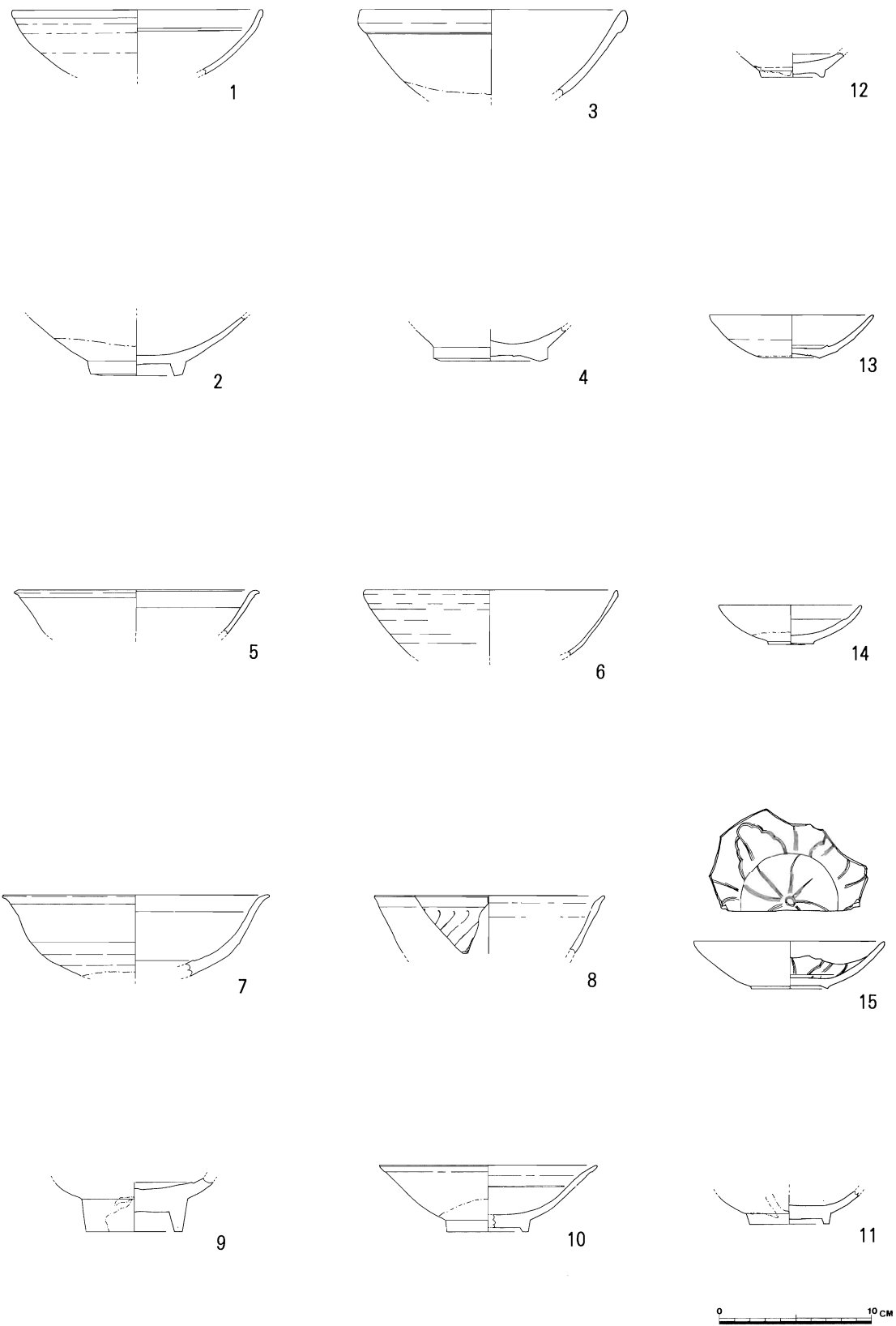
C. 貿易陶磁 (第27図・第28図)

貿易陶磁の分類は太宰府のものを用いた(註12)。表3には太宰府分類に基づく貿易陶磁のそれぞれの破片数を示した。最も多いのは白磁碗Ⅳ類である。太宰府C期の陶磁器が最も多く、D・E期の陶磁器は少ない。B期及びF期の陶磁器は出土しなかった。

白磁・青白磁 (第27図・第28図1～9)

(1)は碗類の口縁部である。復元口径16.2cmを測る。釉調は淡黄灰色で小さな玉縁口縁を持ち、体部は丸みをもって立ち上がる。(2)も碗Ⅱ類の底部である。高台は内面が外反する。釉は内面と外面上部にかかり、露胎部との境は化粧土が施されており、ピンク色に発色している。(3)は碗Ⅳ類の口縁部である。復元口径は17.6cmを測る。釉は灰白色で貫入が見られ、体部上半部にかかる。大きな玉縁口縁である。(4)はⅣ類の底部である。底径は7.4cmを測る。外面は露胎、内面には乳白色で失透性の釉がかかる。低い削り出し高台で、中央部には工具による削り段が残る。(5)は碗Ⅴ4類である。復元口径は17cmである。釉は灰白色で貫入が見られる。体部は直線的に立ち上り、口縁端部は横に強く屈折させる。口縁端部上面には厚く釉がかかっており、丸く見える。内面上位に沈線を施す。(6)は碗Ⅴ類あるいはⅧ類の口縁部で復元径は16.6cmである。釉は灰白色で光沢がある。外面には釉の貫入が目立つ。体部はやや丸みをもち、口縁端部は若干肥圧する。(7)は碗Ⅴ2類である。口径17.4cmを測る。胎土は黒色粒を含みやや粗い。釉調は淡灰色で下半部には貫入が多い。

体部は深く丸みをもち、口縁端部を外反させる。内面上位に沈線、内面見込みに段を有す。(8)は碗Ⅴ2b類である。釉は乳白色で光沢がある。外面体部には縦のへら片彫り文を施す。口



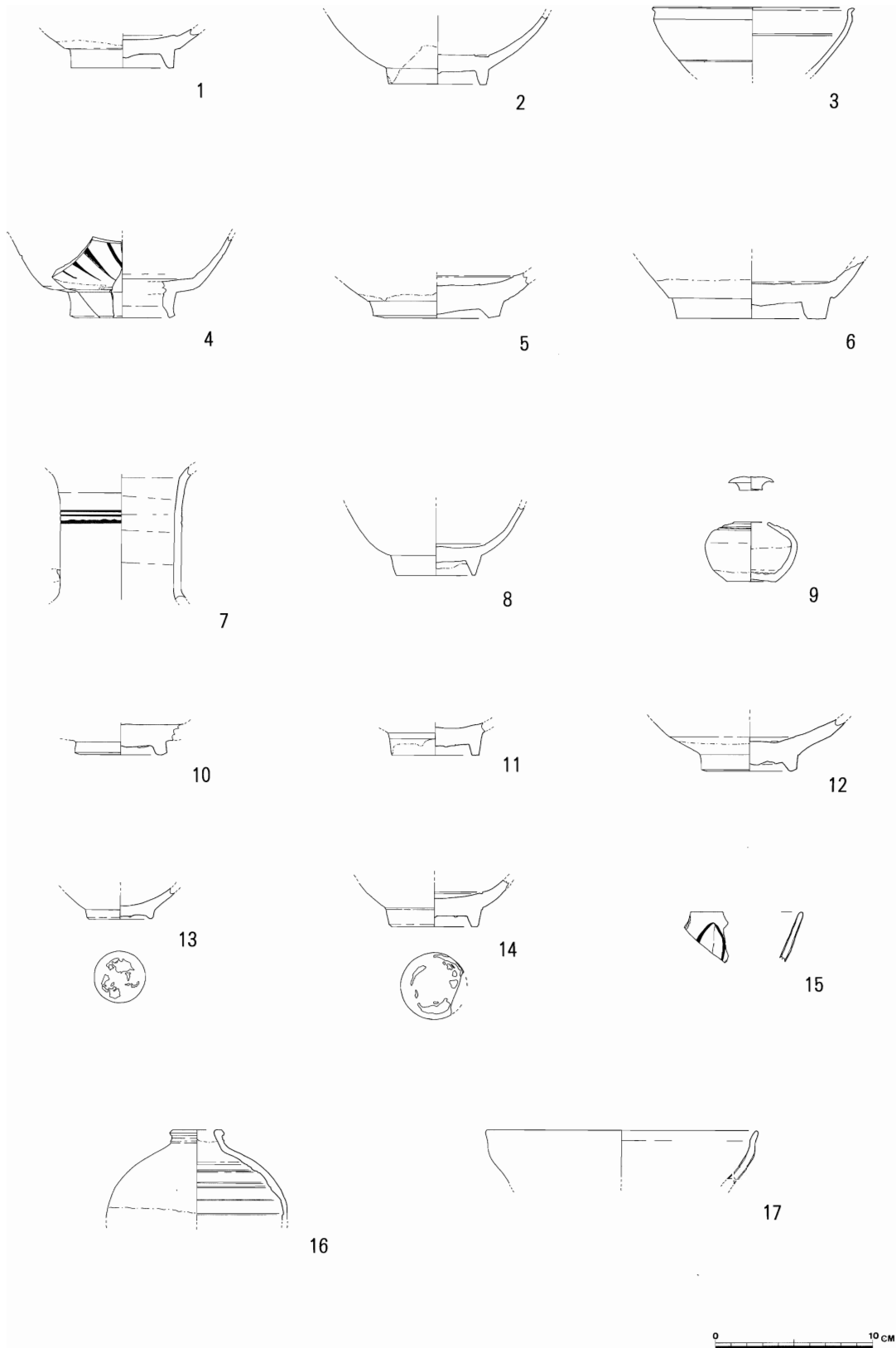
第27图 包含層出土遺物実測図(3)

縁端部はやや外反しするが、内面は強いナデでより屈折し、外面はナデによりややくぼむ。(9)は椀Ⅴ類の底部である。釉は光沢のある灰白色で貫入がある。高台部に垂下し、厚くかかる。内面見込みに段を有す。(10)は椀Ⅵ類である。口径11.5cm・底径5.3cm・器高4.35cmを測る。胎土は陶器質でしまりが悪い。釉調は淡灰黄色を呈し、光沢はない。貫入が多く見られる。椀類よりも低くて小さい高台をもち、体部は逆ハの字状に開き、器形は皿に近い。口縁部をやや外反させ、内面中位に浅い段を有す。(11)も椀Ⅵ類の底部で、径5.3cmを測る。(12)は皿Ⅰa類である。底径4.2cmを測る。胎土はやや粗く、灰白色を呈す。釉調は淡緑灰色で貫入が認められる。低い高台が付き、内面下位に段がある。(13)は皿ⅤかⅥ類である。胎土は精良で釉は化粧土が施され、淡黄灰色を呈す。底は上げ底気味で内面見込み部に段を有す。(14)は皿Ⅵ類である。釉は淡緑灰色を呈す。底部は若干厚く、内面中位に段がある。(15)は皿Ⅶ2b類である。胎土は灰白色で精良、釉は黄味を帯びた淡灰色を呈し、光沢がある。釉の境部は赤く発色する。底部にわずかに高台状のものを削り出している。内面低位に段をもち、内面全体には花文を配している。

(第28図・1)は椀Ⅶ類である。胎土は粗く、釉は淡緑灰色で貫入が見られる。椀Ⅵ類より高い高台をもち、内面見込みに段を有す。(2)は白磁椀Ⅷ類である。底径は6.2cmを測る。釉は灰白色で貫入が認められる。内面見込み部の釉を輪状に掻き取っている。(3)は椀Ⅺ類の口縁部である。胎土は黒色粒を少量含み、釉は淡黄灰色である。口縁端部は屈曲し、内面中位に段がある。(4)もⅪ類である。胎土には黒色粒を少量含む。釉調は淡緑灰色で光沢があり、化粧土を有す。椀Ⅱ類より高い高台をもち、高台端部は若干外反する。内面見込みに段があり、外面には縦のへら片切り文を付けている。(5)、(6)は内面見込みの釉を掻き取るやや大型の底部で、鉄絵などが体部に施される鉢と考えられる。底径は(5)が8.1cm、(6)は9.4cmである。(7)は壺・水注類の頸部と考えられる。復元径は6.8cmである。胎土は白色で釉は光沢がある淡緑灰色で内外面共にかかる。沈線が3本あり、最下のものが最も太い。耳と推定される突起部が下方に残る。(8)は青白磁の椀である。胎土は精良で釉調はガラス質の白色を呈し、釉の厚い部分は青色になる。高台内面まで釉がかかる。高く尖った高台をもち、体部は屈曲しながら上方へ立ち上がる。内面見込みに段がある。(9)は完形の合子である。蓋と身は約10m程離れた地点でそれぞれ出土したが、この種のものには他には見られないため組み合わせると判断した。いずれも胎土は灰白色の精良なもので、釉は光沢のある灰白色である。蓋は天井部に施釉される。身は化粧土があり、外面下位までと内面中位まで施釉される。内面底には回転ナデ痕が顕著に残る。外面上位には沈線が2本施される。

青磁・陶器類 (第28図・10～15)

(10)は龍泉窯系青磁椀の底部である。底径5.6cmを測る。胎土は淡灰色でやや粗く、釉は淡緑色である。(11)も龍泉窯系青磁椀の底部である。底径は5.9cmである。胎土は灰色で密、釉はく



第28图 包含層出土遺物実測図(4)

すんだ緑灰色を呈し、露胎部は茶赤色に発色している。高台内面には釉と砂が少量付着している。器肉が厚く、底部の厚さとほぼ一致する。(13)、(14)は初期高麗青磁である。(13)は底径4.2cmを測り、小椀と考えられる。胎土は灰色でやや粗い。釉は暗緑灰色で全面施釉される。低い高台をもち、高台内面には白色耐火土の目あとが付着する。(14)は椀である。胎土は淡緑灰色で、気泡が見られる。釉は暗緑色で全面に施釉される。内面見込みに段をもち、高台内面には胎土目が輪状に付着している。

(15)は龍泉窯系青磁椀Ⅰ5類である。胎土は淡灰色で精良、釉は淡緑色でやや厚くかかる。外面にしっかりと削りだしの鎬蓮弁文をもつ。(16)は中国陶器の瓶・壺類と考えられる。胎土は淡灰色で黒色粒を含み、精良である。釉は灰褐色で外面上半部と口縁部内面まで薄く施される。短い頸部には沈線状の段が付き、内面の露胎部にはヘラ状工具によるナデ痕か、横線が数条明瞭に残る。(17)は天目茶碗である。復元口径は17.4cmである。胎土は灰色で釉は黒色の鉄釉が厚くかかり、口縁部は銅銹色に発色する。口縁上部が若干くびれる。

註

- (1) 榊原博英 1996 「横路遺跡」『発掘された地震痕跡』
埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会
- (2) 貿易陶磁については太宰府市教育委員会の山本信夫氏にご教示いただいた。
貿易陶磁の分類と時期については以下の文献を主に参照した。
森田勉・横田賢次郎 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」
『九州歴史資料館研究論集4』
山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁」
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (3) 内田律雄 1986 「石見国分寺瓦について」『山陰考古学の諸問題』
山本清先生喜寿記念論集刊行会
浜田市教育委員会 1994 『下府廃寺跡』
- (4) 浜田市教育委員会 1989 『石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報』
前掲註3
- (5) 浜田市教育委員会 1992 『下府廃寺跡』
- (6) 島根県教育委員会 1992 『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会 1995 『一般国道9号江津道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- (7) 建物は総柱建物、側柱建物、中抜け側柱建物に分類して表記した。
前川要 1996 「中世の家族と住居」『考古学による日本歴史 15 家族と住まい』雄山閣出版社
- (8) 前掲註2
- (9) 森田稔 1995 「中世須恵器」
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (10) 中野政樹編 1967 「和鏡」『日本の美術 №42』至文堂
保坂三郎 1973 『和鏡』人文書院
青木豊 1992 『和鏡の文化史』刀水書房
- (11) 前掲註10
- (12) 前掲註2

IV. 小 結

1 遺構について

検出された遺構は個々では明確な時期を決めにくいものがほとんどであったが、建物及び溝の軸方向を北基準で見ると大きく東に $1^{\circ} \sim 4^{\circ}$ に振る建物群(SB1・3・8・13)と東に $9^{\circ} \sim 12^{\circ}$ 振る建物群(SB2・7・10・11・12)及び溝(SD1・2)にまとまりが見られる。このうち、時期の決定できる遺構は後者のグループであるSB7のP114より出土した土師器の坏(第14図・12)は古市遺跡のSD2002出土の土師器坏に類似しており、13世紀前半頃と考えられる(註1)。また、SD1からは龍泉窯系青磁の破片や同安窯系青磁碗の底部(第15図・3)が出土しており、遺跡全体では太宰府C期(11世紀後半～12世紀前半)の貿易陶磁である白磁が主流を占めている中では新しい様相をもっている。

したがって、11世紀後半～12世紀前半には東に $1^{\circ} \sim 4^{\circ}$ に振る建物群、12世紀中頃からは東に $9^{\circ} \sim 12^{\circ}$ 振り区画溝を伴う建物群へと大きく二時期の主要遺構の変遷が伺える。ただし、この傾向に該当しない建物も存在する。また注目すべき遺構は墓と考えられるSK4である。形態から土壇墓と見られ、副葬品は土師器皿5枚と鉄製の刀形刃物、和鏡と非常に豊富である。山陰ではこれほど副葬品のそろったものは見受けられない(註2)。明らかに集落内に作られている。周囲の建物が充分復元できなかったためやや明確な位置付けはできないが、新たな屋敷地の創設に関わる屋敷墓と考えられる(註3)。平面配置から見るとSB7やSD1と組み合わせる可能性もあるが、SK4の出土遺物はSB7やSD1より若干古いと考えられる。

遺構は調査区の北東側では密集しており、南西側では稀薄である。調査区南西側の遺構検出面は砂質が強い。遺構検出面の標高も調査区北東側と南西側では最大約60cmの比高差があり、東方向から西方向へ緩やかに傾斜している。調査区西側は最も標高が低く、池状の凹地も見られる。試掘調査の結果を併せて見ると、下府川はほぼ現在の位置に固定しつつあり、河川に近いが比較的影響の少ない場所を選んで町が形成されたと考えられる。

2 遺物について

今回の調査でも多量の貿易陶磁が出土したが、太宰府C期(11世紀後半～12世紀前半)の主要な遺物である白磁が最も多く、太宰府D期(12世紀中頃～後半)を代表する龍泉窯系青磁・同安窯系青磁、太宰府E期(13世紀初頭～13世紀前半)の鎬蓮弁文を有す青磁が白磁に比べ極端に少ないのが大きな特徴である。これは、陶磁器の使用期間が長いことを考慮しても、遺跡は11世紀後半から12世紀が中心であったと推定される。(註4)

土師器は古市遺跡と同様に大きく灰白色系と褐色系の二種類に分けられる。灰白色系の土師器は古市遺跡では土壇内より集中して見つかることが多かったが、本遺跡では遺物包含層からの出土がほとんどで、土壇内からはほとんど黄褐色の土師器皿が見つかる。

黄褐色の土師器坏は以下のように分類できる。底部が厚く体部が丸みをもって立ち上がるも

の(第25図・6、7)と底部がやや薄くなり器高が低くなるもの(第25図・8、9、10)、底部と体部の境が不明瞭になり、体部が直線的になる(第25図・11、12、13)ものは11世紀後半から12世紀末頃と考えられる。この後には前述したS B 7のP114より出土した坏(第14図・12)に見られるように器高が低く、口径に対して底径が大きくなると考えられる。およそ13世紀前半頃である。

S K 4で出土した土師器の皿(第22図1～5)はいずれも似通った一括遺物である。底部が厚く体部は短く逆ハ字に開く。口縁端部を上につまみあげる手法は他の土師器皿では見られないものである。共伴した和鏡(第22図・7)は外傾式の細縁で平安時代後期頃と考えられる(註5)。皿も坏と同様に次第に器高を減じ、口径に対して底径が大きくなると推定されるが詳細な変遷は明らかにできなかった。

3 遺跡の性格について

今回の調査地の特徴を挙げると次のようになる。集落は下府川の脇に立地し、およそ11世紀後半～13世紀前半の限られた期間存続した。貿易陶磁が多量に出土し、11世紀後半から12世紀が中心である。集落が形成される以前は河川に近い沖積地で、生活はできなかったと考えられる。一方、集落の廃絶以降には時々水につかる環境であった。しかし、水害によって一気に集落が廃絶したということは調査結果からは考えにくい。

本遺跡も石見府中内の町であることはほぼ確実であり、当時の環境面及び周辺地域の様相も検討しながらこの遺跡について考察してみたい。

まず、遺跡の成立については平安時代後期頃に下府川が固定し平野が比較的安定し、本格的に平野部が生活に使われはじめたと考えられる。古市遺跡はこの時期に山側にあった集落が北側へ拡大している(註6)。

現段階では地業等が行われた痕跡、あるいは河川を固定するような土木工事が行われたか(註7)については不明であるが、平野の形成と新たにこの地域が都市(府中)として発展することは密接に関連していると考えられる。

出雲国庁跡においては奈良時代の遺物の他に緑釉陶器や貿易陶磁がかなり出土しており、奈良時代の国府建物群の存在した場所は国司(官人)などの住居域に変わった可能性が指摘されている(註8)。国府から府中への変化を追う上で対照的である。

また、石見地方において本遺跡と同時期で貿易陶磁を多量に出土する遺跡は仁摩町白石遺跡(註9)や益田市羽場遺跡(註10)が代表的である。いずれも河川の周辺に位置し、当時の河川交通の要所及び地域の拠点であったと考えられる。白石遺跡は仁万・天河内郷の領主、羽場遺跡は長野荘との関連が想定される(註11)。さらに視野を当時の交易に広げると、博多商人の廻船が出雲まで来航したと考えられており、こうした定期ルートの寄港地から派生するルートで貿易陶磁がもたらされるようになったと考えられる(註12)。

遺跡の衰退については直接的な物証はないが、川をはさんだ南東側に「近江屋敷」の地名が

残っており、守護所の存在が想定される点を指摘しておきたい(註13)。鎌倉時代頃の青磁が極端に少ないことから何らかの影響があったと推定される。また、環境の変化により生活に適さなくなった可能性も残り、今後の検討課題として周辺地域の調査が必要であろう。

今回の調査で石見府中の様相が次第に明らかになってきたが、今後は古代の石見国庁の確認が不可欠な課題である。古代から中世にかけての石見国庁の変化、府中の成立と衰退について全国的に貴重な調査結果を得ることができた。

註

- (1)浜田市教育委員会 1995 『伊甘土地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』
- (2)南前孝明 1996 「山陰の中世墓」『季刊文化財 第84号』
島根県文化財愛護会
- (3)橋田正徳 1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究VII』
日本中世土器研究会
- (4)貿易陶磁については太宰府市教育委員会の山本信夫氏にご教示いただいた。
貿易陶磁の分類と時期については以下の文献を主に参照した。
森田勉・横田賢次郎 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」
『九州歴史資料館研究論集 4』
山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁」
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
下記文献では陶磁器の使用期間について討論がなされている。
日本中世土器研究会 1996 『中近世土器の基礎研究XI』
- (5)中野政樹編1967 「和鏡」『日本の美術 No.42』至文堂
保坂三郎 1973 『和鏡』人文書院
青木豊 1992 『和鏡の文化史』刀水書房
- (6)前掲註 1
- (7)石井進 1995 「地方政治都市としての国府」
『古代から中世へー中世都市研究 2』新人物往来社
- (8)西尾克己・守岡正司 1996 「出雲国庁跡出土陶磁器について(1)」
『八雲立つ風土記の丘 №141』
島根県立八雲立つ風土記の丘
西尾克己・守岡正司 1997 「出雲国庁跡出土陶磁器について(2)」
『八雲立つ風土記の丘 №145』
島根県立八雲立つ風土記の丘
- (9)仁摩町教育委員会 1989 「白石遺跡」
『仁摩健康公園造成工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (10)木原光 1992 「益田市・羽場遺跡出土の陶磁器」
『松江考古 第 8 号』松江考古学談話会
- (11)井上寛司 1992 「第3章 中世」『温泉津町誌 上巻』温泉津町
三宅御土居を守る会 1992 『いま、よみがえる中世の益田』
- (12)吉岡康暢 1997 「新しい交易体系の成立」
『考古学による日本歴史 9 交易と交通』雄山閣
- (13)桑原韶一 1995 「伊甘郷の歴史的背景」
『伊甘土地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』
浜田市教育委員会
斎藤茂吉 1935 『柿本人麿補註篇』岩波書店

V. 自然理化学分析

横路遺跡の地質学的検討

山内靖喜（島根大学総合理工学部）

中村唯史（日新技術コンサルタント）

1. 遺跡周辺の環境の変遷

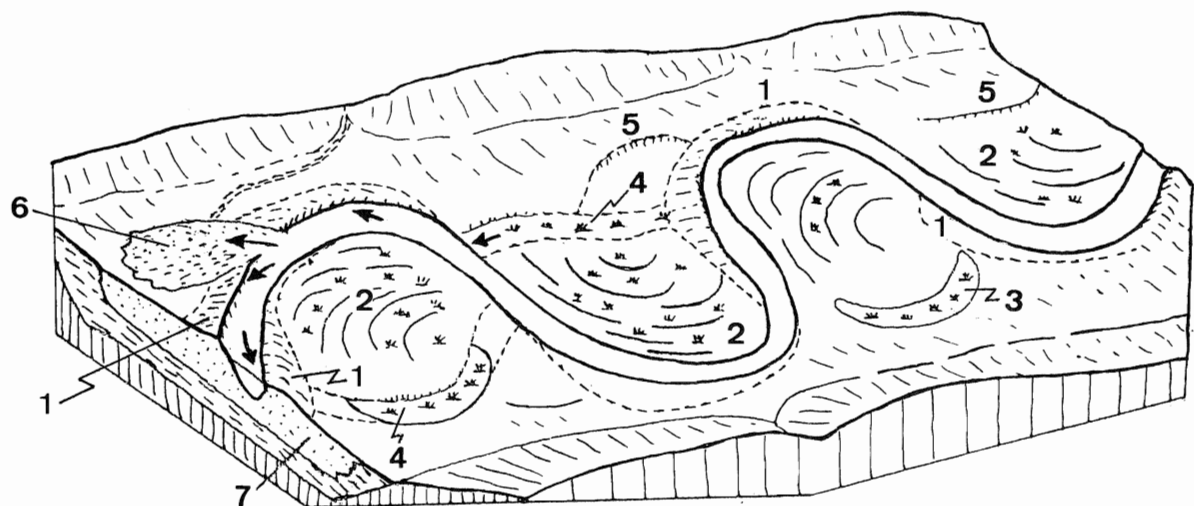
1) 下府川の特徴

横路遺跡は現在の下府川河口近くの谷底平野に位置する。下府川は延長約25kmの河川である。上流域では石見高原の上を流れており、緩やかな谷をつくっている。しかし、総延長の半分に当たる下流域では、下府川は中国山地を深く切り込んだV字谷をつくっている。また、中国山地から直接日本海に流れてくるため、その下流域や河口に広い平野を伴わない。しかし、急峻な山間部を流れてくるため、下府川が運んでくる土砂の量は多く、上府より下流では谷底低地が大変速い速度で埋め立てられていったものと考えられる。このように谷底低地が速い速度で埋め立てられる場合にはしばしば自然堤防の発達が悪い。

横路遺跡周辺で下府川は南北両側から突き出る山地によって流路が規制されて大きく蛇行しており、その両岸に狭い平地が形成されている。遺跡周辺で平地は400m前後の幅を持つが、下府川が著しく南側の山地に寄っているため、平地の大部分は右側（北側）に発達する。

2) 河川の微地形と堆積物

谷底地形において、河川周辺の主要な微地形は低水位流路、自然堤防、後背湿地（後背低地）であるが、遺跡付近で下府川は激しく蛇行しており、遺跡は蛇行部の滑走斜面側（蛇行の内側）に位置している。一般に自然堤防は攻撃斜面側（蛇行部外側）と滑走斜面側の両方に形成されることもあるが、顕著な自然堤防は攻撃斜面側に、滑走斜面側にはポイントバー（蛇行洲）が



1：自然堤防，2：ポイントバーとその間の湿地，3：三日月湖跡の低湿地，
4：浅い水路の跡の低湿地，5：蛇行崖，6：クレバススプレー（氾濫による破堤堆積），7：曲流帯の堆積物，

図-1 蛇行流路周辺の地形（金子，1972を加筆，修正）

形成される場合が多い（図－1）。自然堤防の断面形は、流路側が急傾斜で短く、後背湿地側が緩傾斜で長く、全体的に非対称である。それに対して、ポイントバーの断面形は基本的には流路側にのみ向かって傾斜した楔状である。しかし、小規模な蛇行河川においては自然堤防堆積物とポイントバー堆積物の識別が困難な場合が多い。この他に、横路遺跡周辺では低地における両側の山麓には幅の狭い緩い斜面が見られる。下府川では、礫に富んだ粗粒堆積物が上流から運ばれてくるので主に流路には礫、自然堤防には細礫～砂、後背湿地には細粒砂～シルトが堆積するものと考えられる。さらに、遺跡周辺では低地の幅が狭いにもかかわらず、低地に向かって突き出した尾根によって下府川が激しく蛇行しているため、本流から枝分かれした小水路が後背湿地に流れ込む場合もある。このような流路には細礫～細粒砂が堆積すると考えられる。特に、高水時に水流が自然堤防を壊して流れ込んで砂礫を撒き散らすこともあり、クレバスプレー（破堤堆積）とよばれている。実際に、昭和58年の豪雨水害では遺跡周辺の大部分は砂礫に覆われた。

横路遺跡周辺の下府川の両岸においては、長年の土地利用と昭和58年災害復旧工事によって改変されたため、過去に放棄された流路やそれに伴う自然堤防などの地形は残っていない。そのため、流路がどのように変遷したかということを経験から読みとることはできない。しかし、横路遺跡の遺跡面では上下の堆積物が激しく変化することから、遺跡周辺で下府川はたびたび流路を変え、流路が変わるたびに遺跡周辺の環境も変わったことが推定される。

3) 横路遺跡の環境変化

横路遺跡（土器土地区）で時代とともにどのような堆積物が堆積したかを調べるため、発掘地点の北東（山側）縁と南西（下府側）縁の2カ所で遺跡面下を掘り込んだが、約1 mより以深には厚い砂礫層があって、湧水が激しいためそれ以上掘削できなかった。この結果を柱状図（図－2）に示し、これに基づいて本発掘地点周辺の環境変化を検討する。

掘削部の最下位に層、すなわち（図－2）の柱状図D1の9～11層（以下D1-9～11層）とD2-7層は、最上部に粗粒砂を伴う砂礫からなり、50cm以上の厚さをもつ。礫の多くは円～垂円礫で、多くは経10cm以下であるが、経20cm以上の礫も含まれている。D1-9層とD2-7層のそれぞれの上面を結ぶと、ほとんど水平である。これらのことから、この砂礫層は同一の流路堆積物と考えられる。すなわち、8世紀以前には土器土地区には主流路が流れていたと結論される。

遺跡発掘面の直下には、遺跡の山側はD1-7層はD1-8層が、下府川側ではD2-6層がそれぞれ存在する。下位のD1-7層はD2-6層に連続するが、D1-7層は砂混じり泥、D2-6層は泥質砂からそれぞれなり、流路よりの方が砂に富んでいる。

さらに、本発掘地点西部で北東-南西方向に掘ったトレンチ（図－3）での観察に寄れば、D1-8層あるいはD2-6層下部に対応する層準には主に砂からなる堆積層が発達する。トレンチで観察される堆積層をT-1～17層とよぶと、T-1層は11世紀後半～13世紀の遺構面であるから、D1-7あるいはD2-6層と同一である。また、T-17層は、主に砂礫からな

ることから流路堆積物で、D 1 - 10、11およびD 2 - 7層に対比される。

このトレンチにおいては、D 1 およびD 2 地点には発達しない砂を主体にした堆積物が穏やかな高まりを作っている。この堆積物は粒度や色からT13~T 2 の12枚の地層に区分される。

T14は流路側に傾斜した楔形の断面を示し、極粗粒砂からなることからポイントバー堆積物と判断する。その上位のT13~T 4 は穏やかな高まりを作りながら流路側に向かったの傾斜角より後背湿地側に向かったの傾斜角が緩く、非対照的な断面を示すことから、T 7 とT 8 を除くT14~T 4 は自然堤防堆積物と判断される。T 7 とT 8 は流路側に傾斜した楔形の断面を持つことからポイントバー堆積物である。

T 3 は極粗粒砂からなり、後背湿地側で自然堤防を浸食していることからクレバススプレいの堆積物である。これらを広く覆っているT 2 は礫を含む極粗粒砂からなり、その上半部には植物根の跡が多く見られる。本層は下位の自然堤防全体を覆っているが、流路側に向かって厚くなっていることから、ポイントバー堆積物と推定される。T 1 層は山側で砂質泥から、流路側で泥質砂からなり全体に土壌化しており、植物根の跡が全体にみられることから、後背湿地ないしはポイントバー間の低地における湿地堆積物であるが、本層は山側に広く分布することから前者と考えられる。

さらに、トレンチの流路側末端では青灰色泥がT 1 層を削り込んでいる。この泥は本発掘区域南西縁にほぼ沿うようにして遺構面を切っていることから、後背湿地に流れ込んだ分岐流路を埋積した堆積物と推定される。

遺構面より上位の堆積物を見ると、D 1 - 6 とD 2 - 5・4 は黒色系の粘質土（土壌化した泥）からなるので後背湿地の堆積物と考える。D 1 - 5 より上位の堆積物は基本的には耕作土と推定される。

以上の堆積相解析に基づいて本発掘地点の環境の変遷を以下に述べる。

本遺跡で確認されている最下位の堆積物、すなわちD 1 - 10以下の堆積物は奈良時代の遺物を、その上位のT 1 - 8・9 は奈良時代から平安時代にかけての遺物をそれぞれ含んでいる。D 1 - 10についてはその最上部のみを観察していることから、D 1 - 10の最上部の堆積時期は奈良時代前半と推定される。その結果、8世紀頃まで本発掘地点周辺は下府川の主流路が流れていたが、8世紀前半のある時代に大洪水が起き、流路が南方に移動した。その結果、これまで主流路が流れていた部分は、蛇行部内部の流路近くの川岸となり、ポイントバーが形成された。しかし、その後に自然堤防が成長し始め、本発掘地点は自然堤防から後背湿地にかけての環境へと変わっていった。

このような状態が11世紀前半まで続き、本発掘地点の大半は次第に沼沢地から乾いた土地へと変わり、11世紀末頃から人間が住みつき出し、13世紀のある時期まで宅地として利用されていた。なお、この時期には、本発掘地点の南西部には主流路から分岐した小流路が流れていた。

しかし、13世紀のある時期に洪水が発生し、本発掘地点周辺は再び湿地ないしは沼沢地になったと推定される。洪水が発生したとする根拠は、遺跡面の上に円礫が散在していることである。

さらに、本遺跡から約900m上流の古市遺跡においては、その第2遺構面では13世紀中頃を中心とする遺物が報告され、14世紀にはほとんど衰退したと考えられていることから、大洪水は13世紀末ないし14世紀初めに発生した可能性が大きい。

13世紀末の洪水によって本発掘地点周辺は再び自然堤防内側の湿地帯となり、土地は利用されないまま江戸時代に至った。しかし、次第に湿地帯が埋積され、耕地として利用できる状態になったか、開墾が盛んになったことかによって、17世紀のある時期から耕作地として利用され出し、現在に至った。その間にも本発掘調査地点周辺は幾度か洪水に襲われたと考えられるが、その明瞭な痕跡は18世紀の遺物を含む砂礫層が土器土地区と原井ヶ市地区の間に認められることから、少なくとも18世紀に洪水が発生している。

2. 液状化の痕跡

本発掘調査地点内において、遺跡面を切る約9本の砂脈が見つかった。砂脈の延びの方向をみると南北性と東西性の2系統が認められる。南北性の砂脈は発掘調査地点中央部からやや西に寄った部分に、東西性の砂脈は北西部にそれぞれ発達する。この2系統の大きな違いは、それぞれの砂脈の砂が由来した地層が異なることである。すなわち、南北性の脈を充填している砂は今回発掘した堆積物の最下位の砂礫層上部(D2-7)であり、東西性のそれは自然堤防の縁のクレバスプレーをなす砂礫層(T2)である。この違いのため、南北性の脈の方が深い。

さらに、南北性の脈の方が真っ直ぐ上方に向かって伸びた形態を示すことが多いのに対して(巻頭図版・図-5)東西性の砂脈はしばしば側方に枝脈を延ばしていたり(図版31・図-3、4)、激しく曲がっていたりする(図版32)。この違いは、それぞれの脈を充填する砂が由来した砂礫層の深さが異なることに由来すると考えられる。より深い堆積層から由来した砂ほどより高い水圧をもつため、上昇する力が強く、真っ直ぐに堆積物中を上がってくることができたが、水圧が低いため上昇する途中で圧力の弱い側方に向かったものと推定される。

砂脈は砂ないし砂礫の液状化によって作られたものである。陸上での液状化は一般に地震の震動によって生じる。さらに、日本で観察された限りでは、液状化を起こした地震の揺れの大きさは震度5以上であることから、砂脈は震度5以上の震動を受けた痕跡とされている。そして、砂脈が切っている周囲の堆積物の年代から、砂脈の形成年代が判定できれば、震度5以上の震動をもたらした地震の発生年代を知ることができる。

本発掘地点の砂脈がどの堆積物までを切っているかをみると、発掘地点南西縁で南北性の砂脈は、江戸時代の遺物を含む耕作土(D2-2)を切って、最上部の粘質土(現在の耕作土、D2-1)に切られている。これまでのところ古文書に江戸時代後半に浜田周辺で大地震が発生した記録が見られないことから、この砂脈は明治5年の浜田地震によるものと判断される。しかし、発掘地点北西部の東西性の砂脈は先に述べたように途中で止まっているため、その形成年代を判定することができなかった。

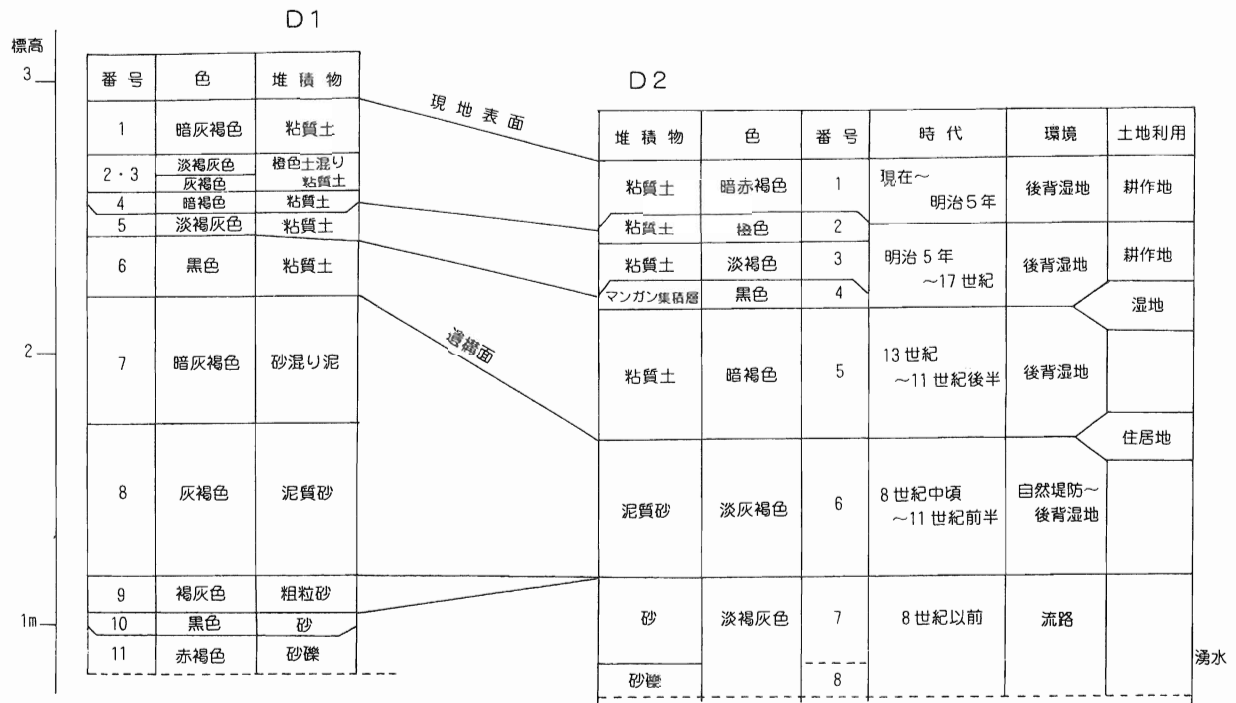


図-2 発掘地点の堆積物の柱状図
D1:遺跡北東縁, D2:遺跡南西縁

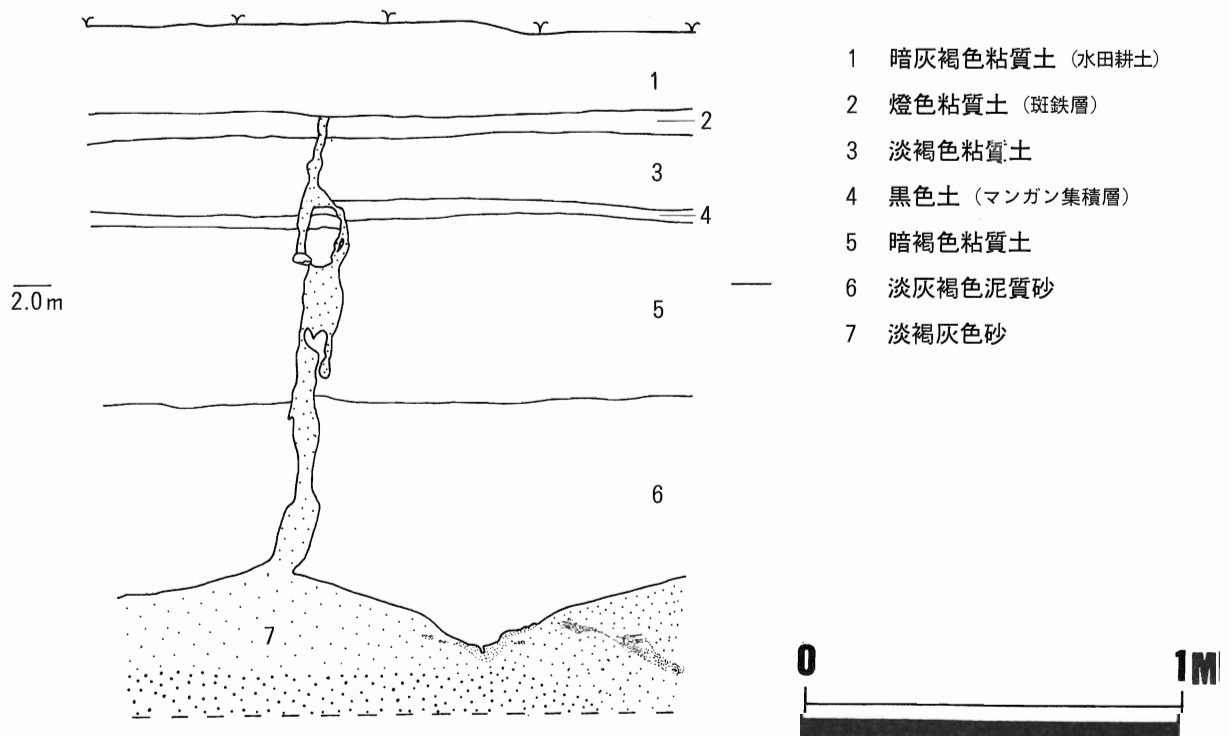


図-5 噴砂実測図 (遺跡南側縁)

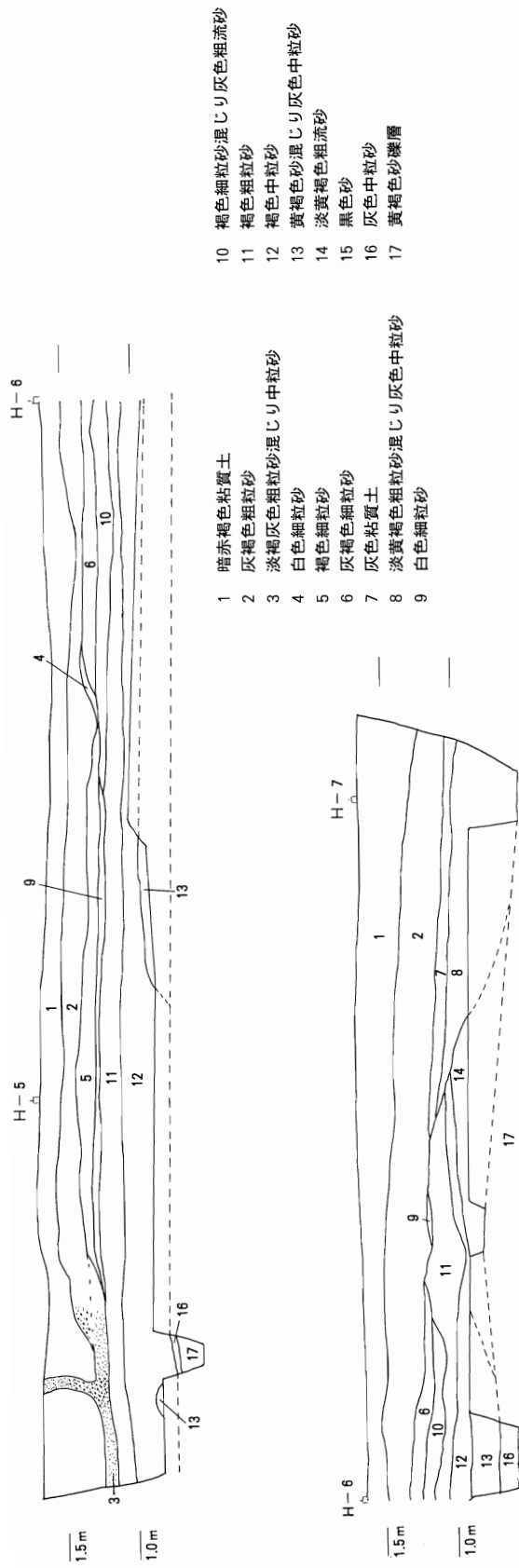


図-3 遺構検出面下土層図 (遺跡南東部)

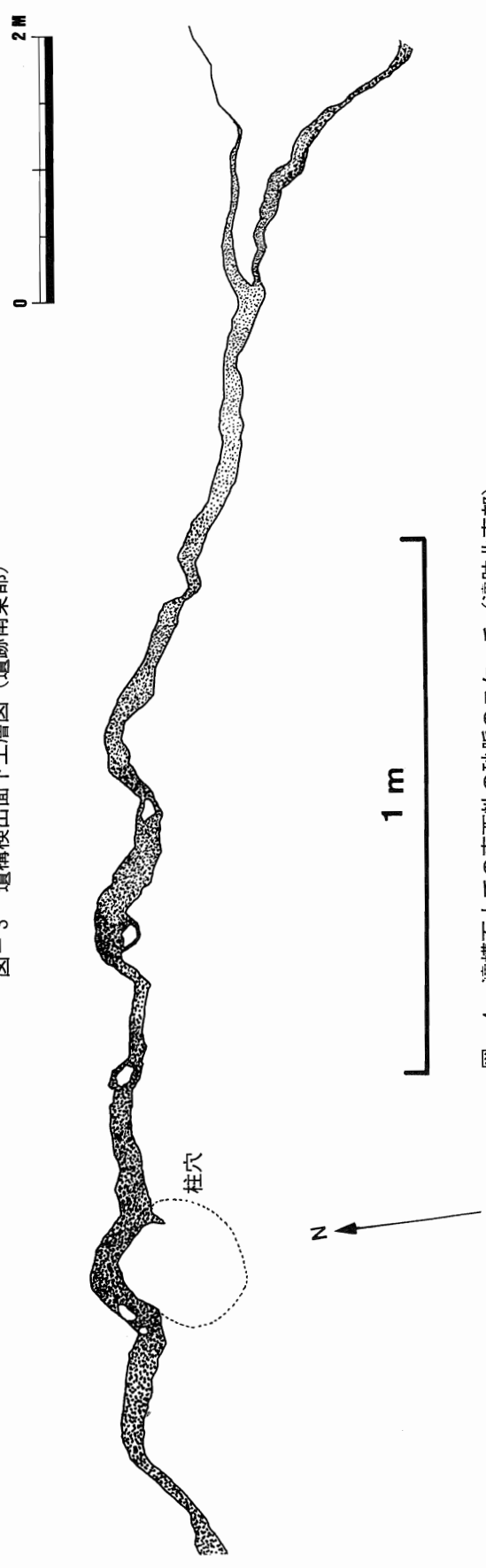


図-4 遺構面上での東西性の砂脈のスケッチ (遺跡北東部)

横路遺跡（土器土地区）発掘調査における花粉分析

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

はじめに

本報は、遺跡周辺の植生変遷、および花粉化石群集の変化から地層の堆積時期を推定するために、川崎地質株式会社が浜田市教育委員会の委託を受けて実施・作成した分析調査報告書の概報である。

また、横路遺跡（土器土地区）は島根県西部の浜田市下府町地内に広がる遺跡である。

分析試料について

分析試料は浜田市教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が採取した。試料採取地点を第1図に示す。試料採取層準を第2図の試料採取地点柱状図に示す。第2図の各地点柱状図の左側の数字が地層番号（本文第6図参照）であり、右側の数字が試料採取層準を示す。

花粉分析処理は渡辺（1995）に従い実施した。顕微鏡観察は光学顕微鏡を使用し、通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉化石総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本花粉化石も同定した。しかし、花粉化石の含有量が少ない試料が多く、ほとんどの試料で木本花粉化石総数200を越えることができなかった。

分析結果

分析結果をNo.2地点の花粉ダイアグラム（第3図）、および検出花粉化石数量表（表1）に示す。No.1、3地点では、全ての試料で花粉化石の含有量が少なかったことから、分析結果を花粉ダイアグラムで表さなかった。またNo.2地点の花粉ダイアグラムでは、木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。花粉化石含有量の少なかった試料では、出現した種類を*で示した。

考察

(1)花粉分帯

本来花粉分帯を実施し、それに基づいて植生復元などを実施する。しかし今回の分析結果では、ほとんどの試料で統計処理上十分な量の花粉化石が得られなかった。また十分な量の花粉化石が得られたNo.2地点試料No.1、2においては、ともに類似する花粉組成を示した。以上のことから、今回は花粉帯の設定を行わなかった。

(2)花粉組成の示す時期について

No.2地点試料No.1、2層準は、花粉組成の特徴から、大西（1993）によって明らかにされている島根県東部の花粉帯のうち、イネ科花粉帯マツ・スギ亜帯（1930年以降現在までの時期）

に対比できる。

さらに現在の遺跡周辺の山地には、アカマツ林はほとんど認められず、マツの立ち枯れ後の照葉樹林回復期にある。したがって、試料No.1は、マツの立ち枯れ以前の植生を表していると考えられる。

(3)花粉化石含有量が少い原因について

今回の分析では、上位の2層準からは統計処理に十分な量の花粉化石が検出された。一方、下位の4層準からはほとんど花粉化石が検出できなかった。

一般に花粉化石の含有量の少ない原因として、以下のような原因が考えられる。

①堆積速度が速かったために、花粉の含有量がもともと少なかった。

②風成層である。堆積速度が極めて遅かった。あるいは耕作などのために土壌の攪乱が頻繁に起こった。など強い紫外線の影響下で、花粉が消滅した。

③堆積後、土壌の酸化・還元などの化学作用により、花粉が消滅した。

No.2 地点試料No.3 層準では、酸化鉄の検出が顕著であり、地層が橙色を示していた。このため、化学作用により花粉が消滅したと考えられる。

No.2 地点試料No.4 層準では酸化マンガンの検出が顕著であり、化学作用により花粉が消滅したと考えられる。

平面的に3地点で試料を採取したNo.2 地点試料No.5 層準(16層)は、11世紀後半～13世紀前半の遺物包含層である。この層準は、黒色粘土であるが腐植物の含有量が少なく、炭が多量に含まれることが、花粉分析処理の結果から明らかになった。このことから、地層の黒色は「炭」に由来することが明らかである。一方「クロボク」などの埋没古土壌の生成について、人間による生業活動による「炭」の濃縮に起因するという説もあり(山野井、1996)、この層準が200年にわたり堆積した風成層である可能性も残る。

No.2 地点試料No.5 層準下位のNo.6 層準についても、同様に「炭」が多い。しかし、やや赤褐色を示すことから、本来堆積物中に存在した(花粉化石を含めた)腐植物が化学的に消滅し、「炭」が顕著になった可能性が高い。

(4)古植生推定

今回の試料No.1、2 層準での古植生の復元を試みた。

近代から現代(1970年代以前?)にかけての遺跡周辺では、イネ科(40ミクロン以上)の出現率が高いことから水田が広がっていたと考えられる。また、ソバ属の花粉が検出されることから、ソバの栽培も行われていたと考えられる。

遺跡周辺の山地には、アカマツを要素とする里山(アカマツ林)が広く分布していたと考えられる。また海岸に近いことから、海側にはクロマツを要素とする海岸林が分布していた可能性もある。さらに、スギ属花粉が増加傾向を示すことから、アカマツ林は商品価値の高いスギの植林地へ移り変わっていったと考えられる。

まとめ

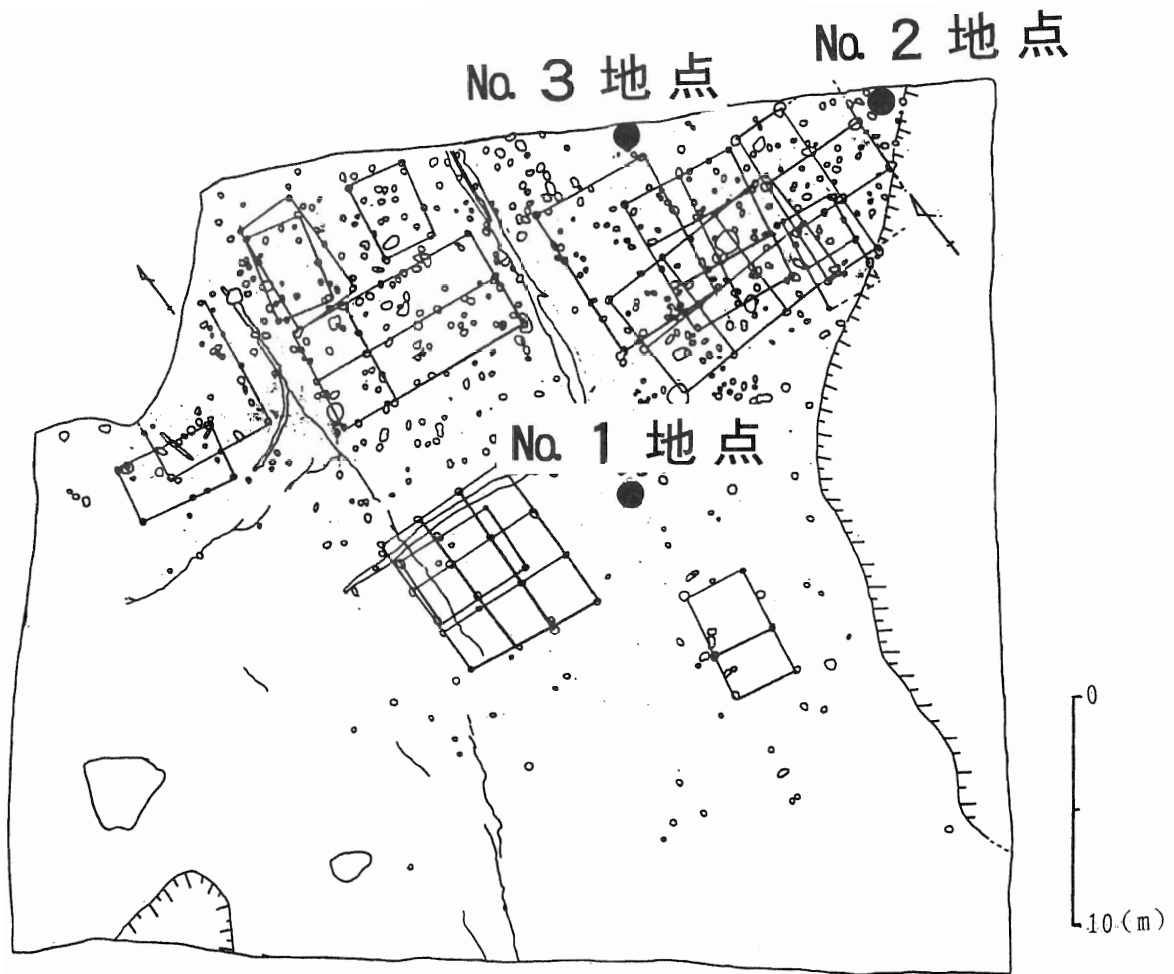
花粉分析の結果、花粉化石の含有量が少ない試料が多かった。また、十分な量の花粉化石が検出された試料でも花粉組成の変化に乏しかったことから、花粉分帯を行わなかった。

今回の分析結果から、以下の事柄を考察した。

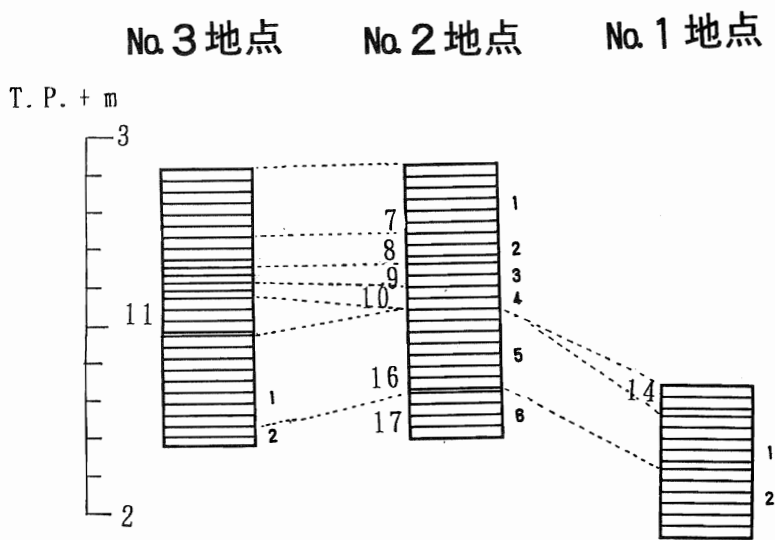
- ①花粉化石の含有量の多いNo.2 地点試料No.1、2 層準は、大西（1993）のイネ科花粉帯マツ・スギ垂帯に相当する。またNo.1 層準は、マツの立ち枯れ以前の植生を表している可能性がある。
- ②分析試料中に花粉化石の含有量が少ない理由について考察した。
- ③近代から現代（1970年代以前？）にかけての遺跡周辺での古植生を推定した。

引用文献

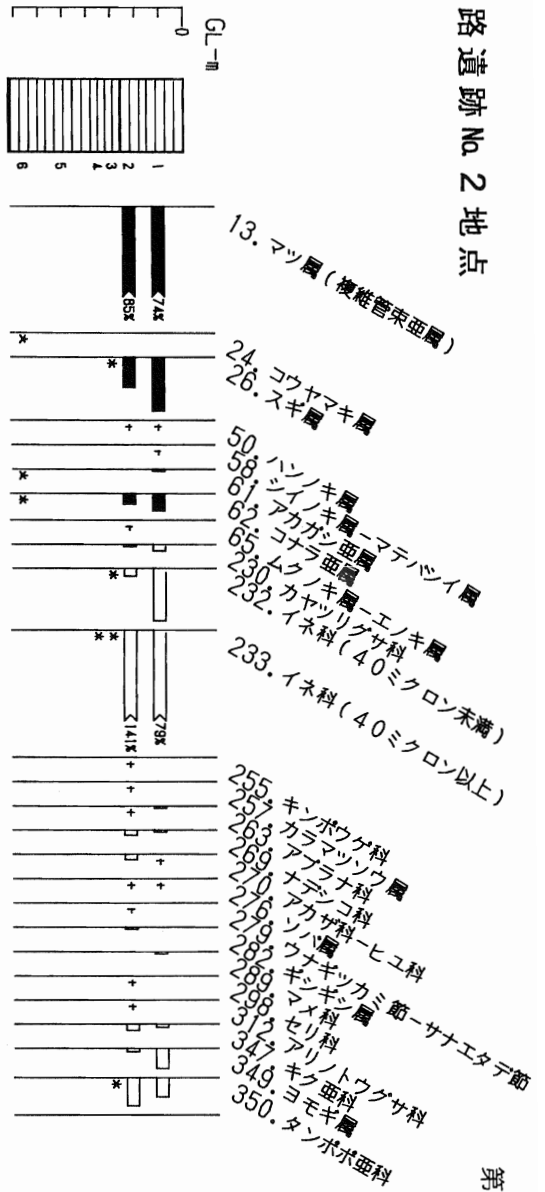
- 大西 郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化. 地質学論集, 39, 33-39.
渡辺 正巳（1995）花粉分析法. 考古資料分析法, 84-85. ニューサイエンス社、東京.
山野井 徹（1996）黒土の成因に関する地質学的検討. 地質学雑誌, 102, 526-544.



第1図 試料採取地点位置図



第2図 試料採取層準 (本文第6図参照)



柱状図凡例



表 1 花粉化石検出個体数

地点名	試料No.	花粉化石検出個体数
No. 1	1	マツ属 (複維管束亜属)
	2	マツ属 (複維管束亜属)
No. 2	1	マツ属 (複維管束亜属)
	2	マツ属 (複維管束亜属)
	3	マツ属 (複維管束亜属)
	4	マツ属 (複維管束亜属)
	5	マツ属 (複維管束亜属)
	6	マツ属 (複維管束亜属)
No. 3	1	マツ属 (複維管束亜属)
	2	マツ属 (複維管束亜属)
	3	マツ属 (複維管束亜属)
	4	マツ属 (複維管束亜属)
	5	マツ属 (複維管束亜属)
	6	マツ属 (複維管束亜属)
	7	マツ属 (複維管束亜属)
	8	マツ属 (複維管束亜属)
	9	マツ属 (複維管束亜属)
	10	マツ属 (複維管束亜属)

数字は検出個体数

横路遺跡（土器土地区）出土土器の蛍光X線分析

三辻利一（奈良教育大学）

1) はじめに

須恵器の場合は生産地である窯跡が残っているから、窯跡に結びつけることによって産地を推定することができる。他方、土師器の場合、窯跡は残っていない。したがって、須恵器のようにして産地を推定するわけにはいかない。土器の胎土研究はなにも産地の問題だけとは限らない。同一地域内の多くの遺物から出土する土師器の胎土を比較することによって、土師器の生産と供給の問題を広く考えることができる。この場合でも、元素分析で使用する因子はK、Ca、Rb、Srが中心となる。微量元素も含めて、他の元素は有効に地域差を表すことが判明したとき、はじめて使用される。分析した元素を機械的にコンピューターに入れて多変量解析をしても研究にはならない。多数のデータを内蔵したブラックボックスが出来上がっただけである。このままではこのブラックボックスは永遠に人知によるデータ解析を拒み続けるであろう。この点を打開するためには、定性的であってもよい、基礎データを図上で比較してみることである。この図として、主成分元素同士を組み合わせたK-Ca分布図と、微量元素同士を組み合わせたRb-Sr分布図が提案された。窯跡出土須恵器は両分布図上で集中して分布すること、さらに、その分布位置が地域によって異なることが見つけられてはじめて、元素分析による須恵器の産地問題に関する研究が開始された。ブラックボックスのデータの解析が進展してはじめて、計算機による計算が始まるのである。土師器については基礎データの解析は須恵器に比べて著しく遅れている。本報告では横路遺跡から出土した土師器と須恵器の胎土を両分布図上で古市遺跡の土師器と須恵器胎土と比較してみた。

2) 分布結果

横路遺跡出土土器の分析データは表1にまとめられている。全分析値は岩石標準試料、JG-1の各元素の蛍光X線強度で標準化した値で表示されている。標準化値を%濃度やppm濃度に変換することは可能であるが、通常、データの解析は標準化値を使って行われる。

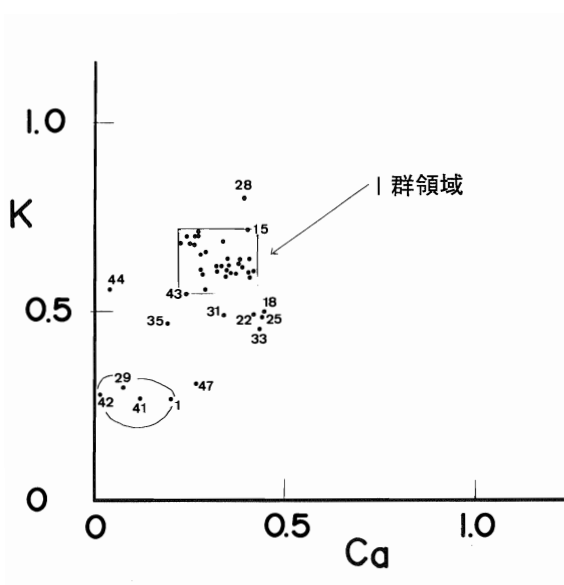
はじめに、土師器のK-Ca分布図を第1図に、Rb-Sr分布図を第2図に示してある。両図とも、点はかなりばらついており、いくつもの胎土の土師器があることがわかる。しかし、ばらついてはいるものの、集中して分布する領域が両図ともあることは明らかである。そこで、定性的ではあるが、I群領域をつくってみた。大部分の土師器がこの領域内に入る。両図においてI群領域分布した試料をI群と分類してみた。この結果は表1に示してある。No.2、3、7、8、9、10、12、13、14、15、16、19、21、23、24、26、27、30、32、34、36、37、38、39、40、45、46、48、49、50の30点の土師器がI群に分類された。まさに、横路遺跡の土師器の主成分といえる。他方、No.29、41、42の3点も集団を形成する。3点とも平安時代後期と推定される白色の坏と皿である点が注目される。また、平安時代後期の白色の小壺（No.44）

もI群とは別胎土である。I群に分類された坏、皿はいずれも、白色土師器に比べてFe量を多く含んでおり、茶色の土師器である。したがって、茶色の土師器と白色の土師器は別産地の製品と推定される。組織的には主成分であるI群土師器（茶色）は横路遺跡側で作られた製品であり、白色土師器形は外部に遺跡から持ち込まれた搬入品と推定される。第1、2図を見る限り、No.47、18、25、22、31、33、1なども外部からの持ち込み品である可能性がある。

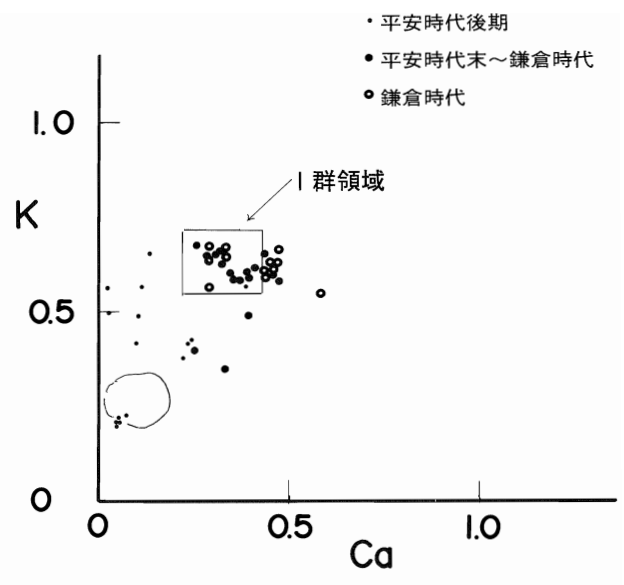
ここで前回分析した古市遺跡の土師器の胎土と比較してみよう。第3、4図には古市出土土師器のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を示す。比較のため、両図には横路遺跡のI群領域を示してある。そうすると、K-Ca分布図では大部分のものがI群領域とその周辺に分布するが、Rb-Sr分布図では大部分のものがI群領域をずれており、古市遺跡の大部分の土師器の胎土は横路遺跡の胎土とは異なることがわかる。したがって、両遺跡間に土師器を通じた交流はないことがわかる。また、両遺跡では外部からの搬入土師器とみられる、Ca、Sr量の少ない土師器がごく少数、共通してみられる点が注目される。もしかしたら、共通外部地域の産地からの搬入品である可能性がある。もしそうなら、その産地は何処か注目されよう。

次に、須恵器の分布結果について説明する。横路遺跡出土須恵器のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を第5図、第6図に示す。Naの量の少ないNo.54、55、56、59、61、62は両分布図でも比較的まとまって分布しているので、これらをまとめて1群とした。次いで、K、Rb量の多いNo.60、63、64、68、69の5点はこれ以上に分けようがないのでこれらをまとめて2群とした。そうすると、1群の中に平安時代後期の須恵器が、2群の中に奈良時代前半と推定される2点の須恵器が、さらに、3群の須恵器の中には平安時代初期～中期と推定される須恵器が含まれる点が注目される。年代によって須恵器の供給源が変遷していることを示している。1群の産地は不明であるが、2群は島根県東部、3群は島根県西部地域が産地と推定される。ここで、古市遺跡出土須恵器のK-Ca分布図を第7図に、また、Rb-Sr分布図を図8に示す。いずれの図にも、横路遺跡出土須恵器の1、2、3群の領域を比較対照のための領域として示してある。そうすると、平安時代と推定される大部分の須恵器は1群領域に分布することがわかる。また、奈良時代と推定された須恵器のうち、1点は1群領域に、また、他の1点は3群領域に分布した。2群領域には平安時代のもの1点、鎌倉時代のもの2点が分布した。古市遺跡でも須恵器の供給源に年代変遷があることも注目されよう。

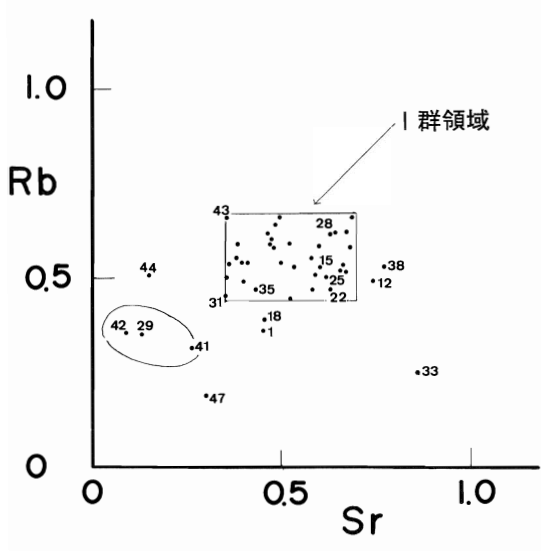
蛍光X線分析の特徴は年間、1万点の試料の分布が可能であるという大量の試料の分析処理ができる点にある。この方法を駆使して、同じ地域内の多数の遺跡から出土する須恵器、土師器を分析し、その供給源、すなわち、産地を探し出すことは可能である。さらに、産地の年代変遷を知ることによって、古代土器の生産と供給という問題を古代史の上から考えることもできるようになるだろう。



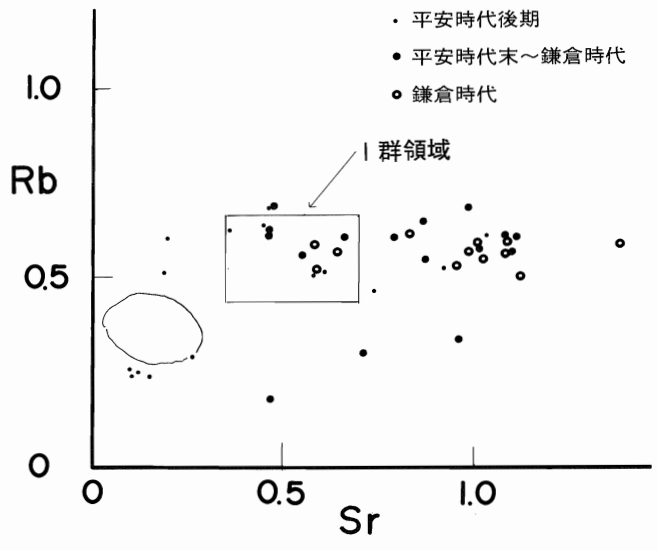
第1図 土師器のK-Ca分布図



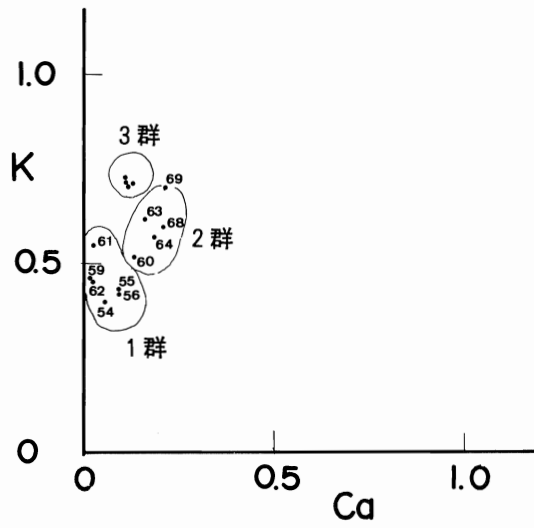
第3図 古市遺跡出土土師器のK-Ca分布図



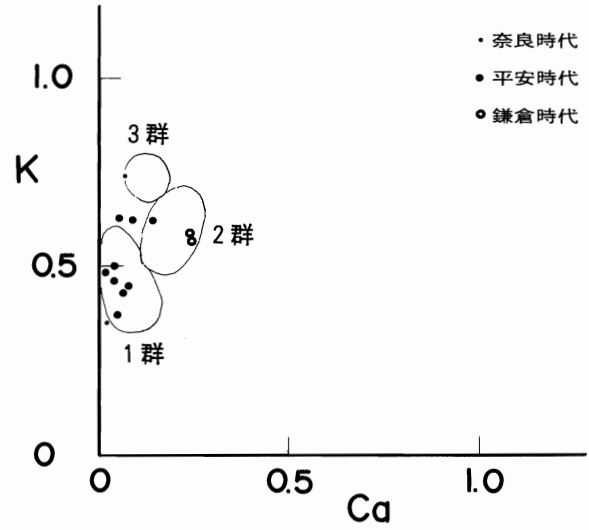
第2図 土師器のRb-Sr分布図



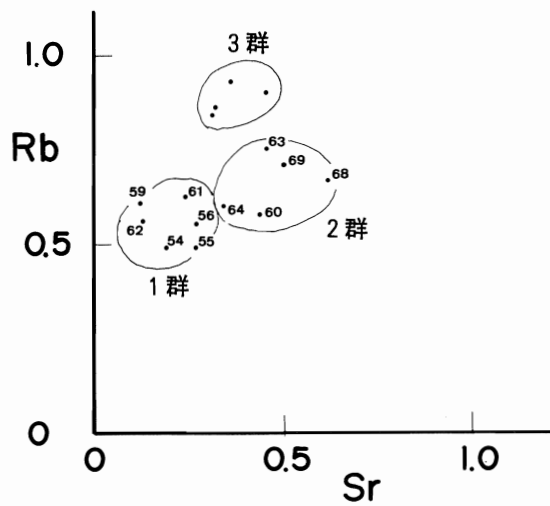
第4図 古市遺跡出土土師器のRb-Sr分布図



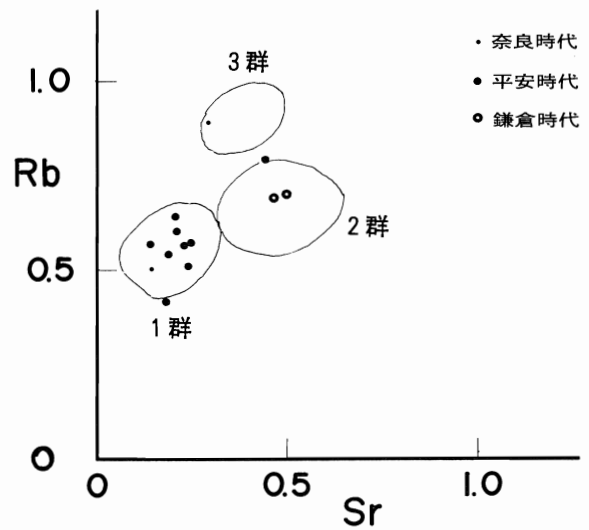
第5図 須恵器のK-Ca分布図



第7図 古市遺跡出土須恵器のK-Ca分布図



第6図 須恵器のRb-Sr分布図



第8図 古市遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

横路遺跡(土器土地区)出土土器の分析値

番号	遺物名	器類	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類	図版番号・出土状況
1	土師器(茶)	皿		0.266	0.199	1.53	0.362	0.448	0.075		図17-3
2	〃	皿(穿孔)		0.700	0.270	2.77	0.494	0.400	0.384	I	図17-4
3	〃	皿		0.618	0.317	2.40	0.618	0.667	0.274	I	図17-5
9	〃	皿		0.612	0.319	2.83	0.523	0.656	0.325	I	SK 2 No. 1 - 1
10	〃	〃		0.711	0.272	2.79	0.536	0.412	0.358	I	図20-2
12	〃	〃		0.623	0.326	2.84	0.489	0.739	0.347	I	図20-4
13	〃	皿(穿孔)		0.609	0.346	2.47	0.576	0.596	0.331	I	図20-3
14	〃	皿		0.639	0.409	1.98	0.584	0.680	0.332	I	SK 2
15	〃	〃		0.720	0.402	1.58	0.533	0.596	0.424	I	図22-1
16	〃	〃		0.643	0.378	2.76	0.537	0.360	0.259	I	図22-2
18	〃	〃		0.496	0.436	3.83	0.387	0.455	0.199		図22-4
19	〃	〃		0.589	0.405	2.86	0.552	0.578	0.267	I	図22-5
21	土師器(白)	坏		0.618	0.346	2.88	0.637	0.483	0.330	I	図23-8
22	土師器(茶)	皿		0.487	0.419	4.45	0.467	0.634	0.190		P162(白磁共伴)
23	〃	〃		0.624	0.386	1.65	0.544	0.502	0.335	I	〃
24	〃	坏		0.690	0.336	2.46	0.577	0.477	0.317	I	P116(白磁共伴)
25	〃	皿		0.485	0.444	3.87	0.503	0.622	0.184		P127(青磁共伴)
26	〃	〃		0.605	0.405	3.39	0.533	0.660	0.324	I	〃
27	〃	皿(穿孔)		0.697	0.244	2.94	0.545	0.375	0.305	I	〃
28	〃	〃		0.800	0.392	1.89	0.624	0.637	0.345		〃
29	土師器(白)	坏	平安後期	0.298	0.076	1.25	0.352	0.134	0.054		図23-7
30	土師器(茶)	〃		0.636	0.351	2.81	0.591	0.473	0.320	I	図23-14
31	〃	皿		0.492	0.335	5.08	0.448	0.347	0.175		図14-11
32	〃	皿		0.629	0.377	1.91	0.515	0.670	0.294	I	図23-4
33	〃	皿		0.457	0.433	2.67	0.253	0.863	0.587		図23-5
34	〃	坏	鎌倉前期	0.611	0.275	2.48	0.526	0.525	0.330	I	図23-10
35	〃	坏	鎌倉中期	0.468	0.194	1.14	0.470	0.431	0.175		図14-12
36	〃	皿(穿孔)		0.558	0.290	3.03	0.471	0.578	0.224	I	図23-3
37	〃	皿	平安後期	0.681	0.216	2.92	0.593	0.380	0.384	I	図25-7
38	〃	皿	〃	0.614	0.415	2.25	0.531	0.767	0.318	I	包含層E-2
39	〃	皿	〃	0.662	0.290	2.72	0.585	0.520	0.316	I	包含層A-0
40	〃	不明・底		0.593	0.340	2.52	0.600	0.468	0.332	I	図25-15
41	土師器(白)	柱状高台皿	平安後期	0.266	0.118	1.45	0.322	0.258	0.059		包含層D-2
42	〃	〃	〃	0.278	0.015	1.01	0.358	0.088	0.043		図25-14
43	土師器(茶)	坏	鎌倉前期	0.545	0.236	2.71	0.661	0.352	0.307		図25-9

番号	遺物名	器類	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類	図版番号・出土状況
44	土師器(白)	小壺	平安後期	0.561	0.037	1.19	0.511	0.147	0.051		図25-17
45	土師器(茶)	皿(穿孔)		0.699	0.260	2.73	0.495	0.348	0.325	I	図25-2
46	〃	〃		0.679	0.396	2.37	0.655	0.492	0.385	I	包含層C-2
47	〃	坏	平安後期	0.306	0.265	3.95	0.187	0.303	0.069		図25-5
48	〃	坏	鎌倉前期	0.597	0.297	1.46	0.661	0.683	0.350	I	図25-13
49	〃	柱状高台皿(穿孔)		0.677	0.246	2.40	0.623	0.458	0.329	I	図14-3
50	〃	皿(穿孔)		0.677	0.254	2.88	0.536	0.388	0.335	I	図14-4
51	須恵器	蓋	平安初期	0.713	0.131	1.55	0.932	0.364	0.169	3群	図26-1
52	〃	坏	〃	0.734	0.111	1.56	0.836	0.310	0.222	〃	包含層F-3
53	〃	〃	平安中期	0.716	0.110	1.51	0.856	0.322	0.155	〃	図26-2
54	〃	碗	平安後期	0.402	0.056	1.99	0.487	0.188	0.037	1群	図26-3
55	〃	甕		0.433	0.090	2.18	0.489	0.270	0.093	1群	図26-7
56	〃	壺(底)		0.427	0.091	1.99	0.551	0.274	0.056	1群	図26-6
58	〃	甕(格子)		0.708	0.115	1.30	0.897	0.449	0.251	3群	E-1・2排土
59	〃	〃		0.460	0.014	1.33	0.610	0.120	0.039	1群	包含層D-5
60	〃	甕(平行)		0.517	0.134	1.73	0.579	0.435	0.322	2群	〃 E-6
61	〃	〃		0.551	0.025	1.93	0.626	0.235	0.074	1群	〃 F-2
62	〃	碗	平安後期	0.458	0.016	2.04	0.560	0.128	0.033	1群	図26-4
63	〃	坏	奈良前半	0.623	0.157	1.28	0.753	0.450	0.264	2群	図5-1
64	〃	長頸壺	〃	0.568	0.184	2.1	0.599	0.343	0.290	2群	図2-7
68	〃	甕(平行)		0.587	0.210	1.31	0.666	0.615	0.291	2群	図26-8
69	〃	〃		0.695	0.217	1.85	0.709	0.498	0.266	2群	包含層C-2
70	〃	甕(格子)									包含層B-2

版 圖



図版1 調査前（南西より）



図版2 調査区全景（東より）

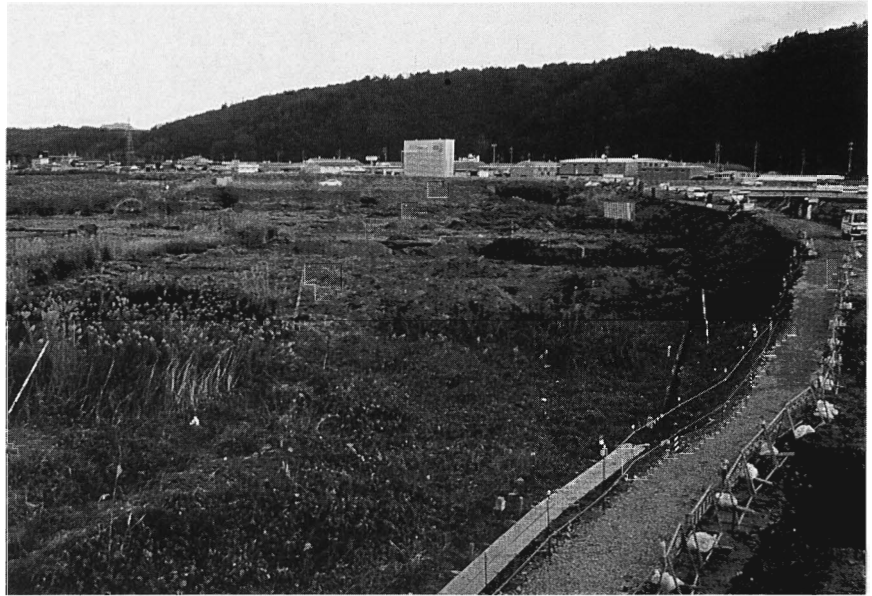


図版3 調査区全景（北西より）



図版4 調査区北壁土層

図版 5
試掘調査状況
(南西より)

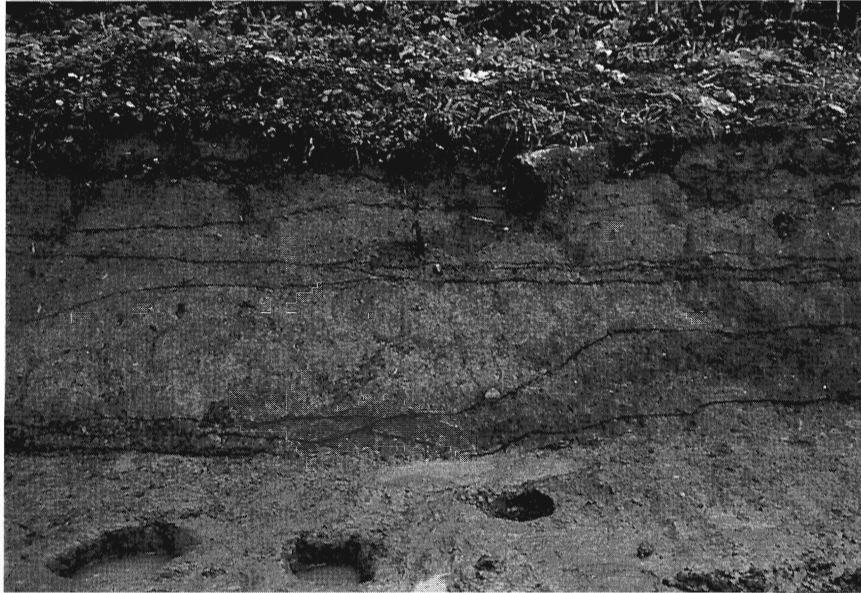


図版 6
試掘調査T 3 全景



図版 7
試掘調査T 12 全景





図版 8
調査区北壁土層（西側）

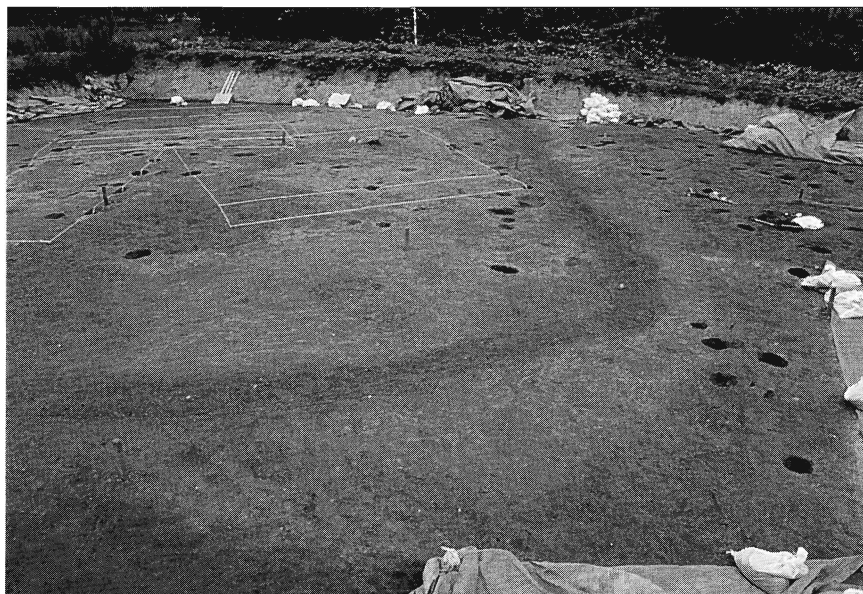


図版 9
調査区北壁土層（東側）



図版 10
調査区北壁土層
（遺物包含層下）

図版11
SD 1 検出状況
(南より)



図版12
SD 1 遺物出土状況



図版13
SD 2 検出状況
(北より)

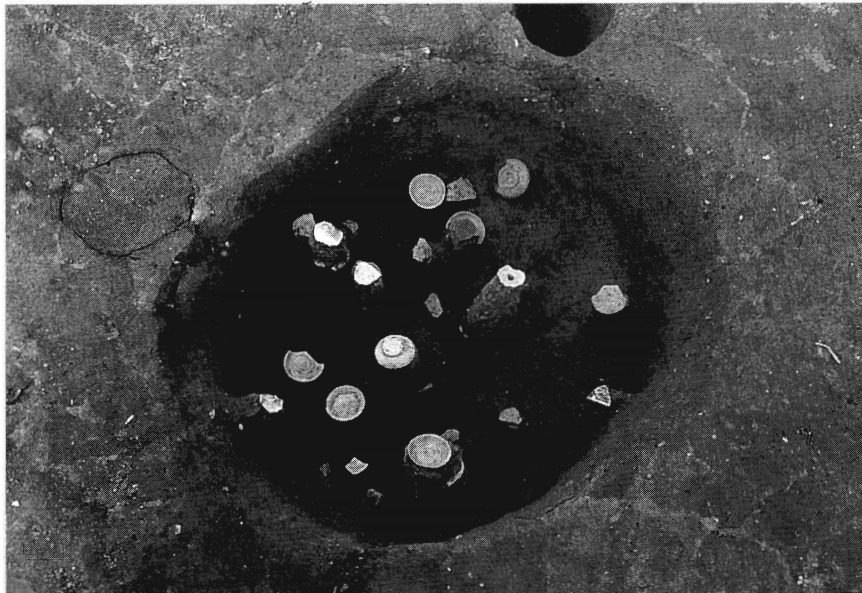




図版14
S D 2 遺物出土状況



図版15
S K 1 土層堆積状況



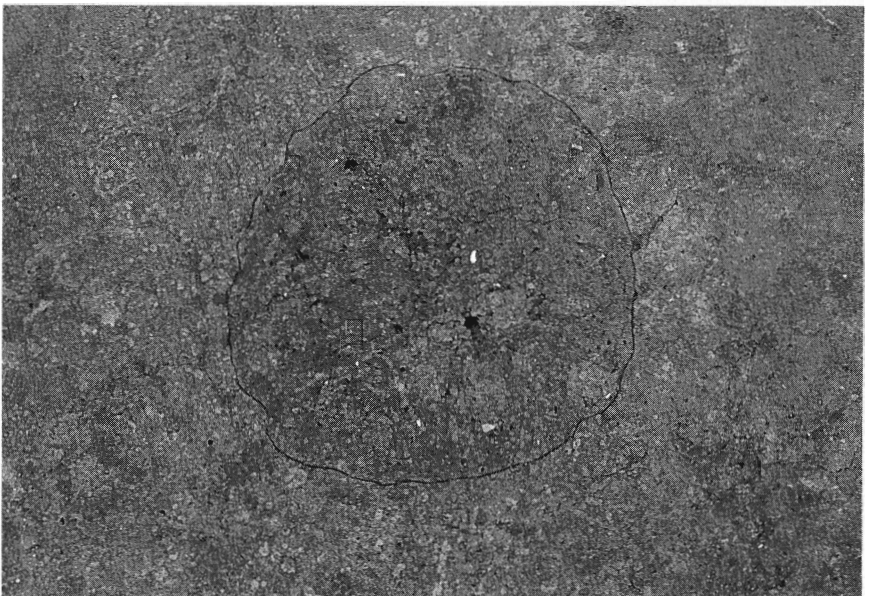
図版16
S K 1 全景



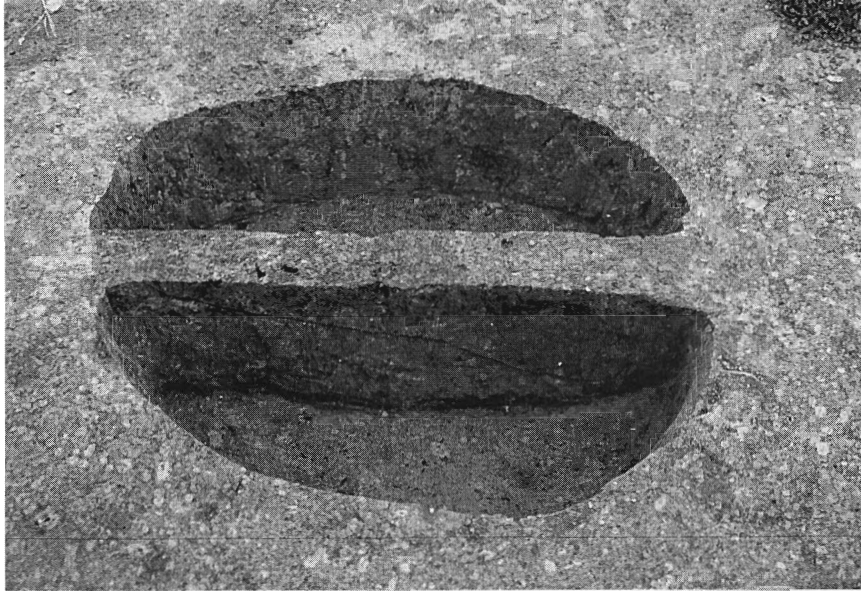
図版17
SK 2 土層堆積状況



図版18
SK 2 全景



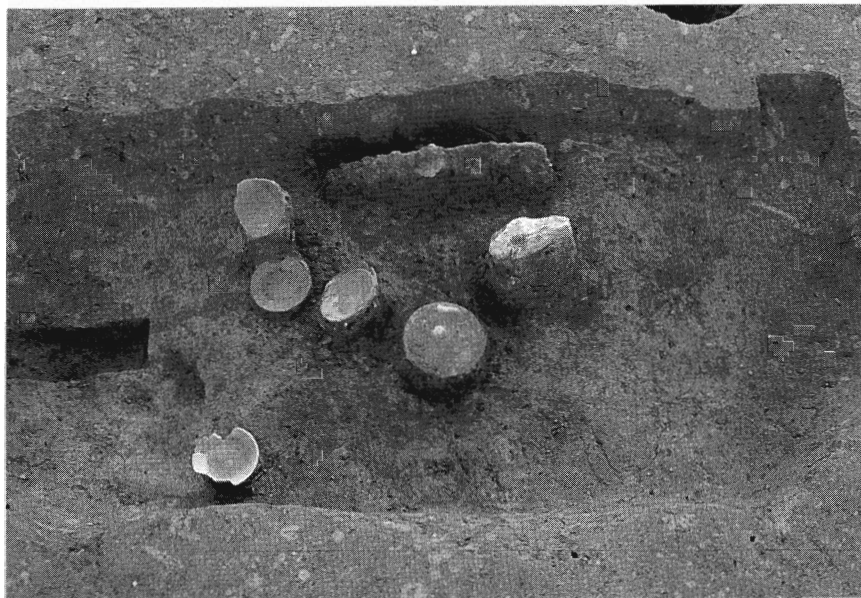
図版19
SK 3 検出状況



図版20
S K 3 土層堆積状況



図版21
S K 4 全景



図版22
S K 4 遺物出土状況



図版23
P114遺物出土状況



図版24
P83遺物出土状況



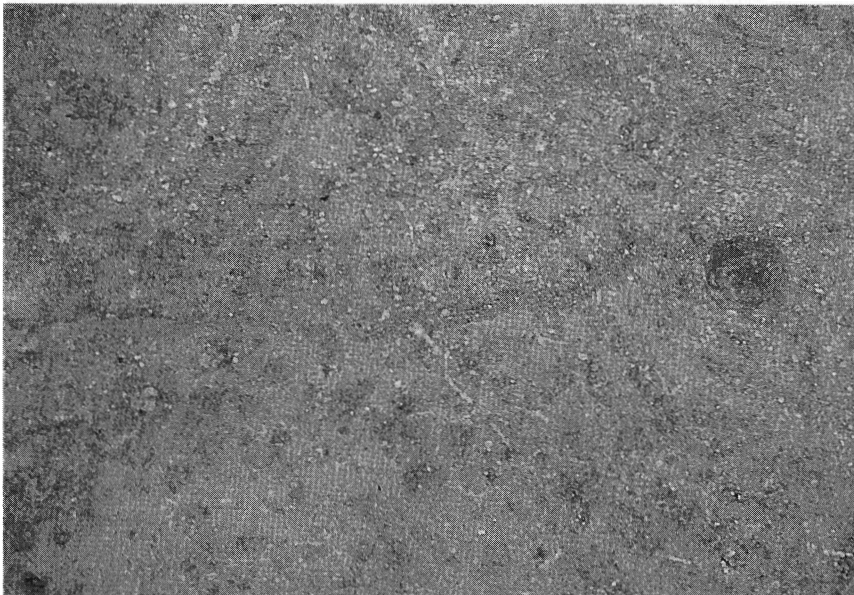
図版25
P141遺物出土状況



図版26
P339遺物出土状況

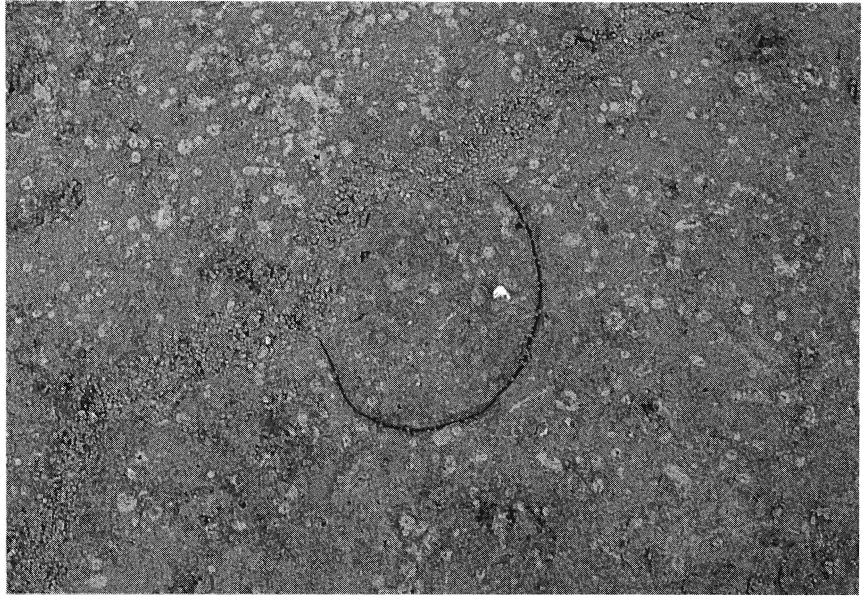


図版27
噴砂検出状況
(調査区南側中央)



図版28
噴砂検出状況
(調査区西側)

図版29
柱穴と噴砂
(調査区西側)



図版30
噴砂
(調査区西側)

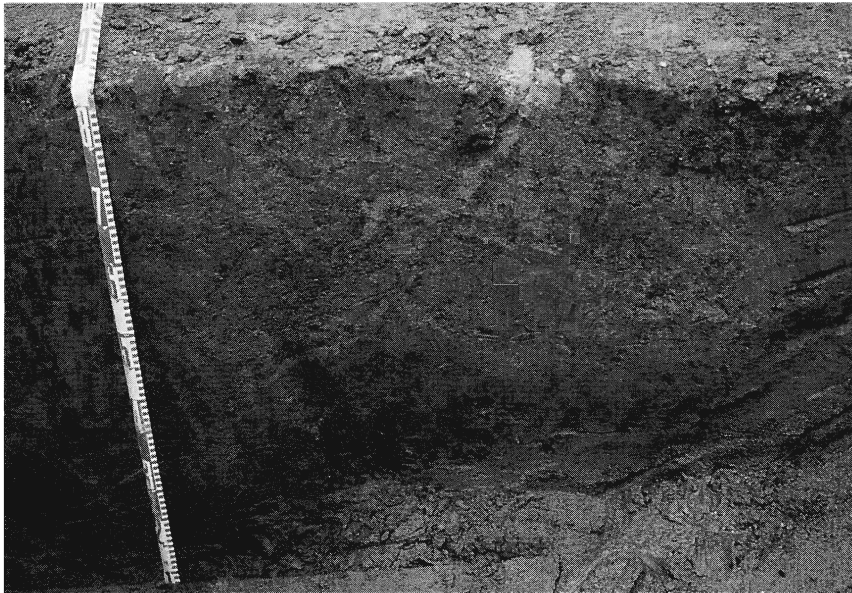


図版31
側方に枝脈を延ばした
東西性の砂脈(遺跡北東縁)





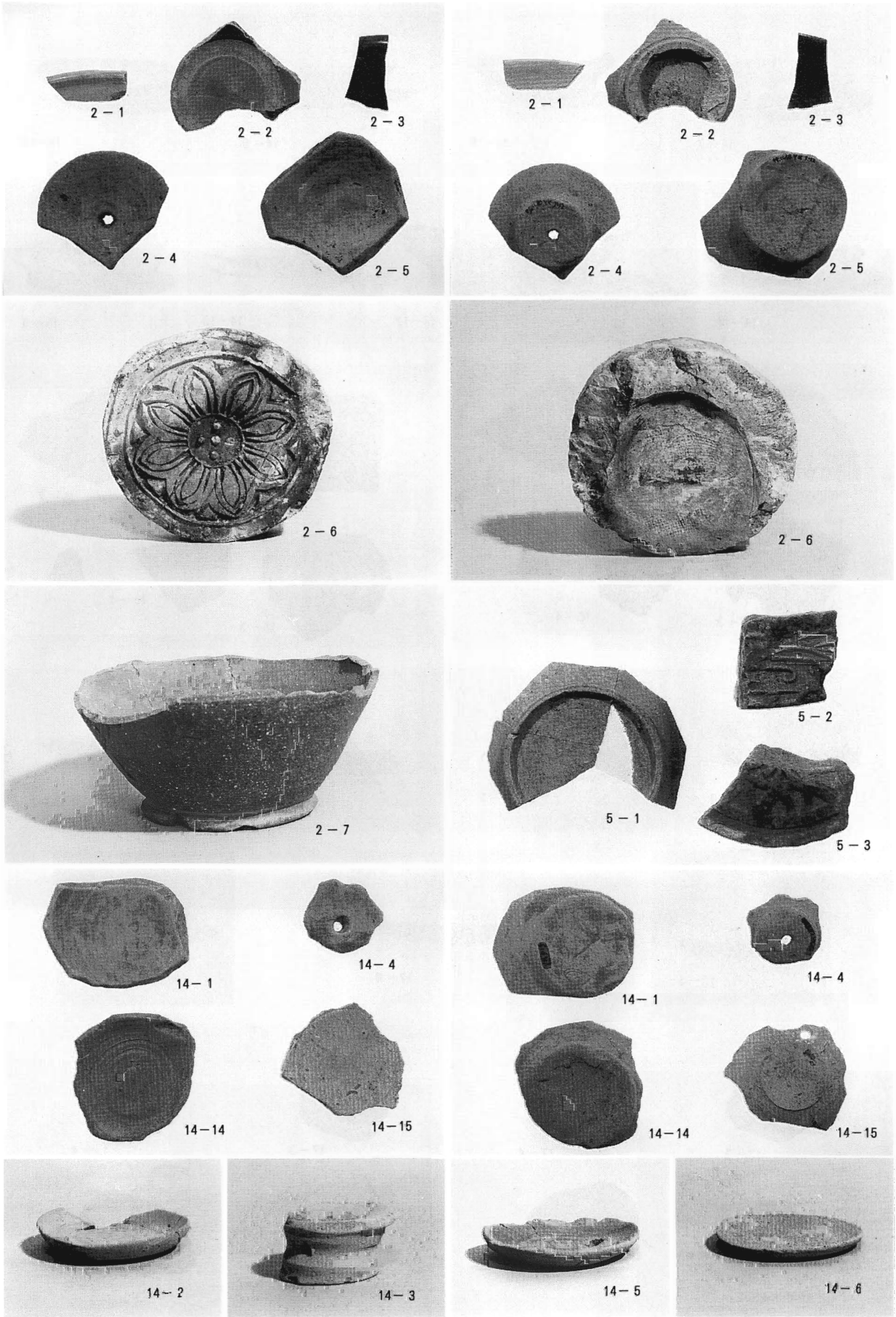
図版32
中礫を含む東西性の砂脈
(山内・中村 図-3の断面)



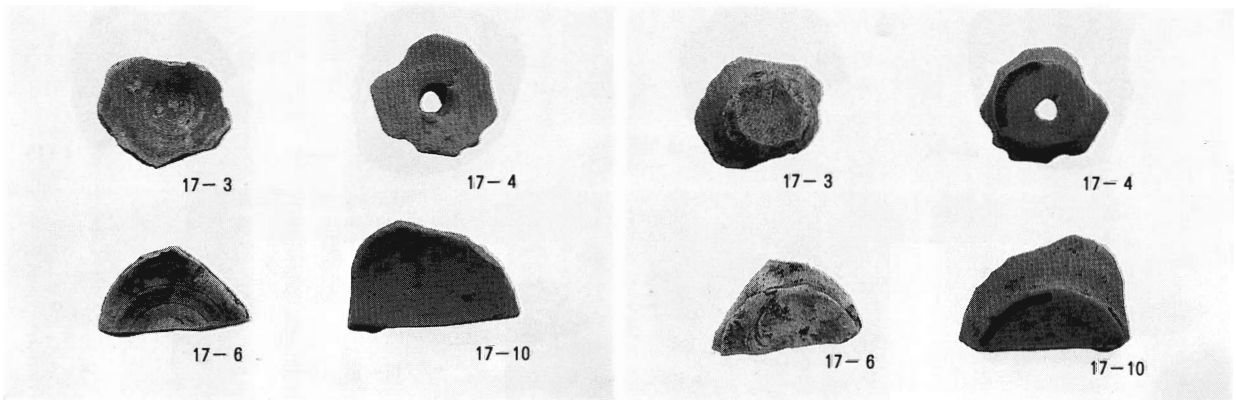
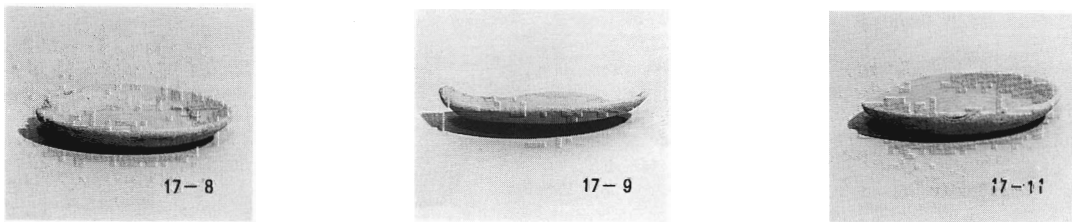
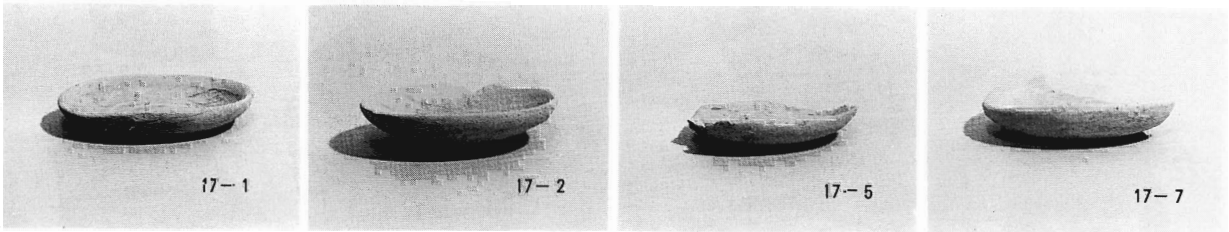
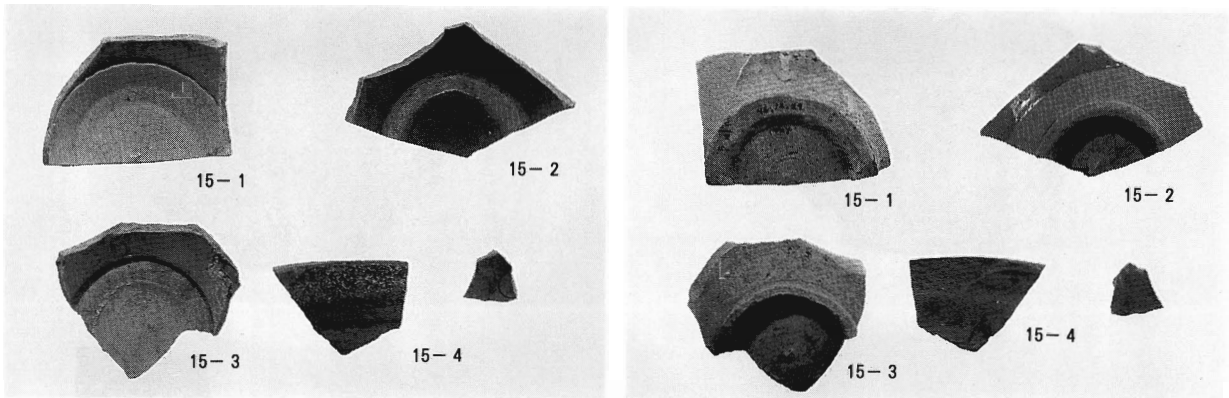
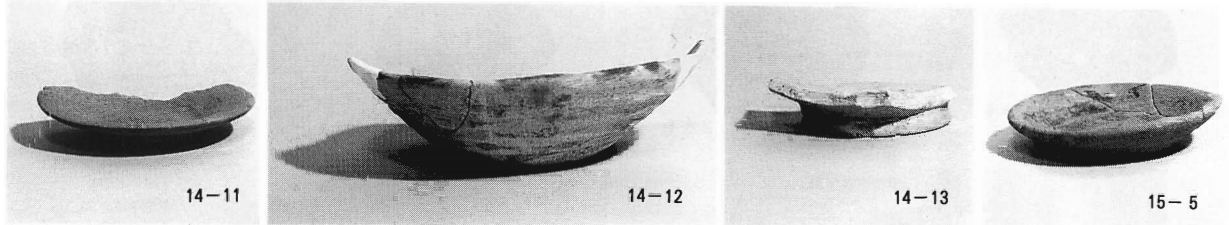
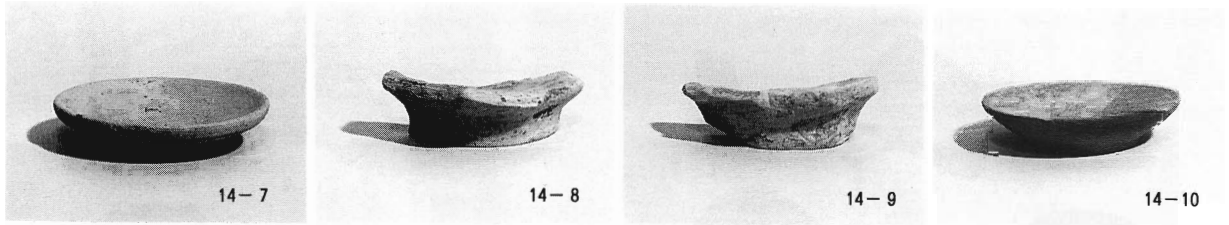
図版33
側方に不規則に延びた
南北性の砂脈(遺跡南西部)



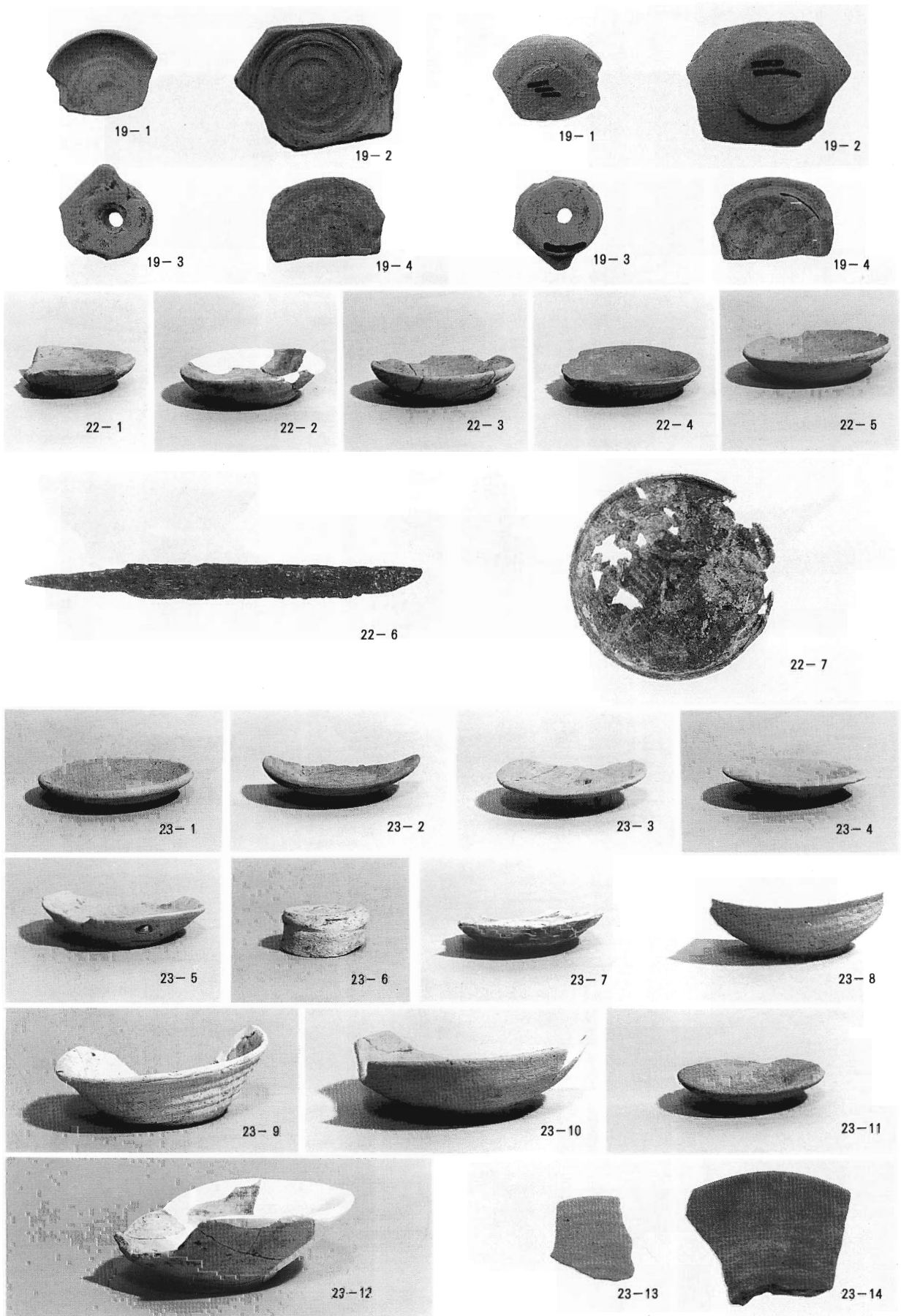
図版34
側方に不規則に延びた
南北性の砂脈(遺跡南西部)



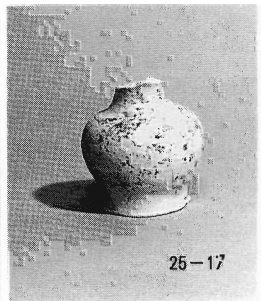
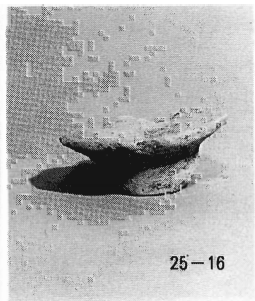
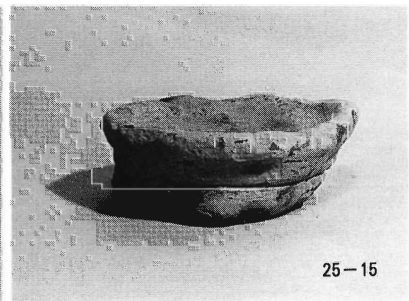
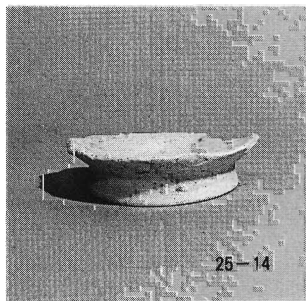
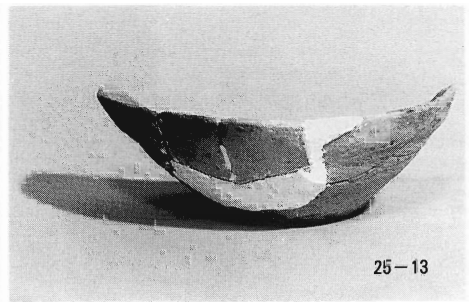
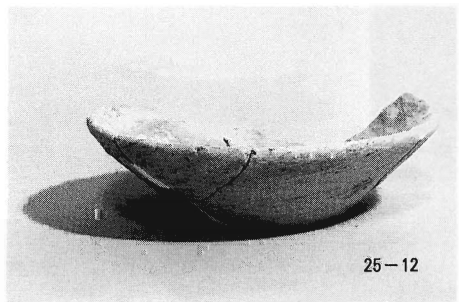
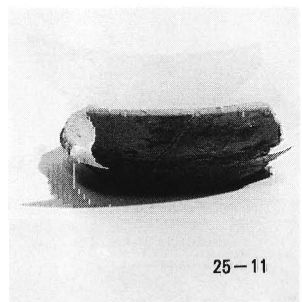
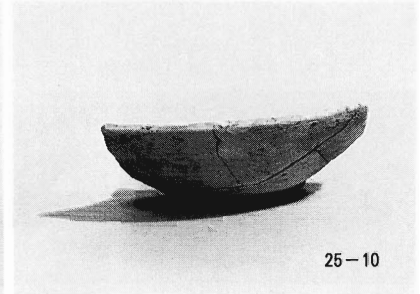
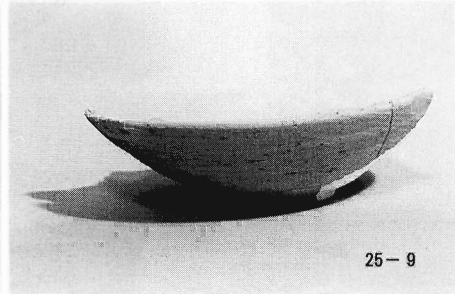
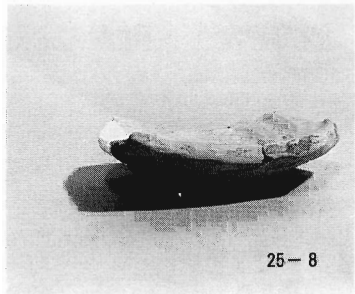
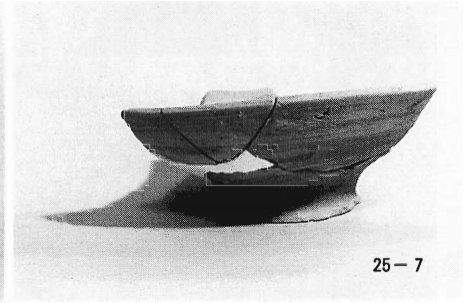
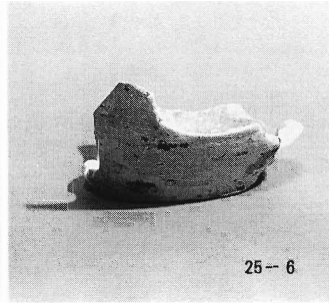
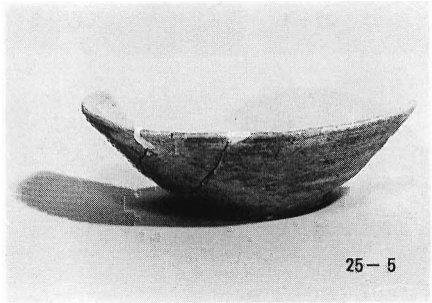
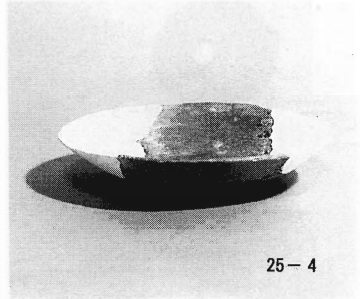
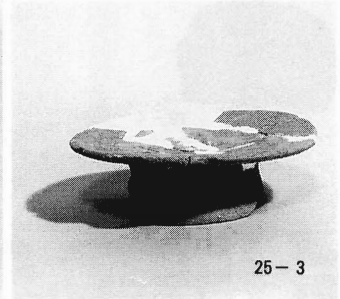
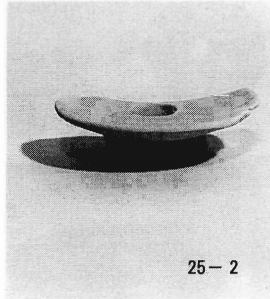
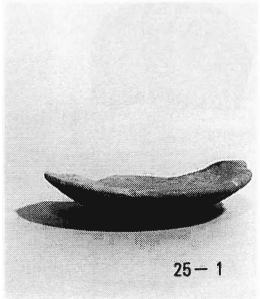
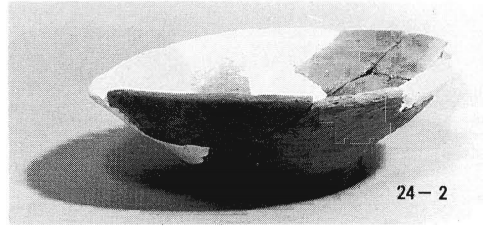
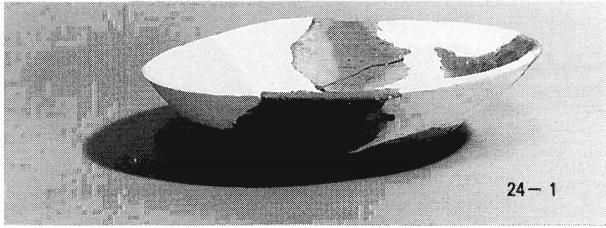
図版35 出土遺物(1)



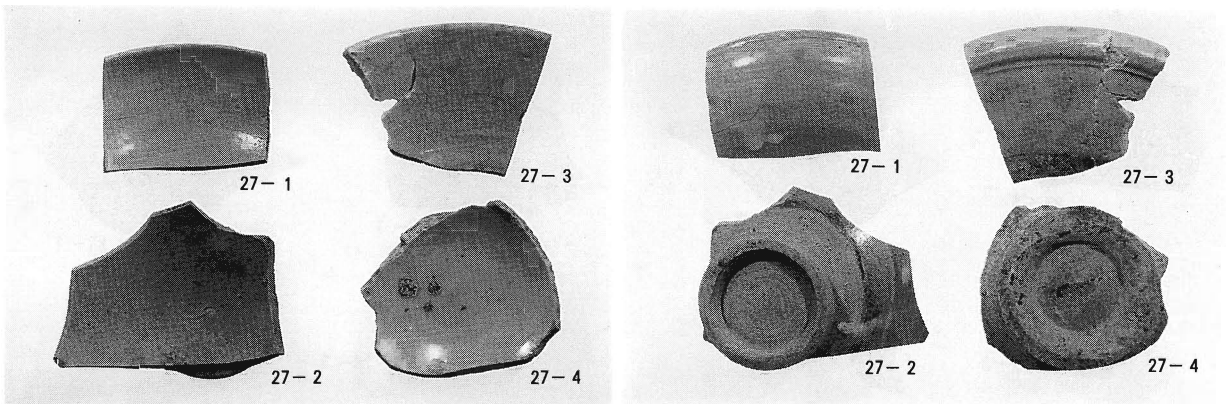
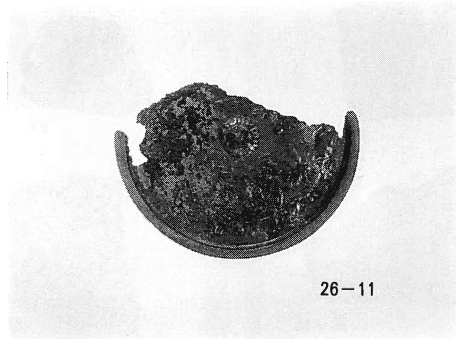
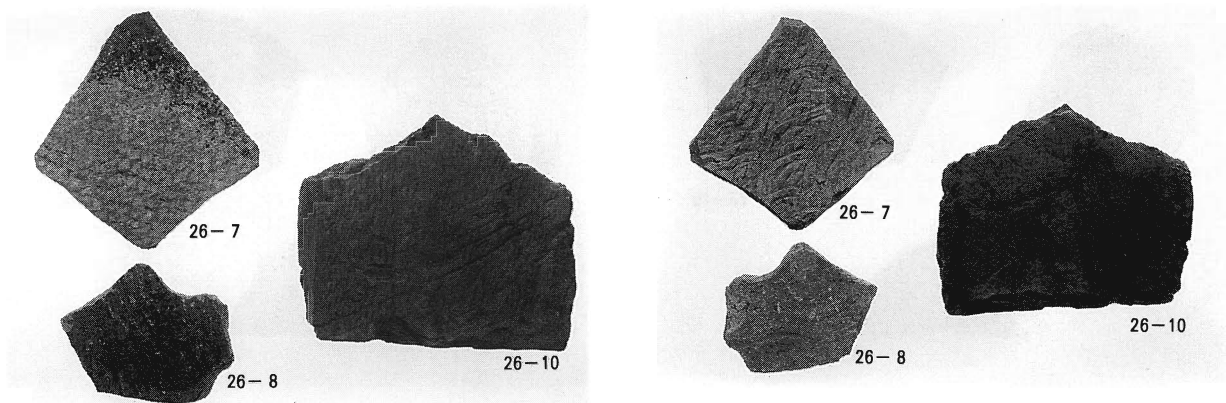
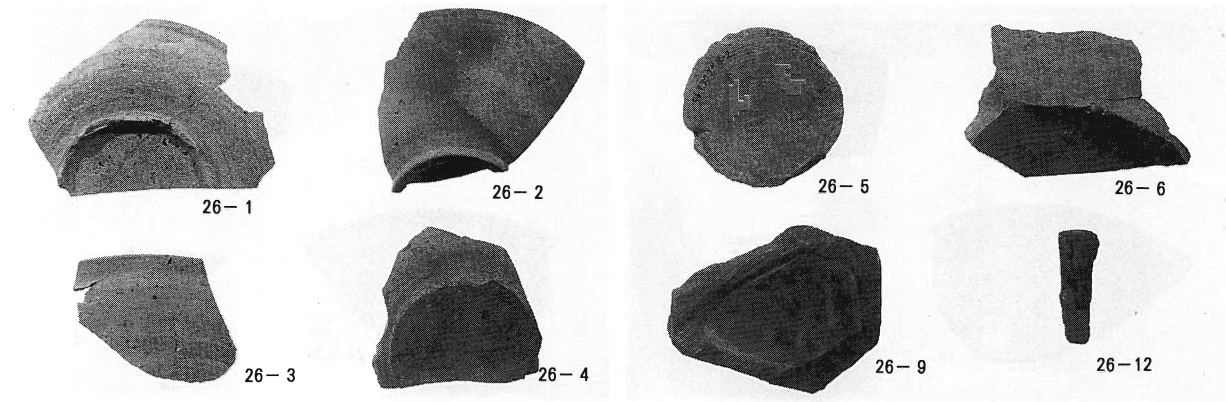
图版36 出土遺物(2)



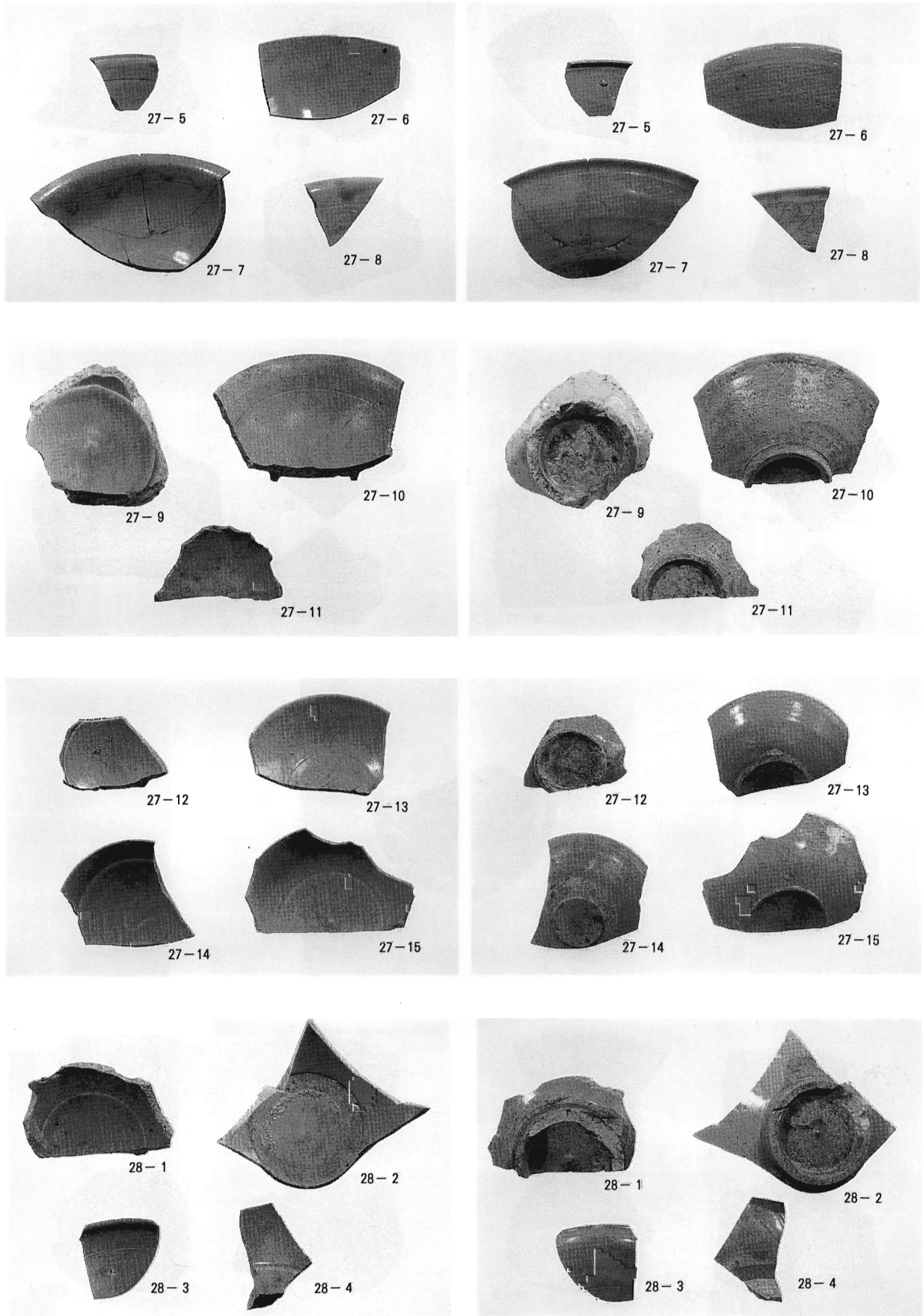
图版37 出土遺物(3)



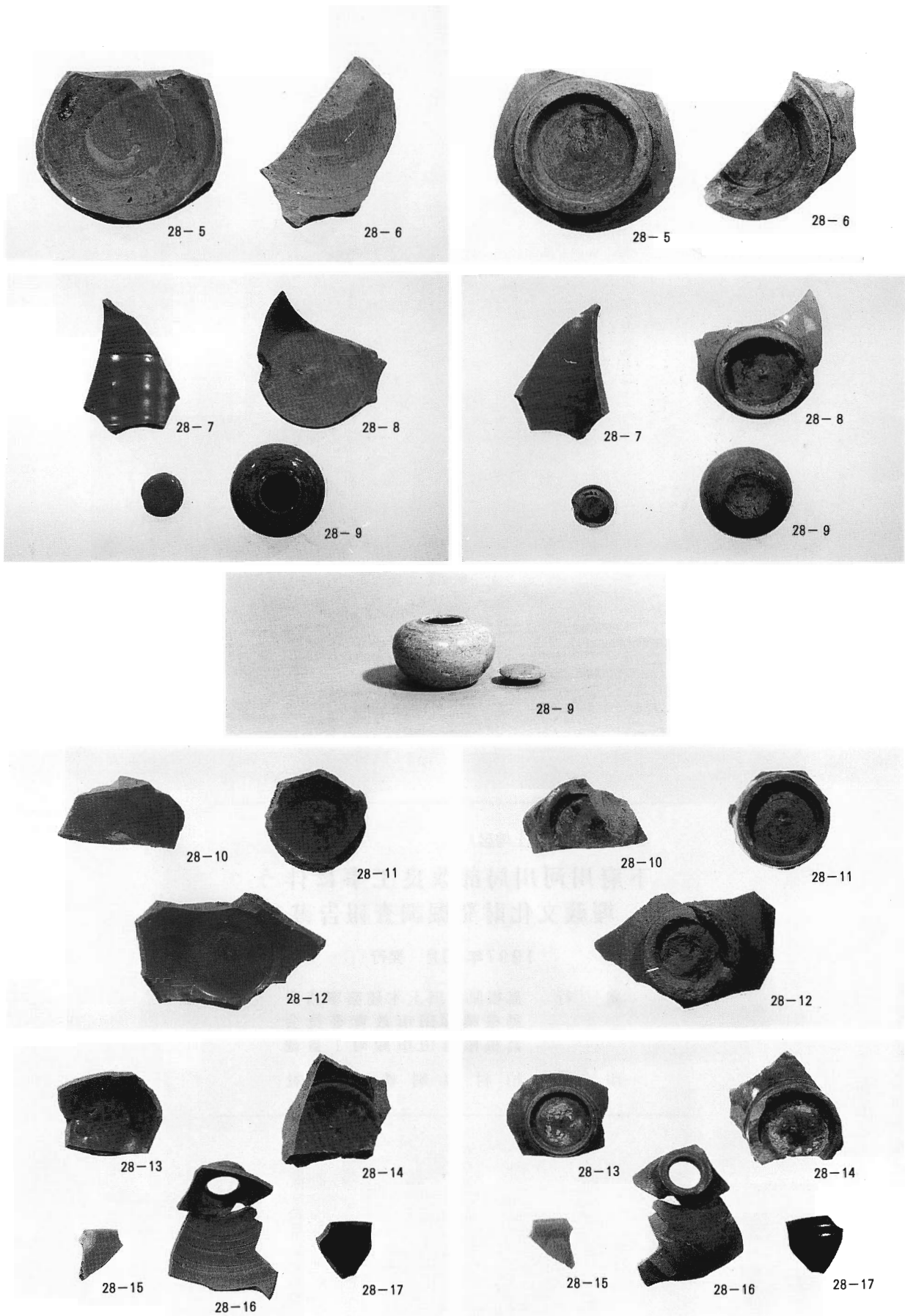
图版38 出土遺物(4)



图版39 出土遺物(5)



图版40 出土遺物(6)



图版41 出土遺物(7)

横路遺跡（土器土地区）

下府川河川局部改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年10月 発行

発 行 島根県浜田土木建築事務所
島根県浜田市教育委員会
島根県浜田市殿町1番地

印 刷 柏村印刷株式会社

報告書抄録

ふりがな	よころいせき (かわらけづちちく)							
書名	横路遺跡 (土器土地区)							
副書名	下府川河川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	榊原 博英							
編集機関	島根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 TEL 0855-22-2612 (代)							
発行年月日	1997年10月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° / ' / "	東 経 ° / ' / "	調 査 期 間	調 査 面積 m ²	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
よころいせき 横路遺跡 かわらけづちちく (土器土地区)	しまねけん 島根県 はまだし 浜田市 しもこう 下府町	32202		34° 55' 17"	132° 06' 52"	19960701~ 19971031	m ² 1,685	下府川河川 局部改良工 事に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項	
横路遺跡 (土器土地区)	集落跡 包含層	平安末~鎌倉	掘立柱建物跡 溝 墓	土師器 須恵器 白磁、青磁、中国陶器 和鏡、鉄刀			石見国府推 定地域内に 所在 明治5年の 浜田地震に よる噴砂を 確認	